新潟県埋蔵文化財調査報告書　第241集

一般国道８号

柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅵ

山　崎　遺　跡

２０１２

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道８号

柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅵ

山崎（やまざき）遺跡

２０１２

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道８号は新潟市を起点とし、日本海沿いに北陸地方を縦断し、京都市に至る総距離 561.2km の主要幹線国道です。新潟県と北陸地方及び京阪神地方を結ぶとともに、新潟県の産業・経済・文化の交流発展に大きな役割を果たしています。

しかし、現在の柏崎市域では、市街化の進展及び交通需要の増加に伴い、慢性的な交通混雑を引き起こしているのが現状です。柏崎バイパス建設事業は、このような問題を解決し、広域地域との交流の促進、都市交通の円滑化、都市機能の活性化などを目的に計画されました。

本書は、この柏崎バイパスの建設に先立ち、平成 22 年度に実施した山崎遺跡の発掘調査報告書です。

山崎遺跡は、古代（平安時代）と中世の遺跡で、古代の集落は、自然流路に近接して営まれていることから、河川交通の利用に適した場所であったことがうかがえます。自然流路には９世紀中葉～後半ころの遺物が多く廃棄されており、その中から須恵器杯や土師器椀の墨書土器が見つかりました。墨書土器は「中山」と書かれているものが多く、また草花を描いたものも１点あります。文字や記号以外の、自然物を対象に描く例は珍しいことから注目されます。中世の遺構では、居住域と生産域をつなぐ、出入口の可能性がある区画溝を検出しました。調査区外の南側に、今後中世集落の中心部が見つかる可能性があります。

発掘調査で得られた資料や本報告書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されるものと期待しています。

最後に、この発掘調査で多大な御協力と御理解をいただいた柏崎市教育委員会、柏崎市都市整備部八号バイパス事業室、並びに地元の方々、また発掘調査から本書の作成まで、格別な御配慮をいただいた国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所に対して、厚くお礼を申し上げます。

平成 24 年９月

新潟県教育委員会

教育長　高　井　盛　雄

例　　言

1　本書は、新潟県柏崎市大字藤井字山崎 1691−1 番地ほかに所在する山崎遺跡の発掘調査記録である。

2　発掘調査は一般国道 8 号柏崎バイパスの建設に伴い、国土交通省から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したものである。

3　発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に依頼した。

4　埋文事業団は、掘削作業等を株式会社吉田建設に委託して発掘調査を実施した。

5　整理作業及び報告書作成に係る作業は、2012 年度に埋文事業団が県教委から受託し、これにあたった。

6　出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記は、調査年（西暦下 2 桁）＋山崎遺跡の略記号「山サキ」とし、出土地点や層位等を併記した。

7　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。

8　本書に掲載した遺物番号は種別に係りなく通し番号とし、本文及び挿図・遺物観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。

9　引用・参考文献は、著者及び発行年（西暦）を本文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。本文中の敬称は略した。

10　調査成果の一部は、広報紙「埋文にいがた」、「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報」、遺跡発掘調査報告会等で公表しているが、本書の記述をもって正式な報告とする。

11　遺構図のトレース及び各種図版作成・編集に関しては、有限会社不二出版に委託して、デジタルトレースと DTP ソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。

12　墨書土器で墨痕が不明瞭なものについては、有限会社モノクローム新潟に委託してデジタルカメラによる赤外線撮影を実施した。

13　本書の執筆は、石川智紀（埋文事業団　専門調査員）、細井佳浩・山下　研・今井昭俊（株式会社吉田建設　調査員）があたり、編集は石川が担当した。執筆分担は以下のとおりである。なお、石川以外の執筆者は 2011 年 3 月末に脱稿したが、その後の整理の進展に伴い、石川が一部加筆・修正を行った。

第Ⅰ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章 1、第Ⅵ章 1……石川

第Ⅴ章 1・2A 1)・2)、第Ⅵ章 2……細井

第Ⅱ章 1、第Ⅳ章 2……山下

第Ⅱ章 2、第Ⅴ章 2A 3)・4)・2B……今井

14　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力をいただいた。ここに記して厚くお礼を申し上げる。（敬称略　五十音順）

安藤正美　　水澤幸一　　柏崎市教育委員会　　柏崎市都市整備部八号バイパス事業室

柏崎土地改良区　　田塚町内会　　田塚農家組合

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査と整理作業の経過 …… 2

A　試 掘 調 査 …… 2

B　本発掘調査 …… 2

3　調 査 体 制 …… 4

A　試 掘 調 査 …… 4

B　本発掘調査 …… 4

4　整理作業と整理体制 …… 5

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 6

1　地理的環境 …… 6

2　歴史的環境 …… 8

第Ⅲ章　調査の概要 …… 11

1　グリッドの設定 …… 11

2　基 本 層 序 …… 11

第Ⅳ章　遺　　構 …… 13

1　記述の方法と遺構の分類 …… 13

A　基 本 方 針 …… 13

B　遺構番号の表記方法 …… 13

C　遺構の形態分類 …… 13

2　遺 構 各 説 …… 14

A　古代の遺構 …… 14

1）掘立柱建物 …… 14　　2）井　　戸 …… 15

3）土　　坑 …… 15　　4）溝 …… 18

5）ピ　ッ　ト …… 18　　6）自 然 流 路 …… 19

B　中世以降の遺構 …… 20

1）土　　坑 …… 20　　2）溝 …… 20

3）ピ　ッ　ト …… 22　　4）性格不明遺構 …… 22

第Ⅴ章　遺　　物 …… 23

1　遺物の概要 …… 23

2　遺物の各説 …… 23

A　古代の遺物 …… 23

1）須　恵　器 …… 23　　2）土　師　器 …… 26

3）木器・木製品 ……29　4）金 属 製 品 ……30
B　中世以降の遺物 ……31
1）珠洲焼・陶磁器類・土製品 ……31　2）木器・木製品 ……32
3）石　製　品 ……33　4）銭　　貨 ……33

第Ⅵ章　ま　と　め ……34
1　遺構・遺物から見た遺跡の位置付け ……34
2　古代の土器について ……35
A　出土土器の編年的位置付け ……35
1）出土土器の概観 ……35　2）編年的位置付け ……38
B　墨書土器について ……39

《要　約》 ……41
《引用・参考文献》 ……42
《観察表》 ……44

挿 図 目 次

第 1 図　柏崎バイパスの法線と遺跡の位置 …… 1
第 2 図　試掘トレンチ位置図と本調査必要範囲…… 2
第 3 図　柏崎周辺の地形 …… 7
第 4 図　周辺の古代・中世の遺跡…… 9
第 5 図　グリッド設定と基本層序……12
第 6 図　遺構の形態分類図……13
第 7 図　須恵器無台杯の底部切り離し方法……23
第 8 図　須恵器（左）・土師器（右）の重量分布図‥24
第 9 図　須恵器の器種分類……25
第10図　土師器類の器種分類……27
第11図　木取り及び木材一般の部分名称……29
第12図　木取りの分類……29
第13図　須恵器無台杯の法量（1）……36
第14図　須恵器無台杯の法量（2）……36
第15図　土師器無台椀の法量（1）……36
第16図　土師器無台椀の法量（2）……36
第17図　須恵器無台杯の器高・底径指数……36
第18図　土師器無台椀の器高・底径指数……37
第19図　山崎遺跡と『箕輪遺跡Ⅰ』の墨書・漆書土器 ……40

表　目　次

第1表　周辺の遺跡一覧表…… 9
第2表　遺構の形態分類表……13
第3表　須恵器等の器種構成比率……35
第4表　SR1（3・4層）の器種構成比率 ……35

図 版 目 次

【図面図版】

図版１　遺跡全体図
図版２　遺構配置図（1）
図版３　遺構配置図（2）
図版４　遺構分割図（1）、遺構個別図（1）
図版５　遺構分割図（2）
図版６　遺構個別図（2）
図版７　遺構個別図（3）
図版８　遺構分割図（3）
図版９　遺構分割図（4）
図版10　遺構個別図（4）
図版11　遺構個別図（5）
図版12　遺構分割図（5）
図版13　遺構分割図（6）
図版14　遺構個別図（6）
図版15　遺構個別図（7）
図版16　遺構分割図（7）
図版17　遺構分割図（8）
図版18　遺構個別図（8）
図版19　古代の遺構・自然流路出土（1）の須恵器
図版20　古代の自然流路出土（2）の須恵器
図版21　古代の自然流路出土（3）・包含層出土の須恵器、古代の遺構出土（1）の土師器
図版22　古代の遺構出土（2）・自然流路出土（1）の土師器
図版23　古代の自然流路出土（2）の土師器
図版24　古代の自然流路出土（3）の土師器
図版25　古代の木製品（1）
図版26　古代の木製品（2）
図版27　古代の木製品（3）、古代の金属製品
図版28　中・近世の土器・陶磁器・土製品
図版29　中・近世の漆器・木製品・石製品・銭貨

【写真図版】

図版30　山崎遺跡の位置、北区完掘状況
図版31　基本層序、北区完掘状況、遺構断面、検出状況、遺跡遠景、作業風景
図版32　遺構個別写真（1）、完掘状況
図版33　基本層序、遺構個別写真（2）
図版34　遺構個別写真（3）
図版35　遺構個別写真（4）
図版36　遺構個別写真（5）
図版37　遺構個別写真（6）
図版38　遺構個別写真（7）
図版39　遺構個別写真（8）
図版40　遺構個別写真（9）
図版41　遺構個別写真（10）
図版42　遺構個別写真（11）
図版43　古代の遺構・自然流路出土の須恵器（1）
図版44　古代の自然流路出土の須恵器（2）
図版45　古代の自然流路出土の須恵器（3）
図版46　包含層出土の須恵器、古代の遺構出土の土師器
図版47　古代の自然流路出土の土師器（1）
図版48　古代の自然流路出土の土師器（2）
図版49　古代の自然流路出土の土師器（3）
図版50　古代の自然流路出土の土師器（4）、古代の木製品（1）
図版51　古代の木製品（2）
図版52　古代の木製品（3）、古代の金属製品、中世以降の遺構出土の土器・陶磁器
図版53　中世以降の包含層出土の土器・陶磁器、中世以降の木製品・石製品・銭貨
図版54　墨書土器の赤外線写真

第Ⅰ章　序　　説

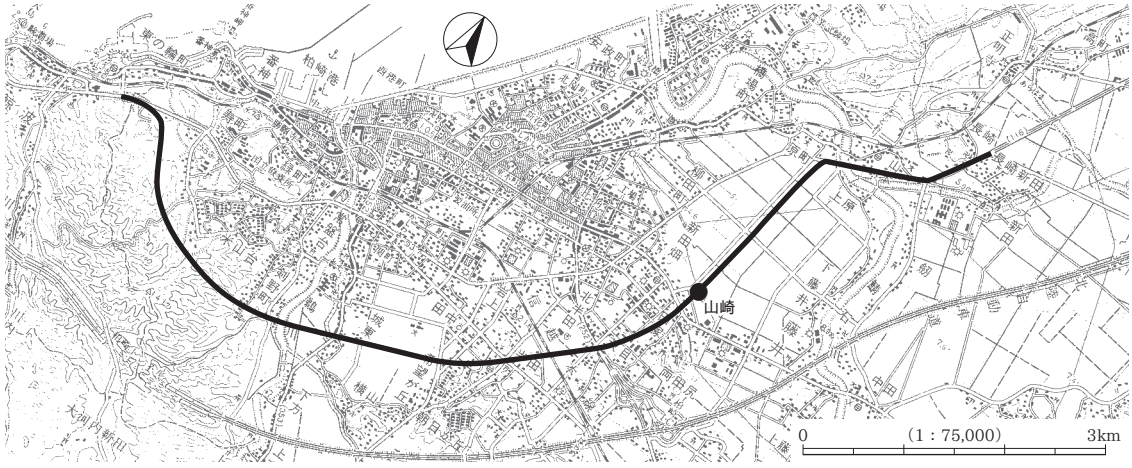
1　調査に至る経緯

「一般国道８号柏崎バイパス」は、柏崎市長崎を起点に、同市鯨波に至る延長 11.0km の幹線道路である。交通混雑の解消、広域地域との交流の促進、都市交通の円滑化、都市機能の活性化などを目的に計画され、1987（昭和 62）年度に事業化された。1991（平成３）年度から用地買収、1993（平成５）年度から工事着手して整備が進められている。これを受けて、建設省（現国土交通省、以下、国交省）と新潟県教育委員会（以下、県教委）との間で、事業用地内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

柏崎市東原町（豊田橋左岸）～茨目（国道 252 号）間の分布調査は、県教委から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が 2002（平成 14）年７月に実施した。道路法線上に周知の遺跡は存在しないが、沖積地の広範囲で古代・中世・近世の遺物が採集でき、遺跡の存在する可能性が高いことから、ほぼ全域について試掘調査が必要である旨を県教委に報告した。

山崎遺跡に係る試掘調査は、埋文事業団が 2009（平成 21）年 11 月に実施し、ほとんどの試掘坑から古代を主体とする遺物が出土した。また、同時期の可能性がある遺構や、遺物を包含する自然流路も検出し、山崎遺跡として新規登録した。この時点での本発掘調査必要面積は、4,660m^2 である。また、その北側にも遺物を包含する自然流路の存在が予想されたため、再調査が必要とし、その範囲を判断保留とした。

2010（平成 22）年度の本発掘調査か所は、ほかの公共事業との調整もあり、最終的に 2010 年３月に決定した。柏崎バイパス関係では、千古作遺跡の 1,250m^2 が本発掘調査対象となった。国交省から調査を受託した県教委は、埋文事業団に実施を依頼した。埋文事業団は一般国道 253 号上越三和道路関係の調査終了後、８月下旬から着手予定であった。しかし、その後、遺跡に近接する本体工事の工事期間が 11 月までかかることが判明し、７月 22 日に千古作遺跡で三者協議（国交省･県教委･埋文事業団）を行った。その結果、千古作遺跡の調査は 2011（平成 23）年度に見送り、山崎遺跡の本発掘調査に着手することにした。工事内容による取り扱い協議の結果、1,780m^2 が本発掘調査対象となり、９月から調査を開始した。



第１図　柏崎バイパスの法線と遺跡の位置
〔国土地理院「柏崎」「岡野町」1：50,000 を縮小〕

2　調査と整理作業の経過

A　試　掘　調　査

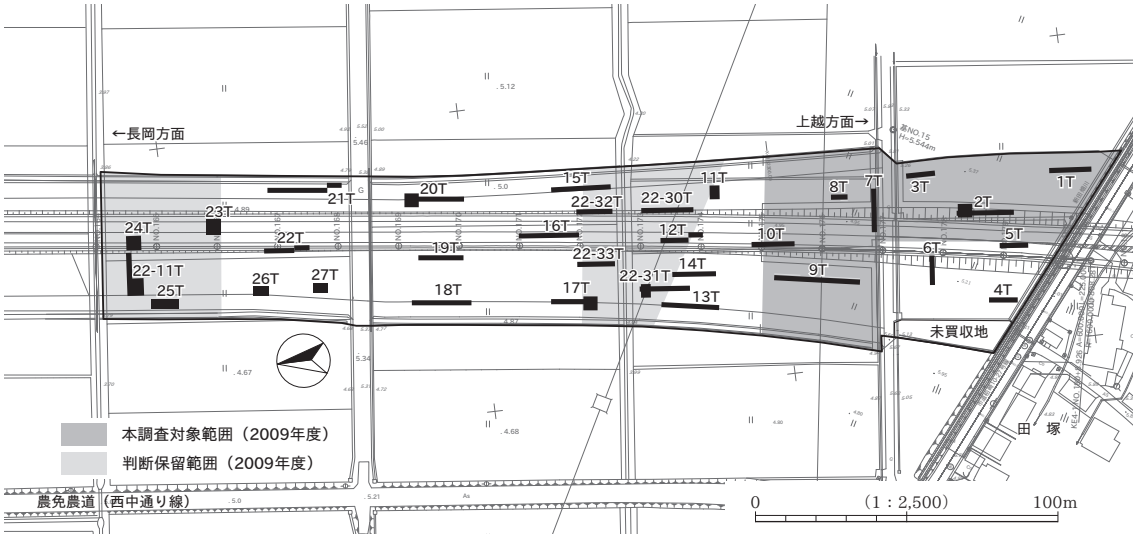
山崎遺跡に係る調査は、2009（平成 21）年 11 月 9 日～27 日に実施し、柏崎バイパス用地（杭 No.164～180 付近）約 17,280m² を対象に、約 775m² を調査した。27 か所のトレンチ（略号、T）を設定して調査したところ、1T で土坑 1 基、溝 1 条、21T でピット 1 基を検出した。3・8・9・15・24T では自然流路を検出し、遺物がまとまって出土した部分もあることから、廃棄遺構（捨場）としての性格も想定された。

また、5・19T を除くトレンチから、古墳時代前期土器・須恵器・土師器・珠洲焼・土師質土器等が出土した。古代の遺物が多く、ほぼ調査対象地の全域に散布している。東側から西側へ向かって量が多→少、サイズが大→小の傾向が認められた。遺構・遺物の検出状況を考慮し、4,660m² について本発掘調査（以下、本調査）が必要と判断された。遺跡新発見の地点であったことから、山崎遺跡と呼称することにした。また、遺物を包含する自然流路の存在が予想される 2 か所の範囲が、判断保留となった。

2010（平成 22）年 10 月 27・28 日に、本調査と併行して、判断保留となった範囲（センター杭 No.172～174 付近）約 1,880m² を対象に、4 か所のトレンチ（22–30 ～ 33T）、約 99m² を調査した。22–31T で中世以前の可能性が高い土坑 1 基、溝 1 条を検出し、22–32T と 22–33T で、15T（21 年度調査）の自然流路と同じ流路を検出した。自然流路から遺物は検出できず、廃棄場が存在する可能性は低くなった。古代の遺物が 22–31T・22–32T で少量出土したが、密度は希薄であり、当時の居住域から離れた場所であることが想定できた。よって、検出遺構のみを本調査の対象とし、遺構の広がりを捉えた上で本調査対象範囲を決定することにした。

B　本 発 掘 調 査

山崎遺跡の本調査範囲は、県教委からの依頼（平成 22 年 8 月 24 日付け教文第 635 号の 2）に基づき、1 期線と工事影響範囲の計 1,780m² に限定された。調査区の現況は水田で、住宅地が南側に近接しており、



第 2 図　試掘トレンチ位置図と本調査必要範囲

騒音・振動に十分注意しながら作業を進めるようにした。調査区中央には東西に横断する農道があり、通行可能な状態で維持する必要があった。調査区は農道で分割され、便宜上「北区」・「南区」と呼称した。

2010（平成22）年9月13日から調査員立会いのもと、重機（バック・ホー）で南区からの表土掘削を開始した。21日に南区を終了し、22日から10月1日にかけて北区を行った。表土掘削と同時に、包含層も重機で慎重に掘削し、可能な限り遺構検出面まで露出するようにした。10月1日から作業員を本格的に投入し、調査区周囲の開渠掘削を行った。人力調査は南区から着手し、10月5日から遺構検出、12日から遺構掘削を開始した。土質は軟弱なのに加えて非常に粘性が高く、予想以上に期間を費やした。また天候が不順で、降水量の多さも難航の要因となった。遺物の出土は希薄であり、遺構も当初は南北両端に数基認められる程度であった。しかし、覆土が地山色と近似したピット群が、16・17Fグリッドで検出され、再度全面的に遺構検出する必要が生じた。北区の調査にも徐々に着手し、10月21日から遺構検出を開始した。自然流路が北区の大部分を占めていたため、トレンチを入れて深度や遺物の有無を調べた。上位の層で遺物が多く出土し、下位で遺物の集中区を確認した。よって人力で掘削する必要があると判断し、階段的に掘り下げながら調査を進めることにした。

10月上旬に国交省側から、当初の1期線分（北区中央・南区中央）約1,780m^{2}に追加して、側道を除く2期線分（北区西側・北区東側・南区東側）約2,085m^{2}も年度内に調査終了するように要望があった。冬季まで調査が延びる可能性が高いことから、文化財側で工程の検討を行った。その結果、調査員・作業員等を増員して対応することで終了可能と判断し、10月14日に県教委から受託した。また、10月28・29日の試掘調査で要本調査と判断された範囲（北区北側）も、同時に調査することにした。

北区中央の遺構掘削と併行して、2期線分の調査の諸準備を進め、11月10日から北区西側の表土掘削を開始した。北区中央の自然流路の調査も進み、西側寄りには遺物が少ないことが判明してきた。そこで北区西側の自然流路は、重機で大部分を掘削することにした。表土・包含層・自然流路の掘削を11月22日に終了し、11月25日から北区東側に移動した。北区東側は農道寄りの14Eグリッドから着手したが、この範囲にも自然流路が蛇行して延びてきていることが確認できた。北区西側同様に、自然流路は重機で掘削する予定であったが、墨書土器を含む土器類が底面付近で多く出土したため、その範囲は人力調査に切り替えることにした。北区東側の重機による掘削は、12月3日に終了した。

北区北側の調査は、11月2日から9日にかけて試掘トレンチを拡張し、本調査の必要範囲約110m^{2}を確定した。11月19日から26日に遺構掘削・記録作業等を行い、26日午後に埋め戻しを行った。

南区の農道寄りは、重機を横断させる必要があること、長期の雨により法面が崩れてきたことなどから早急に埋め戻す必要が生じた。よって、この範囲の調査を集中的に実施し、11月30日に高所作業車を使用して部分的な完掘撮影を行った。移設を予定していた農道は、自然流路の直上に位置していることが判明した。その両脇の調査状況や農道・水路への今後の影響を考慮し、県教委と協議の上、農道下は調査不要と判断された。12月6日から8日にかけてこの範囲の埋め戻しを行った。

北区東側の自然流路の肩口～下層から遺物が多く出土したため、そこにかかる機能中の土管暗渠を撤去する必要が生じた。12月8日に地元代表者に排水計画を説明し、調査終了後に復旧することで撤去の了解を得た。北区中央・西側と異なり、平場で古代の土坑・井戸・柱穴等の小規模な居住域を検出した。東側に広がる傾向にあることから、この範囲が居住域の南端であることが想定された。年末にかけて降雪が予想されたことから、遺構掘削の大部分を12月20日までに終了させ、12月22日に高所作業車を使用して北区全体の臨時的な完掘撮影を行った。その後、残った遺構を掘削し、12月27日に調査を一時中

断した。

2011 年 1 月 5 日から作業を再開した。南区東側の表土・包含層掘削は、重機を使用して 12 月 10 日から 21 日に終了していたので、遺構検出から開始した。降雪日が多いので、1 日の作業範囲を限定し、除雪→遺構検出→遺構掘削を繰り返して小刻みに作業を進めた。遺構掘削は 1 月 17 日に終了し、遺構が多い南区南端の約 400m^2 のみ除雪と清掃をして、1 月 18 日に全体撮影を行った。また同日、掘削がおおむね終了していることから、文化行政課の終了確認を受けた。その後、空撮に備えて調査区全体の除雪作業を進めたが、連日の降雪となり、1 月 26 日の空撮日も調査区内に雪が多く残る状況であった。遺構の縁が判別できる程度の狭い範囲を除雪し、空撮を実施した。北区東側の居住域（11・12D・F グリッド）には、検出できなかったピットが存在する可能性があったので、1 月 27 日に重機により面的に 20cm 程掘り下げた。数基のピットを検出し、28 日に掘削、29 日に測量を行い、記録作業に伴うすべての作業を終了した。

作業終了後に、調査区全域を文化財側で埋め戻す計画であったが、ほぼ全面に積雪していることから、期間を延長する必要があった。国交省の了解を得て、3 月 1 日から埋め戻しを開始することにし、3 月 16 日に終了した。土管暗渠や農道の復旧も同時に終了させ、現地を撤収した。

3 調 査 体 制

試掘調査・本発掘調査は、以下のような期日と体制で行った。

A 試 掘 調 査

調査期間	2009（平成 21）年 11 月 9 日～ 27 日	2010（平成 22）年 10 月 27 日・28 日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）	新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）
調　　査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	木村　正昭（事務局長）	木村　正昭（事務局長）
管　　理	斎藤　　栄（総務課長）	今井　　亘（総務課長）
庶　　務	松原　健二（総務課班長）	伊藤　　忍（総務課班長）
調査総括	藤巻　正信（調査課長）	藤巻　正信（調査課長）
調査担当	田海　義正（調査課課長代理）	石川　智紀（調査課班長）
調査職員	石川　智紀（調査課主任調査員）	

B 本 発 掘 調 査

調査期間	2010（平成 22）年 9 月 13 日～ 2011（平成 23）年 1 月 29 日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）
調　　査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	木村　正昭（事務局長）
管　　理	今井　　亘（総務課長）
庶　　務	伊藤　　忍（総務課班長）
調査総括	藤巻　正信（調査課長）
指　　導	高橋　保雄（調査課　課長代理）
調査担当	石川　智紀（調査課班長）
支援組織	株式会社吉田建設 現場代理人　保坂修央（土木部　工務係） 調　査　員　細井佳浩、山下　研、今井昭俊（埋蔵文化財調査部　調査員） 補　助　員　阿部美雪、白井久美子、本田奈々子

4　整理作業と整理体制

2010（平成22）年度の整理作業は、現地作業と平行しながら進めた。遺物の水洗、注記の一部などを現地事務所で行い、遺物の水洗・注記、接合・復元・実測・写真撮影、台帳類の整備、図面類の修正・レイアウト、図版の仮組み、原稿執筆などを株式会社吉田建設巻整理所（新潟市西蒲区）で実施した。整理体制は本発掘調査の体制と同じで、整理期間は2010年11月24日から2011年3月31日までである。支援組織の調査員が中心となって作業を実施したが、現地調査終了後の整理期間が短く、作業途中で終了するものも生じた。原稿・遺物実測図・仮図版など、この時点までの成果が埋文事業団に納品された。

2012（平成24）年度は、それまでの成果（作業内容）を確認することから始めた。4月は図版類の修正・追加・再編、遺物の接合・復元を行った。支援組織の調査員が執筆済みの原稿内容を考慮し、新たに実測する遺物を選別し、5月に実測した。掲載遺物のトレースはすべて未着手であったことから、5月後半以降から開始し、6月には写真撮影を行った。5月以降に原稿執筆（加除・訂正含む）・編集・校正を行い、2012年9月に印刷・刊行した。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地 理 的 環 境

柏崎平野の地勢　柏崎平野は、主要河川である鵜川と鯖石川及びその支流の別山川によって形成された幅約 7km、長さ約 18km の小規模な臨海沖積平野である。その南と東西の三方は「刈羽三山」を頂点とする山地や東頸城丘陵によって囲まれ、黒姫山山頂付近は大起伏山地に地形区分され、頸城方面との分水嶺をなす。こうした山地・丘陵の縁辺や岸部には荒浜砂丘が発達し、その後背には湿地性の沖積地が展開する［鈴木ほか 1988･1989］。砂丘形成の顕著な時期に河口部が閉ざされることにより湛水し、「鏡ヶ沖」などと称される湖沼と化した。丘陵の縁辺は、中・高位の河岸段丘が分布している。

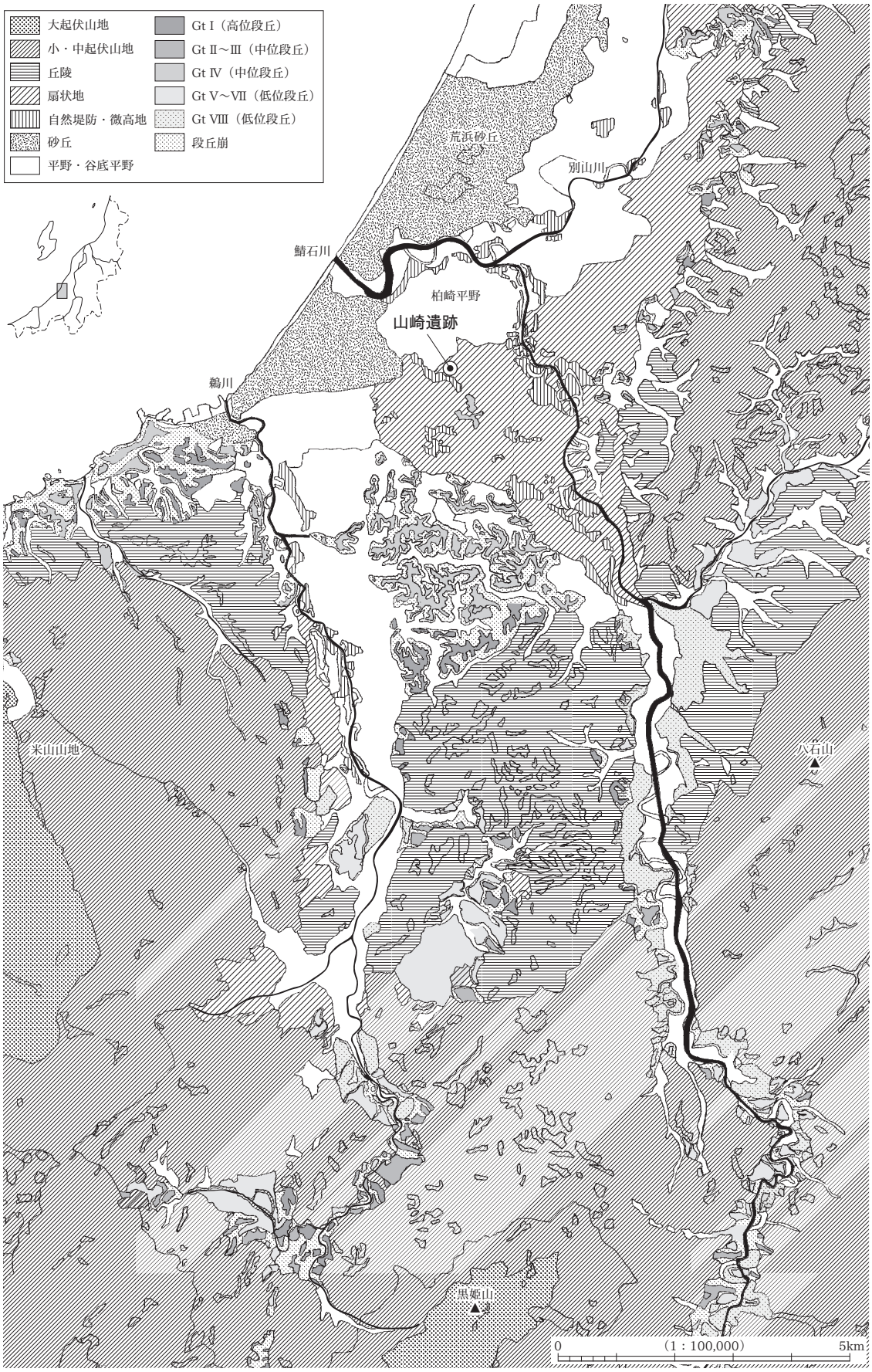
こうした柏崎平野周辺の地形的特徴は、平野を北流する鵜川・鯖石川によって西部・中央部・東部に三分される。東部は鯖石川以東の地域に相当し、丘陵や沖積地・砂丘が発達している。刈羽・三島丘陵などの丘陵地帯と別山川・長鳥川地域の沖積地、さらには日本海岸沿の砂丘が広く展開し、その軸はいずれも北北東ー南南西方向を示している。こうした地形的特徴は新第三系以降の地質構造を反映したもので、褶曲構造の向斜・背斜方向と一致している［鈴木ほか 1988・1989、大野・徳間ほか 1990］。

中央部は鵜川・鯖石川流域に沿って黒姫山地や丘陵が南北方向に展開し、その縁辺では中位段丘地帯の発達が顕著である。中位段丘面は著しく樹枝状に開析され鵜川・鯖石川が生成した沖積地に接している。中央部以西では地形の軸が東部に比べて南北方向にずれているが、それは新第三系以降の地質構造の褶曲区の違いに由来するものと推測されている［大野・徳間ほか 1990］。

西部は鵜川左岸地帯一帯を指し、米山から続く山地・丘陵が発達している。当地域では、米山山地が海岸に達して断崖をなし、その東側では狭小な中・高位段丘面を形成している。砂丘や沖積地の形成に乏しい地域であり、広範囲に発達した沖積地や砂丘が展開する東部や中央部とは対照的な様相を示している。

鯖石川流域の地形と遺跡の位置　山崎遺跡は、柏崎平野北西部、鯖石川と別山川の合流地点から約 2 キロ上流の鯖石川左岸に位置する。新潟県の河川は上流に地すべり地帯が多く、浸食、運搬作用が盛んである。さらに下流には灌漑用の取水施設が多いため、河川の流れが下流近くで緩やかになり、その結果天井川が形成されやすくなっている。鯖石川もこの例にもれず、平野の形成、遺跡の形成に大きな影響をもたらしている。最上部柏崎面が完成された後も河川の下刻は続き、完成した柏崎面を侵食していった。また、洪水の際の蛇行により平野部では側方侵食が行われ、中流から下流にかけて柏崎面を破壊し、新たに鯖石川面と呼ばれる沖積面を作り出していった。この鯖石川面は鯖石川流域の幅 1km の狭い範囲にのみ分布する面であるが、この面により鯖石川流域の氾濫原が形成され、両岸の自然堤防にはいくつかの古代及び中世の遺跡が立地している。

さらに、鯖石川の蛇行が作り出しているものに荒浜砂丘の新砂丘が挙げられる。新砂丘は平安時代以降西山丘陵の南側、鯖石川右岸に大規模な砂丘を作り出し、土砂崩れをしばしば起こして河道の蛇行にさらに拍車をかけていた。合流部付近には荒浜砂丘により形成された丘があり、鯖石川と荒浜・柏崎両砂丘により形成された後背湿地が広がる。両河川の合流部のため水が集中し、洪水により破堤するため、河道がしばしば替えられていた。このため近辺の遺跡は、河川の氾濫の影響を受けていた可能性がある。



第３図　柏崎周辺の地形

［鈴木郁夫ほか 1988・1989］を基に作成

2 歴 史 的 環 境

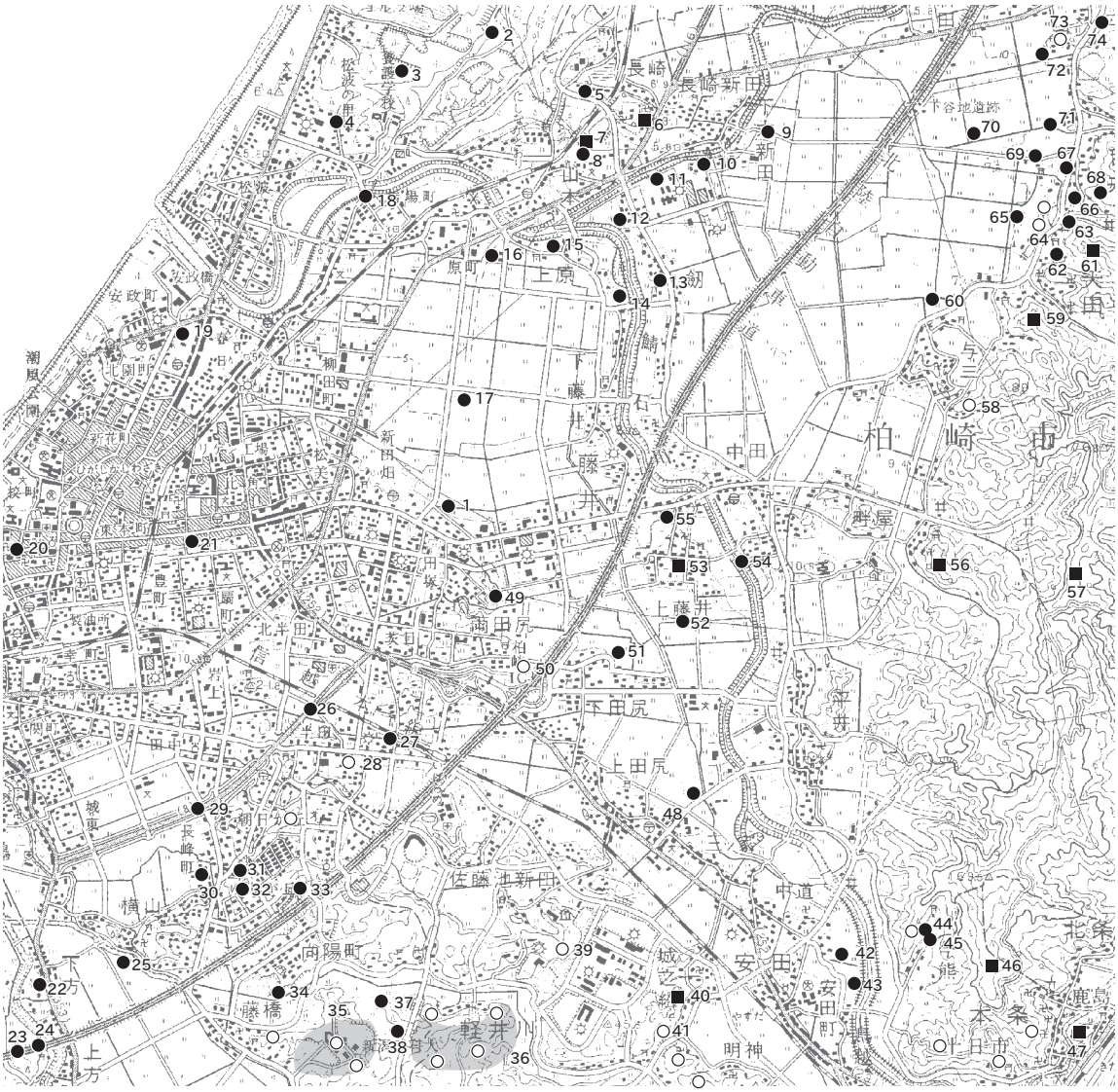
古　代　山崎遺跡が立地する柏崎平野一帯は、奈良・平安時代を通じて越後国に属する。越後国は、北陸地域から出羽までを含む広大な越国の一部であり、7 世紀末に、越前・越中・越後の 3 国に分割されて成立した。しかし、成立当初の越後の国域は、現在の阿賀野川以北から出羽までであり、現在の新潟県のほぼ半分以上の地域は越中国に属していた。702（大宝 2）年になると、越中国から 4 郡（頸城･古志･魚沼･蒲原）が越後国に編入されたことが『続日本紀』に記載されている。柏崎平野一帯は、この段階では古志郡に属することから、この編入を期に越後国の一部となった。さらに、712（和銅 5）年に出羽国が越後国から分立したことにより、越後国の国域が確定することとなる。

927（延長 5）年に完成した延喜式によると、越後国には頸城・古志・三嶋・魚沼など 7 郡の存在が記載されている。柏崎平野一帯は 9 世紀に入ると三嶋郡に属するが、この三嶋郡は、古志郡から 9 世紀に分置された可能性が指摘されている［米沢 1976・1980］。また、10 世紀前葉に成立した『和名類聚抄』には、三嶋郡に三嶋、高家、多岐の 3 郷が記載され、その所在は三嶋郷が鵜川下流域、高家郷が長鳥川流域と鯖石川中流域、多岐郷が別山川上・中流域にそれぞれ比定されている［金子 1990］。

周辺の古代の遺跡は、9 世紀代を中心とする平安時代の遺跡が最も多く認められる。立地傾向を見ると、集落遺跡の多数が自然堤防上や丘陵裾部の沖積地に立地し、須恵器窯や製鉄関連遺跡は丘陵斜面地に局地的に分布している。山崎遺跡が上記 3 郷のいずれに属するのか不明であるが、三嶋郷域の政治的中心区域と想定される、箕輪遺跡（29）や小峯遺跡（26）の一帯（半田地内）とは、3km 圏内の距離に位置する。箕輪遺跡では、「駅家村」と記述された木簡、木製鐙などが出土しており、延喜式の記載に見える「三嶋駅」が周辺に存在する可能性が濃厚である［岡田ほか 2000］。東部の流路跡には多量の土師器などが廃棄されており、儀式や饗応などの様相が想定できる。施釉陶器や墨書土器も多く、帯飾りの銅銙も出土した。また小峯遺跡では、平安時代の建物数棟と水田・畑が検出され、柏崎では初例となる石銙が出土している。

その南側に位置する丘陵地帯は、雨池古窯跡（33）［品田・中野ほか 2000］、藤橋東遺跡群（35）［品田 1995a］、軽井川南遺跡群（36）［中野 2008］などが存在している。生産に関わる遺跡が多く、鵜川を挟んで対岸の鶴巻田遺跡（24）でも炉内滓が多数出土している［藤巻 1988］。その内、軽井川南遺跡群は集落跡や塚なども含めた 35 遺跡の総称で、22 遺跡が鉄生産に関連する遺跡である。製錬から鍛造・鋳造まで、鉄の生産と鉄製品の加工に至る一連の工程を確認することができる遺跡群として貴重である。当該地域では 8 世紀から 11 世紀末前後の時期に大規模な鉄生産が行われ、特に 9 世紀以降に製錬遺跡数が増加している。上述のように三嶋郡が分置・独立した時期にあたることから、郡における鉄生産体制の強化がその背景にあったと考えられている［品田ほか 2008］。

鯖石川流域の遺跡としては、角田遺跡（12）、剣下川原遺跡（13）などが挙げられる。角田遺跡は鯖石川と別山川が合流する付近の自然堤防上に立地し、古墳時代から中世までの遺物が断続的に出土している。古くから鯖石川の自然堤防上が集落として利用されていたことがうかがえる［品田ほか 1999］。その東側の曽地丘陵沿いの段丘や開析谷においても多くの遺跡が見られ、吉井遺跡群と総称される［品田ほか 1990c］。その中で、萱場遺跡（70）では、奈良時代の住居跡と考えられる 1 辺 7m を越える大型の竪穴を検出し、遺構内から 8 世紀中葉の土器類が出土した。戸口遺跡（69）では、建物や畑作溝群が一体となった状況で検出され、9 世紀後半に位置づけることができる。これら吉井遺跡群の形成は、各遺跡の存続時



第４図　周辺の古代・中世の遺跡

（原図「柏崎」1：50,000）

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	山崎	平安・中世	22	嶋屋敷	室町	41	上軽井川の経塚群	鎌倉	60	江ノ下	弥生・古墳・平安中世
2	旧荒浜小学校Ｂ	古代	23	桐山	縄文・古代・中世						
3	旧荒浜小学校Ａ	古代	24	鶴巻田	縄文・弥生・古墳平安・中世	42	中道	平安・中世	61	吉井砦跡	中世
4	沙鉢山	平安				43	門田	中世	62	本村	中世
5	西岩野	弥生・中世	25	茅原	平安・中世	44	堂の浦	中世	63	西草薙	平安～近世
6	土合殿屋敷跡	中世	26	小峯	古代・中世	45	今熊薬師堂裏	中世	64	吉井の百塚	中世
7	岩野城跡	不明	27	城塚	古代	46	北条城跡	室町	65	権田町	縄文・古墳・平安室町
8	宮ノ浦	古代・中世	28	半田の塚群	中世	47	北条館跡	中世			
9	下才見	中世	29	箕輪	弥生・古代・中世	48	大新田	室町	66	吉井水上Ⅰ	古代
10	下境井	古墳・平安	30	京田	平安	49	田塚山遺跡群	縄文・弥生中世（仏堂･墓地）	67	吉井水上Ⅱ	古墳・平安・中世
11	下境井西	古代	31	大沢Ａ	縄文・古代				68	吉井堀之内	室町
12	角田	古墳・古代・鎌倉	32	大宮	縄文・平安	50	小児石	中世（墓地）	69	戸口	弥生・古墳・古代中世
13	剣下川原	古墳・古代・中世	33	雨池古窯跡	古代	51	不退寺	平安・中世			
14	境川原	中世	34	藤橋向山	古代	52	前田	古代・中世	70	萱場	弥生・古墳・古代
15	上原	古墳・平安・鎌倉	35	藤橋東遺跡群	縄文・古代（製鉄関連）・中世	53	藤井城跡	古代・中世	71	礼坊	古墳・平安・中世
16	東原町	中世				54	関野	縄文・古墳～中世	72	行塚	古墳・平安・中世
17	宝田	古代	36	軽井川南遺跡群	古代（製鉄関連）	55	中田久保川原	中世	73	行塚の塚群	中世
18	開運橋	縄文・弥生・古代	37	合ノ久保Ａ	古代	56	畔屋城跡	室町	74	杉ノ木田Ｂ	古代・中世
19	桜木町	平安	38	小田ヶ入Ｅ	古代	57	八方口城跡	室町			
20	柏崎町	中世・近世	39	十三本塚の塚群	中世	58	出口の塚	中世			
21	四谷	鎌倉	40	安田城跡	室町	59	矢田城跡	室町			

凡　例
●遺　跡　○塚
■城館跡

第１表　周辺の遺跡一覧表

期が短いことから、時期によって集落の位置を変えた結果と捉えられている。一方、その南側 2km に位置する江ノ下遺跡（60）は、9 世紀中葉～後半に最盛期を迎えるが、断続的ながら存続時期が長期に及ぶ遺跡であり、その様相は異なっている［品田ほか 2008］。

中　　世　『吾妻鏡』1186（文治 2）年 3 月 12 日条の「三箇国庄々未進注文」には、柏崎平野に比定される荘園として「宇河荘」・「佐橋荘」・「比角荘」の 3 荘園が記載されている。「宇河荘」の「宇河」は「鵜川」を示し、「佐橋荘」の「佐橋」は「鯖石」を示すとされている。これらの荘園は、11 世紀末から 12 世紀中葉頃には成立したと考えられる［荻野 1986］。和名類聚抄に見られる郡・郷は再編され、各地に荘園や郷・保を単位とする国衙領が成立した。柏崎平野一帯では、上記の 3 荘園のほかに原田保、赤田保などの国衙領の存在が知られている。これらの荘園・国衙領の所在は、現状では鵜河荘などの荘園を柏崎平野南部の鵜川・鯖石川流域に、原田保などの国衙領を主に北部の別山川流域に比定するのが定説化している。

中世の遺跡は、集落遺跡が丘陵裾部や自然堤防などの沖積地に分布し、墳墓や塚・経塚などが丘陵裾部や中位段丘などの台地上に立地する傾向が認められる。

鵜川流域の遺跡としては下沖北遺跡・鶴巻田遺跡などがあり、これらはいずれも 13 世紀～14 世紀を中心としている。下沖北遺跡では、溝による方形区画内に、掘立柱建物や井戸が集中する該期集落の様相が明らかにされている［山本・高橋ほか 2003、山崎ほか 2005］。鶴巻田遺跡では、珠洲焼・青磁などのほかに鉄滓・銭貨などが出土し、素掘りの井戸や貯蔵穴が検出されている［藤巻 1988］。鯖石川流域では、別山川との合流点付近に多く認められ、西中通東部遺跡群とも呼称される。角田遺跡・上原遺跡（15）・東原町遺跡（16）などがあるが、すべて自然堤防上に立地しており、河川交通等の物流関係を背景に成立したことが考えられる。角田遺跡は 13 世紀後半に最も栄え、交通の要衝を押さえる目的で在地小領主が家屋敷を営んだものとみられる［品田ほか 1999］。東原町遺跡は 13 世紀後半から 14 世紀が主体の遺跡で、溝によって区切られた居住域と生産域から構成される。土師質土器が一括廃棄された遺構も検出され、周辺集落の中でも中心的な役割を果たした集落と考えられる。また、珠洲焼壺の内部に、1 万枚以上の銭貨を埋納した遺構も検出されている［山崎ほか 2005］。

東部の曽地丘陵裾の吉井遺跡群では、礼坊遺跡（71）、吉井水上遺跡群（66・67）、権田町遺跡（65）、本村遺跡（62）などがあるが、いずれも小規模な調査であり、実態を把握するまでには至っていない。柏崎市街地では柏崎町遺跡（20）がある。中世荘園の比角荘域にあたり、15 世紀には既に東本町まで開発が及び、17 世紀には現市街地の原型が形成されていく過程が明らかにされている。中世の柏崎は町人集団が支配する港湾都市であった可能性が指摘［矢田 1997］されているが、それを示すように青花・青磁・白磁などの貿易陶磁器が、柏崎平野内のどの中世遺跡よりも多く出土している［品田・伊藤ほか 2001］。

城館としては、丘陵地に矢田城跡（59）、畔屋城跡（56）や佐橋荘の毛利氏が築城した北条城跡（46）、鯖石川を挟んで佐橋荘の毛利氏から分立した鵜河荘の安田毛利氏の居城である安田城跡（40）などの要害が挙げられる。また、荒浜砂丘と刈羽山地の境界付近にも岩野城跡（7）や土合殿屋敷跡（6）といった城や館と関連した遺跡が存在する。

宗教関連としては、柏崎インターチェンジに近い位置に、田塚山遺跡群（49）や小児石遺跡（50）が存在する。田塚山遺跡群では仏堂とその関連施設が築造され、その周囲に墳墓が配置されている［品田ほか 1996］。小児石遺跡は中世全般にわたり墓地として機能し、石塔・礫石経・六道銭などが出土した［品田ほか 1991］。塚類は丘陵裾部や中位段丘などの台地上に多く認められ、群を形成しているものが多い。また少数ではあるが、沖積地においても半田の塚群（28）などが見られる。

第Ⅲ章　調 査 の 概 要

1　グリッドの設定（第５図、図版１）

山崎遺跡は、2009 年度の試掘調査で存在が確認された遺跡である。2010 年度本調査範囲の北側には判断保留範囲が残り、そして南側は試掘未調査区であるが、地形的に高所に位置する等、今後の試掘調査で南北に遺跡が広がる可能性があった。また、この付近の柏崎バイパスの延長方向が、ほぼ南北方位に合っている等の理由から、大グリッドの方向と区割りを国土座標軸と一致させることにした。

グリッドは大小２種あり、大グリッドは 10m 四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを 2m 四方に 25 等分したものである。大グリッドの名称は北東隅の杭を基点として南北方向を算用数字（北→南）、東西方向をアルファベット（東→西）とし、両者の組合せにより「13F」のように表示した。小グリッドは 1～25 の算用数字で表し、北東隅を 1、南西隅を 25 とし、「13F5」のように大グリッド表示の後につけて呼称した。今回の調査区にあたる杭の座標値（世界測地系）は、13F 杭（X=152280.000、Y=7750.000）、21F 杭（X=152200.000、Y=7750.000）を示す。

2　基　本　層　序（第５図）

今回の調査範囲は、標高 4.9～5.3m 前後の鯖石川左岸の沖積地にある。現況はほぼ平坦な水田となっているが、地形は南東から北西方向にかけて緩やかな傾斜を示す。

基本土層はⅠ～Ⅴ層に大別した。同一の地層でも土質・色調に多少の差異があり、さらに 2～3 層に細別可能な層もある。このうちⅢ層が中世以前の遺物を包含する層であり、その上位のⅡ層にも同時期の遺物が多く含まれるが、近世の遺物も混じる。Ⅲ層は厚く堆積する部分もあり、古代の遺物がより下位から出土する傾向は認められたが、明確に分層は出来なかった。また遺物包含層であるⅢ層と、遺構検出面であるⅣ層の境は凹凸が著しく、当時または後世の水田耕作等の踏み抜き痕と考える。

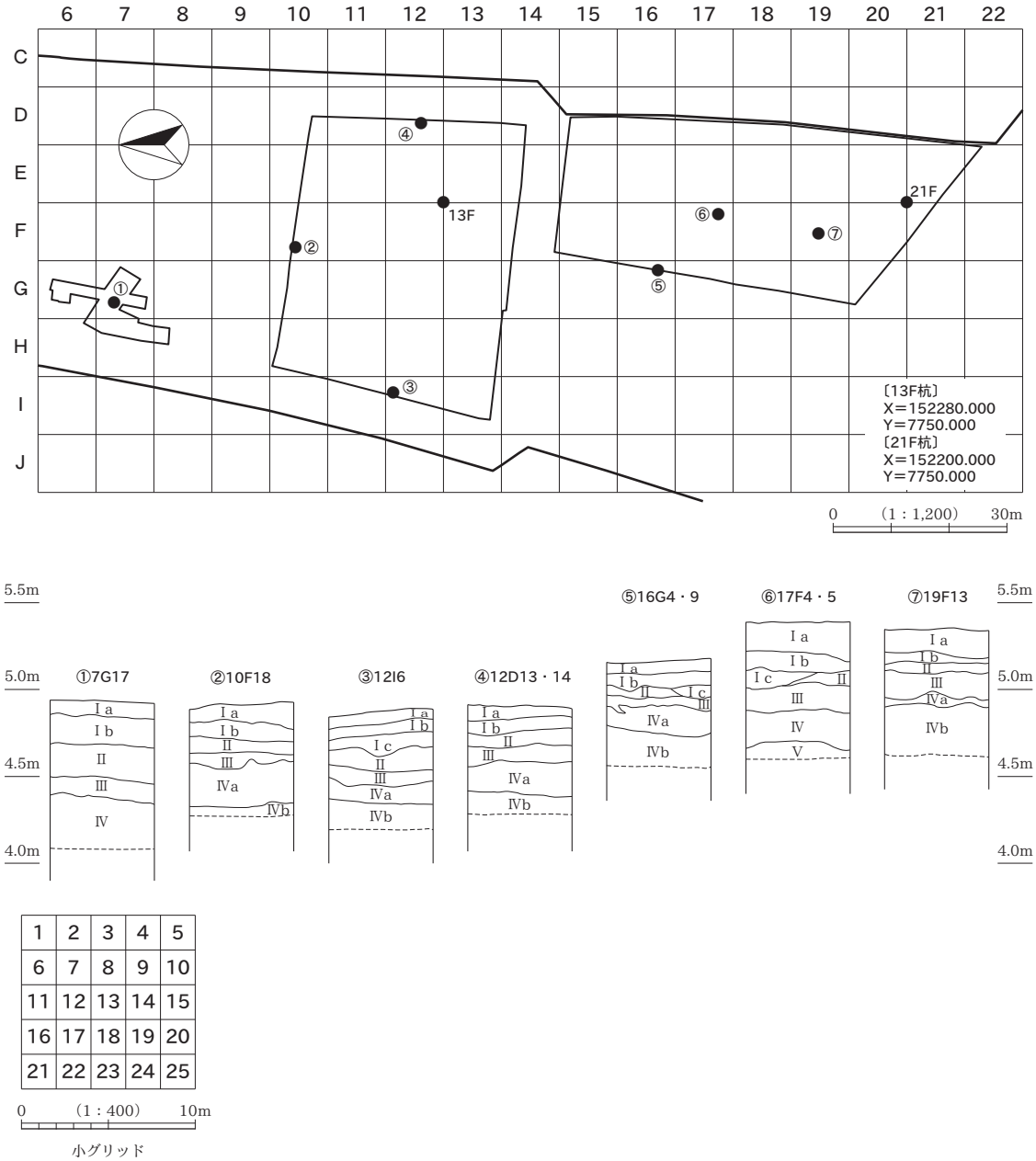
Ⅰ層：近・現代の水田耕作土。上から順に、灰色（5Y4/1）～灰黄褐色（10YR4/2）粘質土のⅠａ層、暗灰黄色（2.5Y5/2）～灰色（5Y5/1）粘質土のⅠｂ層、灰色（5Y5/1）～暗灰黄色（2.5Y5/2）粘土のⅠｃ層に細別が可能である。

Ⅱ層：近世以降の遺物包含層。黄灰色（2.5Y4/1）粘土で、粘性・締り強い。φ 1～5mm の炭化物を少量含む。

Ⅲ層：中世以前の遺物包含層。黒褐色（2.5Y3/1）～黄灰色（2.5Y4/1）粘土で、粘性非常に強く、締り強い。φ 1～5mm の炭化物を少量含む。Ⅳ層との境は乱れ、巻き込む部分も多い。

Ⅳ層：地山で、中世以前の遺構確認面。上から順に、灰白色（5Y7/1）粘質シルトのⅣａ層、オリーブ灰色（5GY6/1）シルトのⅣｂ層に細別が可能である。粘性強く、締りやや弱い。

Ⅴ層：地山。緑灰色（7.5GY6/1）砂質シルト層で、粘性・締り弱い。砂とシルトの互層。



第５図　グリッド設定と基本層序

第Ⅳ章　遺　　構

1　記述の方法と遺構の分類

A　基　本　方　針

遺構の説明は、本文（遺構各説）・観察表・図面図版・写真図版を用いた。すべての遺構について種別・グリッド・出土遺物・規模等を記載した観察表を作成した。遺構の平面形状及び計測値は、遺構検出面での数値である。特に重要と思われる遺構について、本文・図面図版・写真図版での解説を加えた。写真図版は選択して掲載した。

B　遺構番号の表記方法

山崎遺跡の遺構番号は、時代・グリッド・種別に関係なくすべて通し番号とし、遺構種別の後ろに番号を付した。なお、発掘調査の進行過程で、通し番号に欠番が生じたものもある。ただし、掘立柱建物に関しては、別途に１番から番号を付してある。

遺構種別は略称を用い、掘立柱建物を「SB」、井戸を「SE」、土坑を「SK」、溝を「SD」、ピットを「P」、性格不明遺構を「SX」とした。また、自然流路については「SR」とした。

平面形態

円　形：	長径が短径の 1.2 倍未満のもの
楕円形：	長径が短径の 1.2 倍以上のもの
方　形：	長軸が短軸の 1.2 倍未満のもの
長方形：	長軸が短軸の 1.2 倍以上のもの
不整形：	凸凹で一定の平面形をもたないもの

断面形態

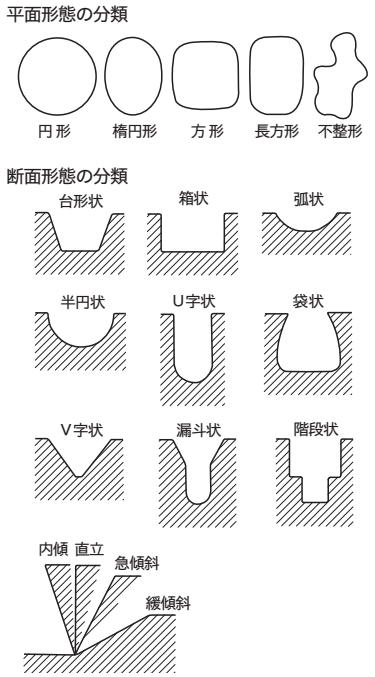
台形状：	底部に平坦面をもち、緩やか～急角度に立ち上がるもの
箱　状：	底部に平坦面をもち、ほぼ垂直に立ち上がるもの
弧　状：	底部に平坦面をもたない皿状で、緩やかに立ち上がるもの
半円状：	底部に平坦面をもたない椀状で、急斜度に立ち上がるもの
U 字状：	確認面の長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの
袋　状：	確認面の径よりも底部の径が大きく、内傾して立ち上がるもの
V 字状：	点的な底部をもち、急斜度に立ち上がるもの
漏斗状：	下部が U 字状、上部が V 字状の二段構造からなるもの
階段状：	階段状の立ち上がりをもつもの

第２表　遺構の形態分類表

C　遺構の形態分類

遺構の平面及び断面形状の表記は、和泉Ａ遺跡［荒川・加藤ほか 1999］の分類基準（第２表・第６図）に準拠した。

平面形の規模は長軸（最大長・径）を計っているが、部分的に極端な張り出しがある場合は、全体の形状を考慮して、残存率が高い位置で計測している。短軸は基本的に長軸と直交する方向の最長部で計測した。ただし、径 20cm 前後の小型ピットで、トレンチで半割してから遺構の真偽を判別したものについては計測しなかった。深度（深さ）は遺構検出面からの最深部を計測した。井戸と土坑の分類については、深度が長軸より大きいものを基本的に井戸としたが、覆土の堆積状況や遺物出土状況を考慮して井戸に分類したものもある。



第６図　遺構の形態分類図

2 遺 構 各 説

本遺跡の調査区は、大きく3つに分かれる。農道を挟んだ南北の調査区（南区・北区）と、北区のさらに北側の調査区（北区北側）である（第1章2参照）。2010（平成22）年度の調査では、井戸1基、土坑18基、溝17条、ピット67基、性格不明遺構3基、自然流路1条を検出した。古代、中世、近世の遺構があるが、遺物が出土したものは少なく、帰属時期が不明なものが多い。しかし遺物の出土量から見て、その大半は古代に帰属するものと考える。古代の遺構は自然流路付近に多く認められ、掘立柱建物や井戸、土坑などが分布する。居住域と考える範囲は、北区の自然流路の北東側に位置し、集落の中心部はさらに東側の調査区外に展開する可能性が高い。中世の遺構は、南区南端付近の溝などが中心となる。形状から区画溝と考えることができ、該期の集落は南側の調査区外に展開するものと推測する。近世の遺構としては、調査区を北西－南東方向に横断する溝があり、水田等の生産域としての場であったと考える。

A 古 代 の 遺 構

本遺跡では帰属時期が特定できる遺構は少ないが、遺物の出土量では古代のものが主体を占める。そこで、遺構の分布状況なども考慮し、古代に帰属する可能性が高いものも含めて記述する。

1）掘 立 柱 建 物

自然流路の北東側で、掘立柱建物を2棟検出した。ただし、建物として認識できなかったが、調査区内には多数のピットがあり、柱根が残存するものもあることから2棟以上の建物が存在した可能性が高い。また、自然流路の南側、南区の16～17Fにもピット群が存在するので、自然流路を挟んだ両岸に集落が展開した可能性もある。しかしピットの規模を比較すると、南区のものは明らかに小規模であり、集落の中心部はやはり北区にあったと考える。

認識できた建物（SB1、SB2）は主軸方向がほぼ同じで、方位よりも自然流路の方向を意識したものと考える。重複する部分も多いので、建て替えられたものであろう。新旧関係が判別できるのはP105（新）とP107（旧）の切り合い関係で、現段階ではP105がSB1、P107がSB2となっている。建物の平面的な歪みが少ない柱穴配置ではあるが、SB1で柱根が残存するのはこのP105だけで、ほかの柱根が残存するピット（P68・P86・P91・P106）はすべてSB2を構成している。P105とP107の新旧関係からすると、SB2が古く、SB1が新しい建物となるが、古い建物の方に柱根が多く残存する状況は、疑問が残る点である。よって、P107がSB1で古い建物、P105がSB2で新しい建物となる可能性も十分あるが、現段階では図版11に従って記述を行う。

柱間の多い方向を「桁行」（長軸）、少ない方向を「梁間」（短軸）とした。桁行・梁間の規模は、基本的に数値の大きい面を優先し、床面積はそれを乗じた。また、ここでは現代の規模と比較しやすくするため、畳数（1.8×0.9=1.62m²）にも換算して記述する。方位は桁行方向が、北を中心に東西に偏する角度で表した。柱間寸法は復元推定線上で、柱の中心と考える位置同士で測定を行った。なお、平均値±○で数値を示したものは、ここでは一般的な標準偏差ではなく、上限と下限を示している。

SB1（図版8・9・11・33）

12Eに位置する。桁行は東面1間（6.52m）、西面1間（6.80m）で、梁間は北面1間（4.54m）、南面

2 間（4.90m）で、南西の柱穴（P105）がやや張り出した平面形を呈する。面積は 33.3m²（20.4 畳）を測り、方位は N–37°–W を示す。桁行が長く、梁間北面の中央に柱穴は認められない。本遺構周辺は、調査終了後に重機で 30cm 程度掘り下げて柱穴の有無を再度確認している。P49 はその際に確認した柱穴で、ほかに SB1 を構成する柱穴は確認できなかった。P69–P49 間 2.48m、P49–P105 間 2.42m であり、P49 はほぼ中央に位置する。柱穴はいずれも円形で、径 20～31cm、深さ 14～42cm である。柱根が残存するのは P105（145）のみで、P56 と P69 では柱痕と考える土層を確認した。柱穴からの出土遺物はない。

SB2（図版 8・9・11・33・34）

12D・E、13D・E に位置する。南東隅は 2009（平成 21）年度の試掘調査地点にあたるが、柱穴は検出できなかった。しかし、SB1 同様に南東側が張り出した平面形が想定できる。南東側には自然流路があるので、これが歪みの一因となった可能性もある。桁行東面 4 間（8.44m）、梁間北面 1 間（4.94m）で、推定面積は 41.7m²（25.7 畳）である。方位は N–40°–W を示す。P103～106 は調査終了後の深掘りで検出した柱穴である。桁行東面の柱間寸法は、P68–P104 間 2.16m、P104–P106 間 1.64m、P106–P86 間 2.28m、P86–P103 間 2.36m で、P104–P106 間がやや狭いが、ほかは 2.27 ± 0.11m とほぼ等間隔を示す。これは SB1 の梁間南面の柱間寸法 2.45 ± 0.03m と比較しても、1 尺以内の誤差しかない。柱穴は円形、または楕円形を呈し、径 19～38cm、深さ 13～55cm である。P68・86・91・106 の 4 基で柱根（146～149）を検出した。ほかに出土遺物はない。

2）井　　戸

調査時に井戸とした遺構は 1 基のみである。井戸の可能性がある土坑を含めても 2 基程度で、その数は少ない。

SE85（図版 9・10・34）

13D17 に位置する素掘りの井戸である。平面形は円形、断面形は上端に向かって緩やかに開く U 字状を呈する。長軸 83cm、深さ 91cm を測る。埋土は 5 層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は土師器無台椀（72）が出土した。

3）土　　坑

土坑には、埋土がブロック状のものとそれ以外のものの 2 者が認められ、前者はさらに形態が楕円形と円形のものに二分できる。ブロック状埋土の土坑から出土した遺物は少なく、SK9 から土師器の小片が出土した程度である。SK9 の出土遺物から、同様な堆積を示すほかの土坑も古代と考えたが、中世、あるいはそれ以降の構築である可能性も否定できない。ブロック状埋土は、人為的に全体が埋め戻されたことを想定できるもので、平面楕円形のものは長軸方向が北東 – 南西方向か、またはそれに直交する方位を向いており、規格性がうかがえる。

SK9（図版 12・14・39）

15F14・19 に位置する、ブロック状埋土の土坑である。平面形は隅丸の長方形を呈し、断面形は箱状または台形状を呈する。側壁は直立気味に立ち上がる。方位は N–48°–E を示し、規模は長軸 184cm、短軸 120cm、深さ 42cm である。埋土は単層で、黄灰色粘質土に地山近似のオリーブ灰色シルト、黒褐色粘質土のブロックを多量に含むものである。遺物は中位から土師器の小片が出土した。

SK10（図版 13・14・39）

16F10・15 に位置する、ブロック状埋土の土坑である。平面形は長方形に近い楕円形、断面形は半円状を呈する。方位は N–46°–E を示し、規模は長軸 111cm、短軸 84cm、深さ 48cm である。埋土は単層で、黄灰色粘質土と地山近似のオリーブ灰色シルトのブロックが混ざる。出土遺物はない。

SK20（図版 12・14・39）

15F11 に位置する。南区北端で検出したため、全形は不明である。断面形は平らな底部から段を持って直立気味に立ち上がり、階段状を呈する。検出できた範囲の長軸は 100cm、深さ 64cm である。埋土は上下 2 層に分層できるが、2 層は地山とほぼ同質で、わずかに黄灰色粘質土や炭化物を含むものであった。出土遺物はない。

SK55（図版 9・10・35）

13E7・8・12・13 に位置する。平面形は楕円形、または円形を呈するものと考えられるが、北西側が 2009（平成 21）年度の試掘調査トレンチによって失われているため不明である。断面形は弧状を呈し、壁面の立ち上がりは緩やかである。埋土は 3 層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器（1・2）、土師器（54～60）がまとまって出土した。SD54 と切り合い関係を持ち、それよりも古い。

SK64（図版 5・6・38）

11H25、11I4・5、12I1 に位置する、ブロック状埋土の土坑である。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。長軸方向の側壁の立ち上がりは、北西側は緩やか、南東側は急斜度である。短軸方向の立ち上がりはどちらも急斜度である。方位は N–38°–E を示し、規模は長軸 278cm、短軸 112cm、深さ 51cm である。埋土は単層で、黄灰色粘質土に地山に近似するブロック状のオリーブ灰色シルトが多量に混ざるもので、ほかのブロック状埋土の土坑と同じものである。出土遺物はない。北に接する SK65 と切り合い関係を持ち、それより新しい。SK64 と SK65 の形状は、後述する SK90 のように円形に近いものと楕円形のものが組み合わさった形状を示すものと見ることもでき、本来同一の遺構であった可能性もある。

SK65（図版 5・6・38）

11H24、11I4 に位置する、ブロック状埋土の土坑である。平面形は楕円形、断面形は半円または台形状を呈する。底面は平らでなく凹凸が認められ、北東側はやや浅い。方位は N–38°–E を示し、規模は長軸 185cm 以上、短軸推定 120cm、深さ 27cm である。埋土は単層で、黄灰色粘質土と地山近似のオリーブ灰色シルトブロックが混ざるものである。規模は異なるものの、埋土は隣接する SK64 と同一である。出土遺物はない。SK64、SR1 と切り合い関係を持ち、SK64 より古く、SR1 より新しい。

SK74（図版 8～10・35）

12D17・18 に位置する。SK75 に切られるため平面形は不明である。検出できた長さは 74cm、幅 63cm、深さ 10cm である。埋土は単層で、微細な炭化物をわずかに含む。出土遺物はない。

SK75（図版 8～10・35）

12D17・18・22・23 に位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状に近く、底部は平らな面を持つ。方位は N–16°–E を示し、規模は長軸 226cm、短軸 163cm、深さ 24cm である。底部はほぼ平らで、立ち上がりは緩やかである。埋土は 2 層に分層でき、1 層は土器片や炭化物を多量に含む。遺物は須恵器（5）、土師器（61～66）が出土した。SK74・SK76 と切り合い関係を持ち、SK76 よりも古く、SK74 よりも新しい。

SK76（図版 8～10・34）

12D23 に位置する。平面形は円形、断面形は緩やかに外に開く U 字状を呈する。長軸 62cm、深さ 71cm である。埋土は 3 層に分層でき、レンズ状に堆積する。1 層は黒褐色粘質土で地山に近似するシルトブロックを多量に含む。SE85 より若干浅いが、形態などから本遺構も井戸であった可能性が高い。遺物は須恵器、土師器（67）が出土した。SK75 と切り合い関係を持ち、それより新しい。

SK77（図版 8・10・35）

10E5・10 に位置する。平面形は楕円形、断面形は半円状を呈する。方位は N-67°-E を示し、規模は長軸 98cm、短軸 76cm、深さ 41cm である。埋土は地山に色調が似た粘質土で、炭化物や土器片を含む。上下 2 層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器、土師器（68～70）が出土した。

SK78（図版 8・10・35・36）

11E2・7 に位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。方位は N-70°-W を示し、規模は長軸 260cm、短軸 154cm、深さ 28cm を測る。底面は平らでなく、立ち上がりは緩やかである。埋土は土器片や炭化物を含むもので 3 層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器（4）、土師器（71）が出土した。

SK90（図版 5・6・38）

12G19・20・24 に位置する、ブロック状埋土の土坑である。平面形は楕円形に分類できるが、南東端は円形にわずかに膨らみ、楕円形と円形の土坑を組み合わせたような形状である。断面形は台形状を呈し、円形に若干広がる部分は底部が一段低い。方位は N-50°-W を示し、規模は長軸 285cm、短軸 110cm、深さ 40cm である。埋土は単層で、黒褐色粘質土に地山近似のオリーブ灰色シルトブロックを多量に含むものである。出土遺物はない。

SK93（図版 5・6・38）

12H22、12I2 に位置する、ブロック状埋土の土坑である。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。壁面の立ち上がりは急斜度である。方位は N-55°-W を示し、規模は長軸 196cm、短軸 136cm、深さ 30cm である。埋土は単層で、黄灰色粘質土に地山近似のオリーブ灰色シルトブロックを多量に含むものである。出土遺物はない。

SK95（図版 13・15・39）

17E5、18E1 に位置する、ブロック状埋土の土坑である。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。方位は N-40°-E を示し、長軸 197cm、短軸 144cm、深さ 47cm である。埋土は単層で、黒褐色粘質土と地山近似の灰色シルトのブロックが混ざるものである。出土遺物はない。

SK96（図版 15・16・41）

18E19 に位置する、ブロック状埋土の土坑である。平面形は円形、断面形は箱状を呈し、側壁は直立気味に立ち上がる。長軸 155cm、深さ 49cm である。埋土は単層で、黒褐色粘質土と地山近似のオリーブ灰色シルトのブロックが混ざるものである。出土遺物はない。

SK97（図版 13・15・16・41）

18F7・8 に位置する、ブロック状埋土の土坑である。平面形は円形、断面形は箱状を呈し、側壁は直立気味に立ち上がる。長軸 149cm、深さ 58cm である。埋土は上下に二分したが、いずれも黒褐色粘質土と地山近似の灰色粘質土のブロックが混合するものである。2 層は灰色粘質土が主体となり、黒褐色粘質土を多く含む 1 層土と区別した。出土遺物はない。

SK108（図版 4・32）

北区北側の調査区で検出したもので、6G12・13 に位置する、ブロック状埋土の土坑である。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。方位は N-23°-E を示し、規模は長軸 194cm、短軸 146cm、深さ 36cm を測る。埋土は単層で、黄灰色粘質土と地山に近似するオリーブ灰色シルトの粗大なブロックが混合する。出土遺物はない。

4）溝

SD54（図版 9・10・35・37）

13E11 から 13G3・4 にかけて位置する。北西端の 13E11 から南へ 4m の地点で緩やかに西に進路を変え、SR1 に直交して直線的に延びる。底面には円形の落ち込みが連続する部分が認められ、ピットが連結したような形状を呈する。13G3・4 で SD2 と重複し、それ以西に SD54 の延長は確認できない。しかし、延長にあたる部分には、溝と直交方向に長軸を持つ短い溝（SD58～63）が 6 条連続して位置する。SD54 の底面形状を考慮すると、それらの溝も関連がある可能性がある。遺物は須恵器（3）、土師器が出土した。SR1・SD2・SK55 と切り合い関係を持ち、SK55 より新しく、SD2 よりも古い。SR1 とは埋土も近似しており、新旧関係は不明である。古代の遺構と考える。

SD58～63（図版 5・6・38）

13G の南西隅に隣接して位置する 6 条の短い溝である。いずれも長軸を北西－南東方向に向けて隣接し、調査区外周の壁面にも溝と思われる土層がさらに 2 か所で確認できるため、調査区外にも連続する可能性が高い。これらの溝は同一の性格と考えられるのでまとめて記述する。断面形は半円状や弧状を呈するものが多い。長軸は確認できるもので 152～247cm、短軸 49～64cm、深さ 19～29cm である。埋土は単層で、灰色粘質土、または黒褐色粘質土である。遺物は土師器が出土した。これらの溝は SD2 を挟んで東側の SD54 の延長上に位置する。SD54 は古代の溝で、底面は凹凸が目立ち、13E では円形の落ち込みが連続してピットが数珠つなぎになったような形状を呈している。また SD58～63 の長軸は、SD54 の延長方向と直交する関係にある。SD54 の底面の凹凸と、SD58～63 が集中する状況は、関連があるようにも見えるが、直接結び付ける根拠に乏しい。道路としての性格も考えられるが、1 基ごとの深度は深く、埋土にも特に硬化する面や、枕木等の痕跡も認めることができなかった。

SD92（図版 8・10・36）

10E24・25 に位置する。平面形は楕円形に近いが北東側がくの字に折れる不整形で、断面形は弧状を呈する。長軸 126cm、短軸 66cm、深さ 11cm である。埋土は地山に近似するもので、炭化物を少量含む。出土遺物はない。

SD109（図版 4・32）

北区北側の調査区で検出した遺構で、7G8 から 7G21 にかけて位置する。検出した長さは 592cm、幅 65～110cm、深さは 18～49cm である。断面形は弧状～台形状を呈する。南東端が最も深く、側壁は急斜度で立ち上がる。北西に向かって直線的に延び、徐々に浅くなる。出土遺物はない。SX110 と切り合い関係を持ち、それより古い。

5）ピ　ッ　ト

南区の 16～17F、北区の 11～12D・E でピット群を検出した。すべて古代に帰属するものかは不明だ

が、出土した遺物量や古代の川岸に集中して位置することなどから古代の遺構に含めて記述する。

P17（図版 12～14・40）

16F14 に位置する。平面形は楕円形、断面形は北側のみに段を持つ階段状を呈する。長軸 28cm、短軸推定 19cm、深さ 26cm である。埋土は黄灰色粘質土を基本とし、地山に近似するオリーブ灰色シルトのブロックや炭化物の量を基準に 2 層に分けた。出土遺物はない。

P24（図版 12～14・40）

16F19 に位置する。平面形は円形、断面形は南側にのみ段を持つ階段状を呈する。長軸 17cm、深さ 14cm である。埋土は上下に二分でき、1 層は炭化物が目立つ。出土遺物はない。

P32（図版 13・14・40）

16G5 に位置する。平面形は円形、断面形は U 字状を呈する。長軸 18cm、深さ 18cm である。埋土は上下に二分でき、1 層は微細な炭化物や地山近似のオリーブ灰色シルトブロックを少量含む。2 層は地山に近似し、1 層土を少量含む。出土遺物はない。

P41（図版 13・14・40）

16F25 に位置する。平面形は円形、断面形は U 字状を呈する。長軸 16cm、深さ 24cm である。埋土は上下に二分でき、炭化物や地山近似のオリーブ灰色シルトブロックを少量含む。出土遺物はない。

P66（図版 8・10・36）

11E25 に位置する。平面形は円形、断面形は上端がわずかに開く U 字状を呈する。長軸 25cm、深さ 38cm を測る。埋土は 2 層に分層できるが、柱根や柱痕は確認できなかった。

P67（図版 8・10・36）

11E15 に位置する。平面形は円形、断面形は台形状を呈する。長軸 45cm、深さ 54cm である。柱根（144）が残存していたことから掘立柱建物を構成する柱穴と考えられるが、関係するほかの柱穴は検出できなかった。出土遺物はない。

6）自　然　流　路

SR1（図版 5・7～9・12・14・30～32・36・37・40）

北区南東端 13D19・20、14D16・17、南区北東端 15D17～20 から、北区の西端 11I1～4 にかけて位置する。調査区を蛇行しながら横断する自然流路で、東側では幅広な流路が 14F の農道下で鋭く屈曲して折り返し、やや幅狭になって西側に抜けていく。南区で検出した範囲は浅い部分が多く、北へ向かって緩やかに下る。流路の底部中心は北区側、あるいはその間の農道下に位置するものと考える。断面形状はおおむね台形状を呈し、部分的に中場を持って階段状を呈する部分がある。検出した長さは約 63m、古代の頃の幅は計測できる範囲（北区西半）で 5.95～7.41m、深さ 0.14～1.46m である。底面標高は東端で 3.31m、西端で 3.11m を測り、西に向かって傾斜する。埋土は黄灰色や灰色の粘質土を主体とする（図版 7、断面 E～H ライン）。古代の川底と考える層位までを大きく 4 層に分けた。5 層以下は無遺物層で、植物遺体を多量に含む層と砂層が互層をなす。河川堆積であり、古代以前の流路はかなり大規模なものであったことが想定される。

遺物は多量に出土した。須恵器（6～47）、土師器（74～143）、木製品（150～172）、金属製品（173）などがある。遺物は下層程多く、底面付近の 4 層から出土したものが大半である。流路が屈曲する北～東側にかけて、掘立柱建物や井戸などの居住域の一部が展開しているが、その居住域から離れた G ライン

以西ではほとんど遺物が出土していない。またそれ以外の範囲でも、流路中央から居住域寄りに偏る傾向が見られた。13･14E には遺物の集中区があり、北側壁面の斜面部から底面にかけてまとまって出土した。遺物の出土状況から、これらの多くは北側の居住域側から投げ込まれた可能性が高い。墨書土器も多く、完形率も高いことなどから何らかの祭祀行為の結果とも推定できるが、単なる廃棄域であった可能性も高い。ほかに祭祀関連の可能性がある遺物は、この遺物集中区から出土しておらず、13F8 で馬（牛）形と思えるものが 1 点出土したのみである。SK65、SD2・52・54 と切り合い関係を持ち、SD54 との新旧関係は不明だが、SK65、SD2・52 よりも古い。

B　中世以降の遺構

以下では、中世以降の遺構について記述する。切り合いや出土遺物から時期の判断ができるものは少なく、古代の遺構でないと推測されるものも一括した。

1）土　　坑

SK7（図版 15・16・41）

19G15･20、20G11 に位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。方位は N–40°–W を示し、規模は長軸 148cm、短軸 109cm、深さ 15cm である。埋土は単層で、黒褐色粘質土を基本とする。中～下部にはさらに色調が暗いブロック状の黒色粘質土を含む。遺物は須恵器、土師質土器（176）が出土した。出土遺物から中世の遺構と考える。

2）溝

SD2（図版 5・6・9・12～14・37・39・40）

南区東端の 16D20 から北区西端の 12I8･9 にかけて位置する溝である。SD2 は北区と南区にまたがっており、その間の農道下は調査できなかったが、方位や規模、埋土などから一連の溝と判断した。北西－南東方向にほぼ直線状に延びるが、14F21 付近で屈曲している。総延長は約 65m、幅は 63～344cm、深さは 6～96cm である。断面形は弧状や台形状を呈し、底面は凹凸があり、平坦部は少ない。13G より西側では側壁の北東側に段が認められ、16E6・7 付近では池状に広がって周囲より一段深くなる。底面標高は東端で 4.32m、西端で 3.72m を測る。埋土は黄灰色粘質土を基本とするが、Ⅳ・Ⅴ層土に近似の粗大なブロックと多量の砂粒を含む部分がある（図版 5・6）。遺物は須恵器、土師器、珠洲焼（187～190）、青磁（184）、天目（185）、中世陶器（186）、肥前系陶磁器（191・192・194）が出土した。SR1、SD52 と切り合い関係を持ち、それらより新しい。近世陶磁器が多く出土していることから、近世以降の溝と判断する。

SD3（図版 16～18・31・32・41・42）

南区の南端 21E19 から北西に延び、21E11 でほぼ直角に折れて西へ進路を変える。19G3・4 まで直線的に延びた後、端部は再び南西側に直角に曲がり、1m ほど延びて緩やかに立ち上がる。全体形が L 字状、またはコ字状を呈し、断面形は部位によって異なるがおおむね半円状、台形状である。確認できた総延長は約 32m、幅は 44～186cm、深さ 13～124cm（一部を除くと 47～77cm）を測る。底面標高は南端で 4.35m、その後 4.22～4.37m を推移して南西端部で 4.32m を測る。底面にいずれかの一方向への傾斜は認められない。20E22・23、20F2・3 の位置では底部が V 字、あるいは U 字状に落ち込み、深さ

124cm に達する。井戸などと重複していることも考慮し、土層断面で観察したが切り合いは認められなかった。よって、水溜など SD3 の施設の一部と考えた。埋土はこの水溜状落ち込みで 6 層に、ほかの部分は 1～5 層に分層した。レンズ状に堆積することから、自然堆積と考える。遺物は須恵器、土師器、珠洲焼（178）、瀬戸美濃焼（177）などの土器･陶磁器のほか、砥石（224）や鉢の可能性がある石製品（223）、木製品（211～221）が出土した。水溜状落ち込みでは、2 層下部、4 層上面で木製品（213～216）が並んだ状態で出土した。その出土標高は溝の全体的な底面とほぼ同じである。また 20E15 付近では、1 層と 2 層の間に炭化層を検出し、その層中から祭祀具（217）が出土している（図版 31）。

SD3 は出土遺物から中世の遺構と判断できるが、平面形態から用水などの機能は考えられず、区画溝として構築された可能性が高い。また 21E を見ると、SD3 の東側には SD101 が平行しているが、SD101 は 21E3 で南東側へ屈曲することが確認できた。SD3 と SD101 は L 字状の溝が対称に向かい合う形態であった可能性がある。南区のさらに南側に中世の集落が存在すると仮定すれば、この SD3 と SD101 間は集落から生産域へと向かう道（出入口）であったことも想定できる。

SD4（図版 16～18・42）

19G17・18 から 20F20 にかけて位置する。北西－南東方向に直線的に延び、N-32°-W を示す。断面形は弧状を呈し、検出した長さは 18.8m、幅 45～76cm、深さ 4～16cm である。埋土は単層で黒褐色を呈する。出土遺物はない。この周辺に古代の可能性がある遺構は認められず、中世の区画溝と考える SD3 が近接していることなどから、中世以降の構築と推測する。

SD5（図版 16・18・42）

19G8～11 にかけて位置する。SD4 に平行して延びる溝で、延長線上には SD6 が位置する。方位は N-41°-W を示す。断面形は弧状を呈し、検出した長さは 4.6m、幅 42～79cm、深さ 6～9cm である。埋土は単層で黒褐色を呈する。遺物の出土はない。浅い溝のため、底部の深い部分のみが残存し、本来 SD6 と同一の溝であった可能性もある。SD4 と平行することから、中世以降の溝と推測する。

SD6（図版 16～18・42）

19G5 から 20F14 にかけて位置する。SD5 の延長線上に位置し、SD4 と平行する溝である。断面形は弧状を呈し、長さは約 9.2m、幅 39～89cm、深さ 5～13cm である。埋土は単層で黒褐色を呈する。出土遺物はない。SD4・5 と同様、中世以降の構築と推測する。

SD101（図版 17・18・31・32・42）

21E2～4 から 21E15 にかけて位置する。南区南東端で検出したため、全形は不明である。確認できる範囲では、北東に向かって直線的に延び、21E3 で南東側へ屈曲するようである。断面形は台形状を呈し、検出した長さは約 6.2m、幅 169～199cm、深さ 50～58cm である。埋土は 3 層に分層でき、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器、珠洲焼（179～182）、越中瀬戸焼（183）、砥石（225･226）、木製品（222）、銭貨（229）が出土した。近世の越中瀬戸焼は混入品と考えられ、出土遺物の量や SD3 との関連から中世の遺構と考える。

SD102（図版 17・18・31・32）

21E4 から 22E11 にかけて位置する。南区南東端で検出したため全形は不明である。確認できる範囲では SD101 に平行して北東に延びる。断面形は弧状を呈し、底面標高は 4.93～5.03m とほぼ水平である。検出した長さ約 4.0m、幅 25～35cm、深さ 1～10cm と浅い。埋土は単層で、黄灰色粘質土を基本とする。隣接する SD101 や SD3 との関連が考えられるが、性格は不明である。出土遺物はない。

SD52（図版 12～14・39・40）

南区東端 17D17 から北西に延び、南区北端の 15F2 で近世の SD2 に切られる。断面形は弧状、半円状を呈する。幅 71～140cm、深さ 26～49cm である。底面標高は SD2 と重複する部分で 4.3m、調査区東端で 4.11m となり、東へ向かって下る。SD2 とは底面の傾斜が逆である。埋土は単層で灰色粘質土に炭化物が少量混じる。遺物は土師器や唐津焼（193）が出土した。SR1、SD2 と切り合い関係を持ち、SR1 より新しく、SD2 より古い。SD2 より前段階の近世の溝と推測する。

3）ピ　ッ　ト

P8（図版 15・16・41）

19G19・20 に位置する。平面形は円形、断面形は弧状を呈する。埋土は上下 2 層に分層でき、黒褐色粘質土を主体とする。出土遺物はないので帰属時期は不明だが、周囲の遺構配置を考慮して中世以降の遺構と考えた。

4）性格不明遺構

SX98（図版 15・16・42）

19D25、19E5、20D21・22、20E1・2 に位置する。平面形は調査区端に位置するため不明で、断面形は弧状を呈する。長軸 344cm、短軸 159cm、深さ 12cm である。埋土は単層で黄灰色を呈する。出土遺物はない。規模・埋土が類似する SX99 が中世の遺構の可能性があることから、同様に中世の遺構と考えることもできるが、帰属時期は不明である。

SX99（図版 15・17・42）

20E25、20F5、21E21、21F1 に位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。長軸 270cm、短軸 196cm、深さ 12cm である。埋土は黒褐色を呈し、オリーブ灰色シルトのブロックを多量に含む。出土遺物はないが、中世の区画溝と考える SD3 の近隣に位置し、古代の遺構が周囲に検出できなかったことから、中世の遺構と推測する。

SX110（図版 4・32）

6G25、6H5、7G21・22、7H1～4・6～9 に位置する。北区北側の調査区で検出した遺構で、調査区内の西端に位置するため全形は不明である。確認できた範囲では長軸 902cm、短軸 331cm、深さ 108cm である。北側の中央で急激に落ち込み、南側は 14～15cm と浅い。遺物は土師器（73）、珠洲焼（196）、肥前系磁器（195）が出土した。近世の遺物が出土していることから、近世以降の構築と考える。SD109 と切り合い関係を持ち、それより新しい。

第Ⅴ章　遺　　物

1　遺物の概要

今回の調査においては、平安時代～江戸時代の土器・陶磁器類、木器・木製品、石製品、金属製品が出土した。主な時代は９世紀で、自然流路であるSR1や周囲の土坑、溝、ピットから須恵器、土師器、製塩土器等が出土した。また、灰釉陶器の皿が１点だけ、11E23のⅡ・Ⅲ層から出土したが、小片のため図化できなかった。古代の木製品では盤・円形曲物・柱根等があり、金属製品も数点出土している。

中世以降の遺物は少ないが、SD2、SD3、SD101や包含層から青磁、白磁、珠洲焼、瀬戸美濃焼、天目茶碗、土師質土器、近世陶磁器等が出土した。

2　遺物の各説

A　古代の遺物

1）須　恵　器

a　概　　要

須恵器は、SR1の右岸側から多く出土した。とくに12E25・13E5・14E1の周辺、12F9の周辺に多く出土した（第８図左）。器種は杯蓋、有台杯、無台杯、瓶・壺類、甕が出土したが、無台杯が多く、次に有台杯がやや多い程度で、他の器種の個体数は少ない。また、無台杯や有台杯の底面などに、「中山」などと墨書されたものが数点認められた。以下ではまず各器種の概要を示す。なお、部位、調整、胎土等の名称、観察項目は［小田 2006］を参考とし、観察表に示した。

杯　　蓋　完形に近いものは１点のみである。

有 台 杯　深身のものが主体となる。口径の大きさにより、Ⅰ類（14.7cm）、Ⅱ類（12.8～13.7cm）、Ⅲ類（8.8～9.8cm）に分類した。

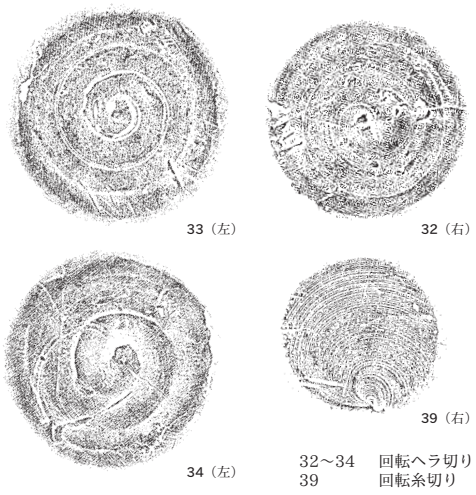
無 台 杯　底部の切り離し方法が回転ヘラ切りのものをＡ類、回転糸切りのものをＢ類に分類したが、ほとんどがＡ類である。法量からの細分は行わなかった。Ａ類は口径11.8～13.3cm、器高2.9～3.7cm、器高指数は23～31、底径指数53～70である。ロクロ回転方向は左回転が多い。

長頸瓶（壺）全形を把握できるものは無く、口縁部と底部を図化した。小型品もある。

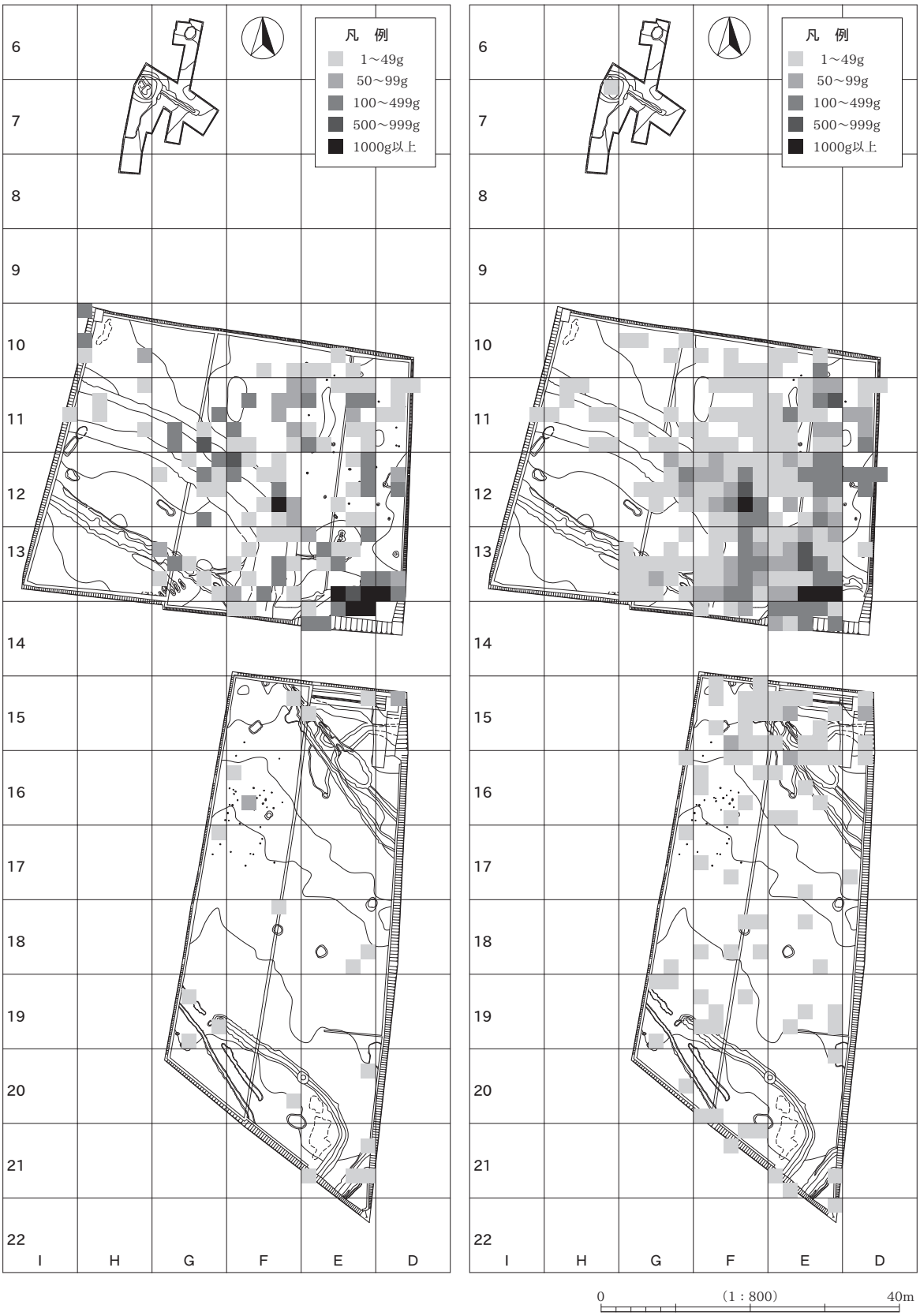
広口瓶（壺）やや頸部が長く、口縁部が大きく開くものである。底径も大きく、高台が付く。

横　　瓶　体部側面の閉塞部がある。

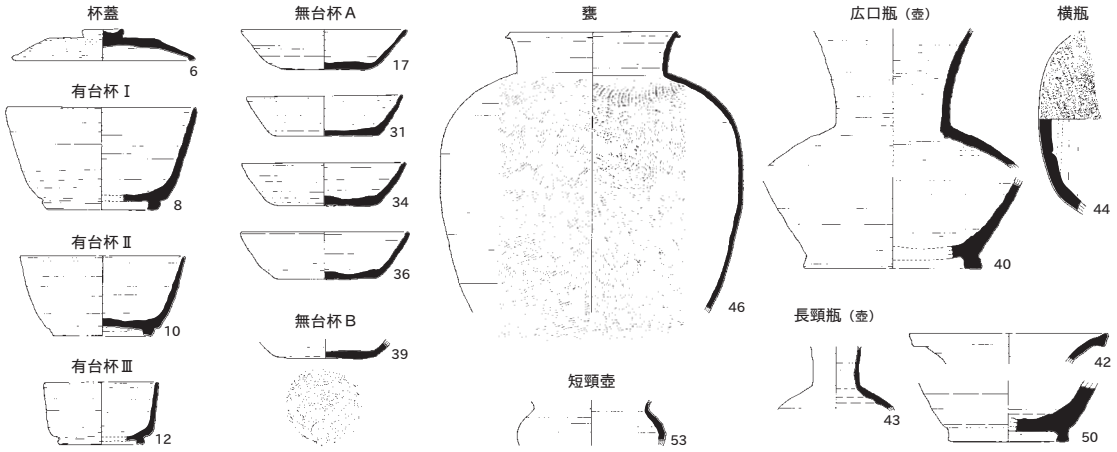
短 頸 壺　頸部も一体的に造られた小型品がある。



第７図　須恵器無台杯の底部切り離し方法



第８図　須恵器（左）・土師器（右）の重量分布図



第９図　須恵器の器種分類

甕　　大型のもので、体部外面にタタキ、同内面に当て具痕が認められる。

b　各　　説

SK55（図版 19・43-1・2）

1・2 は無台杯 A 類である。1 は器高指数 25、底径指数 64 である。

SK75（図版 19・43-5）

5 は無台杯 A 類で、器高指数 23、底径指数 55 である。底面に「中山」の墨書が認められる。「山」の 3 画目が長い特徴は、14・15 の書体と共通する。

SK78（図版 19・43-4）

4 は無台杯 A 類で、器高指数 28、底径指数 63 である。

SD54（図版 19・43-3）

3 は杯の体部片で、体部外面に墨書が認められる。19 の底面に書かれたものと同様な書体の「中」の可能性がある。

SR1（図版 19～21・43～45-6～47）

6・7 は杯蓋である。内面の広範囲に墨痕が認められ、硯として転用された可能性が高い。

8～12 は有台杯である。8 は有台杯Ⅰ類で、底面には墨痕が認められることから、硯として転用された可能性が高い。9･10 は有台杯Ⅱ類である。9 は口縁部外面の一部にタール状の付着物があり、底面には、「上」の墨書が認められる。10 は底面の中央よりやや左上に、小さい文字で、「中山（合わせ文字）」の墨書がある。11・12 は有台杯Ⅲ類で、体部外面の下部はともにロクロケズリだが、高台の形状は異なる。

13～38 は無台杯 A 類で、13～24 は墨書土器である。13 の底面には草花文（五枚の花弁または葉と茎）が描かれている。14 の内面にはタール状の付着物が認められる。また、底面には「中山」の墨書が認められる。16 の底面にも、小さい文字で、「中山」の墨書が認められる。14 と 16 の墨書は、「中」の 4 画目が左ハライ気味という共通性がある。15 の底面の墨書は「中山（合わせ文字）」で、「中」の 4 画目と「山」の 1 画目が一体化している。「山」の 2・3 画目は 17 のように行書体風である。17 は器高指数 25、底径指数 53 で、ロクロの回転方向は右である。焼成はやや不良で、胎土は③類、色調は外面が明褐灰色、内面が灰褐色を呈する。本遺跡内ではやや異質なものである。底面には太い文字で「中山（行書体？）」の墨書が認められる。18 の底面左寄りに、細長い墨書が認められる。これも「中山（草書体）」の可能性が

ある。19 は深身のもので、底面には大きく「中」の墨書が認められる。20 の体部外面には三つの墨点が、倒位にすると「∴」状に配置されている。記号の可能性もあるが、「中山」の墨書が多い遺跡なので、「山」の一字を書いた可能性もある。21・22 は回転ヘラ切り後ナデ調整で、底面には一文字では無く、「□（白または百）」・「丸」・「十」の三文字と考えられる墨書が認められる。22 は 21 の文字を分解、再配置したような墨書が認められる。23 も全体に墨痕が濃くて判然としないが、同様の文字の可能性がある。24 は底面左上寄りに「石継（行書体）」と墨書されている。23 は口縁部内面、24 は口縁部内外面にタール状の付着物が認められる。25 は浅身のもので、比較的作りが悪い。27・28・30 は器高指数が 24 で、ロクロ回転方向は左である。29 は体部外面に漆状のものが点状に 4 点付着する。記号の可能性もあるが、土師器無台椀に墨書された 84・98 のようなものかもしれない。32 はロクロ回転方向が右である。31・33 は器高指数が 26、34 は器高指数が 27、35・36 は器高指数が 28 で、ロクロ回転方向が左である。37 の底面は底部切り離しの際、ヘラで深く抉られる。器高指数 29、底径指数 70 と本遺跡内では比較的深身で、口径と底径の差が小さい。39 は無台杯 B 類である。胎土は④類で、色調はにぶい赤褐色を呈する。

40 は広口瓶で、体部外面の一部に漆が付着する。補修の結果とも思えるが、割れ口以外にも広く付着しており、目的は不明である。41 は瓶類の底部で、底径 13.8cm の大型品である。44 は横瓶の側面で、「閉塞円盤」が認められる。胎土は④類である。42 は長頸瓶の口縁部、43 は小型の長頸瓶と考える。

45～47 は甕である。45 の体部は肩が張らず、緩く湾曲している。46 は口径 26.5cm の大型のもので、体部外面に平行タタキ、同内面にあて具痕が認められる。あて具痕は円形を主体にほぼ全面に認められ、下半はさらに平行のあて具が使用されている。47 は体部上半で、内面のあて具は屈曲より下部が右下→左上、上部が右→左の方向で移動していることが確認できる。

包含層（図版 21・46–48～53）

48・49 は無台杯の底部で、回転糸切りにより切り離され、B 類に分類される。ロクロ回転は右で、ともに内外面にヒダスキ痕が認められる。50～52 は広口瓶の体部下部～底部で、52 は試掘調査 10 トレンチから出土した。53 は残りが良くないが、体部の湾曲や頸部の屈曲具合から、短頸壺の体部と考える。

2）土　師　器

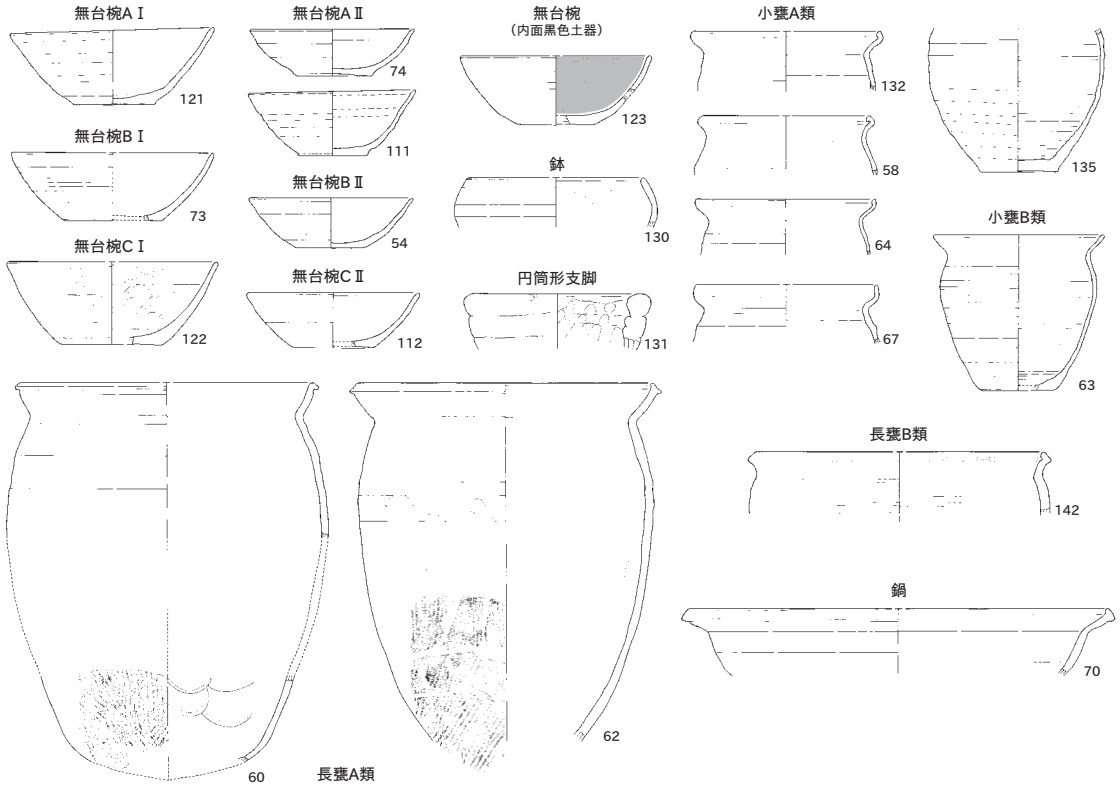
a　概　　要

古代の土師器も、須恵器と同様に SR1 の右岸側、13E5・10・15 周辺と 12F9 周辺で多く出土した（第 8 図右）。器種は無台椀、鉢、小甕、長甕、鍋が出土し、無台椀が多い。他に小甕がやや多い程度で、他の器種の個体数は少なかった。また、無台椀の体部外面、底面などに墨書されたものが 3 点認められた。以下ではまず各器種の概要を示す。製塩土器もここに含めて記述する。

無台椀　器面調整から A 類・B 類・C 類に分類した。A 類は口縁部～体部をロクロナデ、口縁部～体部内面を主にロクロナデ後ナデ調整をし、器面の凹凸を平滑にするもの。B 類は A 類と大きく変わらないが、体部外面の下部をケズリ調整するもの。C 類は口縁部～体部下部外面、口縁部～底部内面をミガキ調整するものである。また、A 類・B 類・C 類を口径の大きさから Ⅰ 類（15.6～17.3cm）、Ⅱ類（11.7～13.9cm）に細分した。底部切り離し方法はすべて回転糸切りである。内面を黒色処理したものも少量出土しており、器面調整は C 類と共通する。

鉢　口縁部が内湾するものである。

小　甕　短い口縁部が内傾し、体部のロクロナデの凹凸が顕著なものを A 類とした。多く出土した



第 10 図　土師器類の器種分類

が、口縁部～底部まで残るものはない。［春日 2007］による「須恵器技法で成形するもの」に分類される。また、最大径が口縁部にあるものはＢ類とした。

長　　甕　口縁部～体部上部をロクロナデ、同体部中部をケズリ、同体部下部～底部をタタキとするものをＡ類とした。破片資料ばかりで、口縁部から底部まで残るものはなかった。口縁部が短く、体部外面と口縁部～体部内面にカキ目が見られるものをＢ類とした。

鍋　破片資料のみで、口縁部から底部まで残るものはない。口縁部～体部上部をロクロナデしており、口縁部の形状も長甕と共通する部分が多い。体部の傾き等で分類した。

円筒形支脚　積み上げ痕を残す粗雑な作りで、被熱している。

b　各　　説

SK55（図版 21・46-54～60）

54～56 は無台椀で、54・55 は試掘調査の 8 トレンチで出土している。54 はＢⅡ類で、口縁部～体部上部外面はロクロナデ後ナデ、同体部下部はロクロケズリである。55・56 はＡ類と考える体部下部～底部である。57～59 は小甕Ａ類で、57・58 は口縁部～体部、59 は体部～底部である。58 の口縁端部は内側に大きく曲がる。60 は長甕Ａ類である。口縁端部が下方に長く延びるもので、口縁部～体部上半外面はロクロナデ、同体部下半～底部はタタキである。

SK75（図版 21・22・46-61～66）

61・62 は長甕Ａ類である。61 は口縁端部を上方へわずかに引き上げるもので、口縁部～体部上半はロクロナデである。62 は口縁端部が上方と下方へわずかに延びるもので、口縁部～体部上半外面はロクロナデ、同体部中部はケズリ、同体部下半～底部はタタキである。63～66 は小甕である。63 はＢ類で、

内外面ともロクロナデである。64 はＡ類の口縁部～体部上半である。65・66 は体部下部～底部である。

SK76（図版 22・46–67）

67 は小甕Ａ類で、口縁部内外面はロクロナデである。

SK77（図版 22・46–68～70）

68 は無台椀の底部である。69 は長甕Ａ類で、口縁端部が上方と下方へわずかに延びる。内外面ロクロナデである。70 は鍋の口縁部で、頸部は緩く屈曲し、口縁端部は上下方向に引き出される。

SK78（図版 22・46–71）

71 は無台椀ＡⅡ類で、口径 11.7cm と最も小さい。やや浅身のもので、口径指数は 31 である。

SE85（図版 22・46–72）

72 は無台椀の底部である。

SX110（図版 22・46–73）

73 は無台椀ＢⅠ類で、口縁部～体部上半がロクロナデ、同体部下半がロクロケズリである。

SR1（図版 22～24・47～50–74～143）

74～111 は無台椀ＡⅡ類である。101 の底面には「I」または「H」字状の墨書が認められる。84・98 の体部外面にも文字または記号的な墨書がある。形状が近似しており、倒位にすると須恵器杯に多く見られるような「中山」の可能性がある。74・75 は器高指数 29 の浅身のもので、76～87 は器高指数 30～32 のやや浅身のものである。88～106 は器高指数 33～35 のもので、93 の口縁部内外面にタール状の付着物、体部～底部内面にはススが付着する。107～111 は器高指数 36～40 の深身のものである。

114～121 は無台椀ＡⅠ類である。114・115 は器高指数 32 のやや浅身のもので、116・117 は器高指数 34・35 のやや深身のものである。118～121 は器高指数 36～38 の深身のものである。

112 は無台椀ＣⅡ類である。口縁部～体部内外面と底部内面はロクロナデ後ミガキである。113・122 は無台椀ＣⅠ類である。口縁部～体部外面はロクロナデ後ミガキ、同底部付近はケズリ、口縁部内面はロクロナデ後ミガキである。122 の底面には判読不能の墨書が認められる。123 は内面黒色土器の無台椀である。口径 14.9cm で、口径の大きさから分類したⅠ類にもⅡ類にも該当しない。

124～128 は焼成による器形の歪みが大きいもので、口径と器高の値が一定しない。耳皿のように歪むものもある。底径は比較的歪みが少ない部分で、5.4～6.0cm を測る。Ⅰ類は底径が最低でも 6.3cm 以上なので、すべてⅡ類に分類できる。内外面ロクロナデのＡ類が大半で、128 のみ内面にミガキがあるのでＣ類に分類される。口縁部～底部の厚みが比較的薄いことも、歪んだ原因と思える。129 は口縁部の細片であるが、外面に墨書が認められる。

130 は口縁部が内湾する鉢と考えられる。口縁部内外面はロクロナデ後ミガキである。131 は円筒形支脚で、内外面とも輪積痕を明瞭に残し、内面には指ナデを加える。底部である可能性も高い。

132～138 は小甕である。132 はＡ類で、口縁部～体部上部内外面はロクロナデ調整である。133～138 は体部～底部で、体部外面、体部～底部内面はロクロナデによる凹凸が顕著である。133・135・136・138 の体部内面にはコゲが付着する。

139～141 は長甕Ａ類である。139 は口縁端部を上方へわずかに引き上げるもので、口縁部～体部上部外面はロクロナデ、同中部はカキ目後ケズリ、口縁部～体部上半内面はロクロナデである。140・141 は口縁部～体部上半はロクロナデである。142 は長甕Ｂ類である。口縁部外面はロクロナデ、同体部はカキ目、口縁部～体部内面はロクロナデとカキ目である。小片から図化であり、口縁部も短いことから鍋

の可能性もある。143 は長甕の体部下半である。体部外面には指ナデ、指オサエが施される。

3）木器・木製品

木器・木製品は、古代のものと中世のもの合わせて 41 点図示した。その内、古代のものは 29 点で、柱根 6 点、盤 2 点、曲物 11 点、祭祀具 1 点、箸状木製品 1 点、棒状木製品 3 点、部材 5 点である。多くは SR1（23 点）からの出土品である。本文内の木取りなどの用語は、青田遺跡［猪狩 2004］に倣い記載した。

SB1（図版 25・50–145）

145 はP105 で検出した柱根で、風化が著しく、径は5cm にも満たない。分割材で、加工等は不明である。

SB2（図版 25・50–146～149）

146～149 は柱根で、146 が P91、147 が P68、148 が P106、149 が P86 で検出した。146・149 は、どちらも偏平の分割材である。147 は直径が約 14cm で、丸木取りをしている。風化が著しいものの、樹皮は確認できなかった。148 は、やや扁平であるが心去りミカン割で、樹皮は確認できない。

P67（図版 25・50–144）

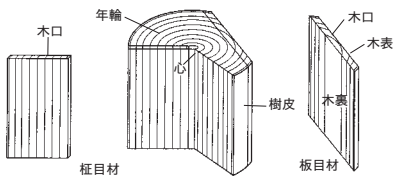
144 は柱根で、半割で方形に整形している。下部には加工痕が見られる。

SR1（図版 25～27・50～52–150～172）

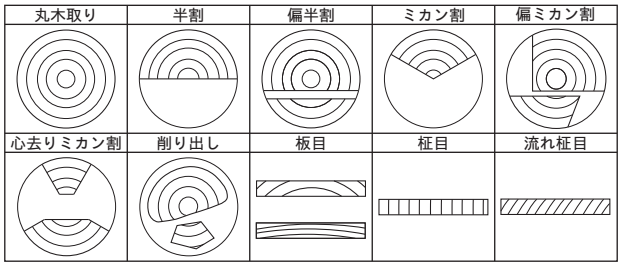
150・151 は盤である。150 は口径 22cm、底径 18cm、器高 1.6cm で厚みは 4mm 前後である。木取りは縦木取りの板目である。表裏面に刃物キズがわずかに見られる。また、底部裏面の中心部付近に長さ 1cm 前後の直線的な傷が 2 か所ある。製作時に生じたロクロの爪の痕跡と思われる。151 は木取りが縦木取りの柾目で、底径が約 16cm で厚みは 4mm 前後である。端部の欠落や磨滅が著しい。

曲物（152～162）は 11 点出土した。出土品に完形の曲物はなく、多くが底板のみのものである。159・162 の 2 点が側板のみのものとなっている。底板の木取りは大半が柾目取りで、158 のみが板目取りとなっている。152～154 の 3 点は、底板の周縁が幅 5mm 前後で一段低くなっている。152 には裏面に多数の刃物傷が認められ、樺皮が 2 か所残存している。154 にも同様に樺皮が 2 か所残存している。加えて、綴じ穴も 1 か所見受けられるため、計 3 か所の綴じ位置を確認できる。

155･157･160･161 には、木釘の痕跡が 1～4 か所認められる。155 は 4 か所が木釘穴の可能性がある。しかし、欠損や磨滅が著しいため判然としない。156 は正面の大部分が炭化し、炭化前に付いたとみられる傷もある。周縁に加工痕があることから、底板を再利用したことも考えられる。157 には木釘自体が 1 個残存する。160 は 3 か所の木釘穴を確認できる。正面には刃物傷が少量付き、周縁の一部が炭化している。161 は 3 か所の木釘穴と木釘穴の可能性がある 1 か所の計 4 か所が確認できる。そのうちの 1 か所には、比較的平滑できれいな木釘が残存していた。正面は、全体的に黒くなっているが炭化ではな



第 11 図　木取り及び木材一般の部分名称
（［橋本 2003］から転載）



第 12 図　木取りの分類（［猪狩 2004］から転載）

い。周縁を斜めに削っているため正面が背面に比べて狭くなり、断面が台形状を呈する。

159 は側板がほぼ完形で出土しており、樺皮による接合部もしっかりと残っている。直径 15.4cm で木取りは板目である。樺皮による綴じ合わせが残存しており、明確に構造をうかがい知ることができる。樺皮は 1 列外 3 段綴じとなっている。側板を 9cm 前後重複させてから、樺皮を側板下部の外面から内面に通している。そこから底板と接する部分を通して外面に出し、中程で再び内面に通している。最後に、外面の板のみ上端を覆い外面で綴じている。また、内面の綴じ部周辺にはケビキが見られる。162 は、側板の断片である。右側の端部に欠損、磨滅が見当たらないことから、巻きの終わりと考える。樺皮が 2 か所残存しているが、綴じ合わせは不明瞭である。どちらも残り具合から、おおよそ 2 段以上であったと思われる。また、中央には穿孔が見られる。

166～169 は棒状の木製品である。166 は箸状木製品の完形品で、長さ 20.4cm である。中程から下部にかけて多面的に細かくケズリ成形をしている。両端共にケズリを入れて尖らせている。167 は上部が折れているため不明だが、下部はケズリの痕跡が残る。中心部付近に刃物傷が 2 か所あり、ケズリの痕跡も見られるが磨滅のため判然としない。168・169 は一部にケズリの痕跡が見られる。168 は長さ約 53cm で、断面は円形を呈し、上部から下部にかけて徐々に細くなっている。上部と下部では、約 2 倍の太さの違いがある。上端部には、上から下にかけ 3 回ほど削った痕跡が確認できる。169 は長さ約 74cm で、断面は方形に近い形を呈し、上部から下部にかけてやや細くなる。両端の角を丁寧にカットし、表面も一部ケズリにより成形している。中央部には、圧痕またはケズリによる凹部が確認できる。

祭祀具と思われるものが 1 点出土した。163 は馬（牛）形に近く、全体的に 5mm 前後の厚みで薄く仕上げられており、直線的な作りである。上部は左右とも斜め下から上に向かってケズリを行い、張出部もケズリで細かく成形している。欠損した左側にも同様に張出部が存在した可能性がある。下端は右側が欠損しているものの、左右からケズリを行い尖らせていたと見られる。

部材（164・165・170～172）は 5 点出土した。164 は、両面とも風化のためか加工痕が見当たらない。曲物の底板や挽物などの素材と思われる。165 は全面に細かい加工が多数されており、丁寧な作りとなっている。特に下部の部分の成形が細かい。上端には、横から複数回に渡って切り付け、中心部を段状に盛り上げている。また、この段状部には部分的に炭化が見受けられる。木取りは板目である。170 は長さ約 53cm、幅約 27cm、厚さ 5cm で、櫂の水かきに近似する形状である。正面及び全側面には加工痕が顕著であるが、背面は正面・側面に比べ加工痕が少ない。側面の加工は中央から各頂点に向かって削られている。上下端部は、正背面から中央に向かって加工痕が残り、先端がやや鋭角的になっている。櫂などが壊れ、再利用の素材としての可能性も否定できないが、挽物や曲物の材として本来からこの形状であった可能性も有る。171・172 は分割材である。171 は半割であったものが割れてミカン割になっている。右側は上部がなく磨滅が著しいため切り取ったか折れたかは不明である。下部の切り口は丁寧にケズリが行われている。172 もミカン割である。下部から上部にかけてケズリを行い、上端に向かうほど薄くなっている。部材表面を面取りした可能性があるが、風化が著しいため定かではない。下端は、各方向から頂点に向かいケズリが行われている。

4）金　属　製　品

SR1（図版 27・52–173）

173 は出刃包丁の形状に近似する。全体的に非常に薄く作られ、刃先は極端に薄くなっている。腐食

が著しく、刃先は欠損が多い。また、刀身と茎（なかご）の付着物には砂粒が多く付着する。

包含層（図版 27・52–174・175）

174 は、厚さ 4mm 前後の薄い板状の鉄である。左の湾曲部分は、機能していると見られるが、用途は不明である。175 は鉄滓である。

B　中世以降の遺物

1）珠洲焼・陶磁器類・土製品

SK7（図版 28・52–176）

中世の遺構で、南区で検出した。176 は手づくねの土師質土器の皿で、京都系と考える。推定口径 7.6cm、底径 3.4cm、器高 1.4cm と小型で、指頭圧痕が認められる。

SD3（図版 28・52・53–177・178・205）

中世の溝である。177 は瀬戸美濃焼の皿で、内外面の一部に緑釉がかかる。外面は底部にかけてケズリが認められ、削り出しの高台を呈したものと思われる。畳付にはφ 5mm 程の胎土目状の貼付けがある。178 は珠洲焼片口鉢の片口部で、内面に卸目が 2 条ほど認められる。205 は唐津焼の皿の底部で、削り出しの高台である。表裏に胎土目が 4 か所ずつ認められ、周縁は故意的に打ち欠かれている。肥前系Ⅰ期のもので、中世の溝に混入したものと思われる。

SD101（図版 28・52–179～183）

中世の溝である。179～182 は珠洲焼で、179・180・182 が甕、181 が壺である。179 は内面に頸部の屈曲がわずかに残ることから体部上部片と考える。外面のタタキの稜は鋭角的である。180 も甕の体部片で、縦方向にタタキ目の変換が認められる。181 も体部上部と思われる。内面は後からナデを行った可能性がある。182 は底部付近の体部片で、内面にススがわずかに付着する。外面には幅 4cm 程で左下がり方向の磨痕が認められ、砥石として転用されたものと考える。183 は越中瀬戸焼の擂鉢の底部片で、平坦な底面には回転糸切り痕が残る。内面には複数条の卸目が 2 単位認められる。

SD2（図版 28・52–184～192・194）

近世の溝である。184 は青磁の椀の口縁～体部片で、外面には、緩く湾曲した幅広の溝が縦方向に 5 条程認められる。単位が意識されない退化した蓮弁文のようであり、15 世紀後半以降の所産と考える。被熱のためか器面がややザラザラする。185 は天目茶碗の体部下部から底部で、黒色の釉が高台付近まで及ぶ。畳付に重ね焼き時の痕跡が残る。186 は中世陶器の鉢の口縁部で、被熱のためか器面がザラザラする。瀬戸美濃焼の可能性があり、口縁端面は凹状で、上方を向く。187～190 は珠洲焼である。187 は甕の口縁部で、頸部はＵ字状に屈曲し、口縁下端部は外方に延びる。珠洲Ⅰ期［吉岡 2003］と考える。188・190 は甕の体部片で、190 の下部はタタキの方向が一定していない。189 は片口鉢の片口部で、指 1 本分の湾曲であり、比較的小型の製品と考える。内面は 1 単位（幅 2.0cm）20 条以上の細かい卸目が施される。

191 は伊万里焼の皿で、見込みに直線を幾筋か描いた文様が認められるが、全体像は定かでない。高台畳付に砂粒が付着することから、肥前系Ⅱ期［大橋 1993］の初期伊万里と考える。192 は唐津焼の皿で、口縁端部がやや肥厚する。文様は認められないが、肥前系Ⅰ期かⅡ期の絵唐津と考える。194 は唐津焼の皿の底部で、削り出し高台である。肥前系Ⅰ～Ⅱ期と思われ、内面全面と外面の一部に緑色系の釉が掛かる。

SD52（図版 28・52–193）

近世の溝である。193 は唐津焼の溝縁皿である。口縁端部が上方に短く屈曲し、体部下端も下方に屈

曲していることから、体部に段を持つ皿と考える。肥前系Ⅱ期であろう。

SX110（図版 28・52–195・196）

近世の遺構で、北区北側の調査区で検出した。195 は伊万里焼の皿の口縁部で、端部がやや上方を向き、釉薬が内外面に薄く均一に掛かる。17 世紀後半～18 世紀初頭頃のものである。196 は珠洲焼片口鉢の体部片である。内面は滑らかで、浅い卸目がわずかに 5 条程残る。

包含層（図版 28・53–197～204・206～210）

197 は推定口径 11.0cm の白磁の皿で、口縁端部が口禿げとなっている。体部外面に左下がり方向のハケ状の筋が認められるが、意図的なものか不明である。［山本 2000］分類のⅨ–1c 類で、13 世紀後半～14 世紀前半の所産である。198 は推定口径 15.7cm の青磁の椀で、口縁部はやや外反する。鎬蓮弁文で、蓮弁の中央の稜も明瞭である。［山本 2000］分類のⅡ–b 類で、13 世紀初～13 世紀前半の所産である。199 は青磁の製品で、全体形状は不明である。裏面・底面は比較的平坦な面であるが、破損面の風化が著しく、本来の面であるか判別できない。装飾品や置物の可能性を考えて実測した。表面は沈線による曲線が数条あり、草花文を描き出している。200 は珠洲焼片口鉢の口縁部で、卸目は 1 単位（幅 2.1cm）10 条以上である。口縁端部は鳥の嘴のように外方へ引き出され、端面は上方を向いておおむね水平を呈する。珠洲焼Ⅳ3 期（1360～1370 年代）頃と考える。201 は珠洲焼片口鉢の底部で、底面は静止糸切り痕＋板状圧痕が残る。1 単位（幅 2.3cm）11 条以上の卸目が、2 単位認められる。202 は珠洲焼甕の体部片で、砥石に転用されたものである。正・裏・下・右側面に磨痕を持ち、表面のタタキは完全に磨滅している。203 は推定口径 8.4cm、手づくねの土師質土器皿で、体部外面下端がわずかに屈曲する。204 は推定口径 12.5cm、手づくねの土師質土器皿で、体部外面に緩やかな段を持つ。203 が 15 世紀中葉～後葉、204 が 13 世紀末～14 世紀と考える。量は異なるが、ともに内面にタール状の付着物があることから、灯明皿として使用されたものである。

206 は伊万里焼の皿で、見込みには二重圏線の内側に文様が描かれる。高台内側に砂が付着しているが、畳付は磨かれて滑らかである。肥前系Ⅱ期の初期伊万里である。207 は唐津焼の皿で、口縁端部を欠損するが、193 同様の溝縁皿と考える。208 は唐津焼の皿で、高台が削り出しされる。絵唐津で、植物の葉のようなものが見えるので草木系と考える。また、内面に釉が剥がれた部分が 2 か所あるが、これは胎土目の痕跡と思われる。209 は唐津焼の椀の底部で、削り出しの高台である。内外面ともに釉薬が厚く掛かり、釉の端部は流れて厚く溜まっている。肥前系Ⅱ期と考える。210 は越中瀬戸焼の皿で、削り出し高台である。高台は畳付を中心に良く磨られ、滑らかな弧状を呈する。高台より内側には「十」字状の墨書が認められる。

2）木器・木製品

SD3（図版 29・53–211～221）

211・212 は、ともに漆器の有台椀である。211 は黒色漆を全体に塗布した後、内面を赤色漆で重ね塗りしている。外面には赤色漆で文様が描かれている。底面にも黒色漆が塗布される。212 も同様に、底面を含め全体に黒色漆が塗布されているが、剥落が著しい。高台周縁には刃物による線が 1 周する。

213～216 は刀形に近似する棒状木製品である。4 点とも水溜状落ち込み部（20E22）から出土し、213・214・216 は 3 点並行して出土した（図版 41）。両端は意図的にケズリあげられ、上方に向かって反っている。面取りも行われており、随所に加工痕が多数残るなど丁寧な作りとなっている。また、214

～216 の中央部付近には、擦れ、潰れにより薄くなる部分や凹みが見られる。それぞれを組み合わせて使用していた、いわゆる部材の可能性も考えられる。

217 は、祭祀具と思われる。SD3 の炭化層より出土した。長さ 16cm、厚さは 5mm ほどで下半分が炭化している。上部と下部の側面にケズリ痕が見られる。上部は左右から丸みを帯びるように削られ、上端中央は折り取られた痕跡がある。下部は、下端に行くほど細くなり先端は欠損している。

218 は半割材を加工した板状木製品で、正背面に刃物による加工痕が多数確認できる。側面端部は面取りされ、丸みを帯びる。219 も板状木製品で、上端部が沿うように炭化している。220 は長さ 27cm、幅 2.8cm の板状の木材で、上下端及び中央に穿孔が確認できる。また、下の穿孔の右隣には、他と同様の穿孔痕が見られることから、穿孔は 4 か所開いていたと思われる。221 は連歯下駄で、板目材から成る。台は前縁を隅切風にし、後縁を弧状にしており、前幅よりも後ろ幅がやや狭小となる。鼻緒孔は、前壺を台の中央に開け、後壺を歯の内側に開けている。歯のつくりは、台と同じ幅で方形である。全体的に欠損や磨滅が著しいものの、刃物による傷を散見することができる。

SD101（図版 29・53–222）

222 は直径約 12cm の曲物で、側板が 3 重に巻かれ、底板との結合には、木釘は用いず樺皮のみ使用して綴じている。側板の構造は、内側に位置する 1 枚の板を 2 周させて巻き、最も外側に位置する板を 1 周させて綴じている。最も外側の側板端部は、綴じやすいよう両角を斜めに切り落としている。綴じ部を見ると、2 列前内 1 段後内 3 段綴じと思われる。底板との結合部は 3 か所で見られ、それぞれの距離はおおよそ等間隔である。

3）石　製　品

SD3（図版 29・53–223・224）

223 は石鉢と思われる体部～底部片で、外面部も剥落している。内面は砥石のように滑らかで、横や右上がりの擦痕が認められる。また、ススが内面及び割れ口に付着している。224 はほぼ正方形を呈する薄い砥石で、正面のみ利用されており、多数の刃物傷が見られる。側面には、人為的加工か自然によるものかは不明だが、細かい欠損が多数確認できる。

SD101（図版 29・53–225・226）

225・226 は砥石である。225 は裏面欠損のために断面が三角形を呈しており、表面の 2 面が砥面として利用されている。226 は表裏・左右側面が砥面として利用されている。特に左側面の使用は顕著で、平滑である。刃物によるものかは不明だが、表面に小さな窪みや傷が認められ、左側面から右側面にかけてススが付着する。

包含層（図版 29・53–227・228）

227・228 は磨石である。ともに安山岩製で、形状は異なるが、全面が磨られている。重量は 227 が 543g、228 が 212g である。

4）銭　　貨

229 は SD101 の 1 層から出土した。篆書体の元祐通寶（宋銭）で、初鋳年は 1086 年である。230 は 2009 年度試掘調査トレンチ（6T）から出土した。洪武通寶（明銭）で、初鋳年は 1368 年である。背面上部に文字が認められるが、磨滅のため字種は不明である。

第Ⅵ章　ま　と　め

1　遺構・遺物から見た遺跡の位置付け

山崎遺跡の今回の調査区は、自然堤防上に立地する田塚集落の北側水田部に隣接する。古代（平安時代）と中世の遺構・遺物が見つかったが、両時期ともに集落の中心部ではなく、その縁辺部であったと想定する。時期ごとに遺構・遺物を概観し、遺跡の性格についてまとめてみたい。なお、遺構は帰属時期不明なものが多いが、遺物の分布傾向などから類推して記述する。

古代の遺構の可能性があるものは、掘立柱建物２棟、井戸１基、土坑 17 基、溝９条、ピット 66 基で、ほかに自然流路１条を検出した。遺構は、蛇行しながら西流する自然流路（SR1）を挟んで、11～13D・E グリッドと 16・17F グリッド付近に集中する。主体となるのは前者で、建物や井戸などがあることから居住域と考える。遺構はさらに東側に広がる様相があるので、今回の調査区は、集落の西側縁辺部にあたる。掘立柱建物２棟は長軸方向にずれて重複することから、建て替えであろう。井戸・土坑はその建物の周辺に配置され、建物とは重複しない。検出した居住域は小規模なものだが、自然流路が蛇行して流速が弱まる、河川交通に適した場所であったと考える。この自然流路は鯖石川の支流であったと思えるが、近世の頃の鯖石川は、川船で回米輸送を行っていた河川の一つであり［本山・桑原 1987］、古代にも十分な流量があったことが推測される。また、ブロック状埋土の土坑が計 10 基検出されたが、全て居住域から離れた場所に散在していた。「人為的埋土遺構」とも呼称［坂上 2003］されるもので、県内の低湿地に立地する遺跡において多く検出される。墓坑などの可能性を考慮して、自然科学分析した例もあるが、いまだ有効な結果は得られていない。三条市上道下西遺跡では、水田域に近接して検出されたことに注目し、水田に付随する土坑としてその用途を考察している［藤田 2012］。今回の調査区で水田は検出出来なかったが、その土坑の分布や形状から、同様に耕作に関わる遺構であった可能性が高いと考える。

古代の遺物分布を見ると、北区の東半（G ライン以東）に集中していることがわかる。また遺物の接合関係をみても、一部の例外を除き、ほぼ 20m 以内の距離で収まっており、遺物は大きく移動していないものと考える。遺物の帰属時期は、［春日 1997・1999］編年のⅤ2 期・Ⅵ１期・Ⅵ２期に相当し、9 世紀第２四半期～後半ころのものが中心となる。これらの遺物の多くは自然流路から出土し、居住域に近い斜面際～底面にかけて数か所の集中区があるので、投げ込まれたものであろう。13・14E グリッドの遺物集中区が最も多く、復元率も高い。墨書土器も多く含まれ、「中山」、あるいは「中」や「山」と書かれたものが多い。集落遺跡出土の墨書土器に対しては、「土器の所有を文字－記号で表示した可能性もあるが、むしろ一定の祭祀や儀礼行為等のさいに土器になかば記号として意識された文字を記す、いいかえれば、祭祀形態に附随した形で一定の字形、なかば記号化した文字が記載されたのではないだろうか」［平川 2000］との指摘もある。廃棄以前はそのような可能性もあるが、ほかに斎串や形代類など、祭祀を連想させる遺物が伴わないことから、現状では通常に廃棄された遺物群と捉える。

中世の遺物は少量で、13 世紀前半～15 世紀後半までのものが散見される。珠洲焼が中心で、時期が特定できるものは少ないが、珠洲Ⅳ期ころ（14 世紀代）のものが多いようである。中世の遺構の可能性があるものは、土坑１基、溝６条、ピット１基、性格不明遺構２基で、南区南端（19～21E～G グリッド）付

近に分布する。調査区外南側が自然堤防上にあたり、地形的に高所になることから、中世集落の中心部がその場に検出される可能性は高い。また、その方向から延びる SD3 と SD101 は区画溝と考えられ、線対称の関係にあることから、集落から生産域へとつながる出入口であったことが想定できる。また SD3 の 20E15 グリッドを中心に、中位の層境で炭化物を検出した。溝内の広範囲に分布し、その層中から斎串的なものも出土していることから、境界に関わる祭祀行為が行われた可能性がある。

近世の遺構は、調査区中央を南東－北西方向に斜断する SD2 と SD52 のほか、北区北側の調査区に SX110 があるのみである。SD2 と SD52 は用水としての機能が想定され、SD2 が SD52 を南区北端で切ることから、同一用水の掘り返しと考える。近世の遺物は量が少なく、この SD2 から出土したものが大半で、16 世紀末～18 世紀代のものがある。17 世紀前半のものを中心に図化した。遺物量や遺構の状況から、近世の時点では現在同様に、全体が水田などの生産域として利用されていたことがうかがえる。

2　古代の土器について

A　出土土器の編年的位置付け

1）出土土器の概観

今回の調査では、SR1 を中心に平安時代の土師器、須恵器が多く出土した。土師器は破片数約 5,500 点、重量約 35,960g、須恵器は破片数 371 点、重量約 23,863g であった。

須恵器は、遺跡全体では無台杯が大半であり、杯蓋、有台杯、壺・瓶類が少量であることが第 3 表からわかる。多く出土した無台杯 A 類は、口径 11.8～13.3cm、器高 2.9～3.7cm、底径 6.9～9.2cm で、口径と器高に差が少ないのが特徴である（第 13・14 図）。器高指数からは 23・24、25～27、28～31 に、底径指数からは 61 以下、62～65、66～69、70 以上のグループに分けて示した（第 17 図）。本遺跡では器高指数 25～27 前後、底径指数 66～69 前後のものが多いことがわかる。有台杯は深身のものが主体で、本遺跡では、口径 14.7cm、器高 8.1cm の Ⅰ 類、口径 12.8～13.7cm、器高 6.2～6.8cm の Ⅱ 類、口径 8.8～9.8cm、器高 4.9～5.0cm の Ⅲ 類に分類可能であった。

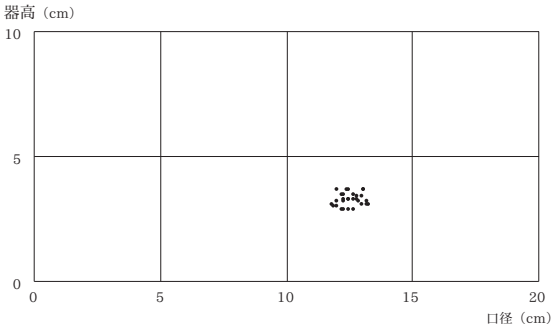
器種	口縁部残存率（/36）	比　率（残存率）	破片数	比　率（破片数）
杯　蓋	45	4.7 %	7	1.9 %
有 台 杯	104	10.8 %	20	5.4 %
無 台 杯	802	83.4 %	287	77.3 %
壺・瓶類	11	1.1 %	56	15.1 %
灰釉陶器	0	0 %	1	0.3 %
計	962	100 %	371	100 %

第 3 表　須恵器等の器種構成比率

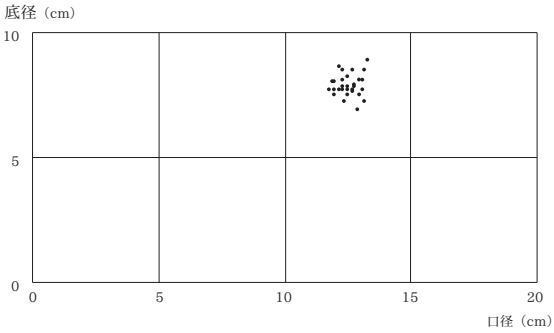
出土した土師器、約 5,500 点のうち、1,454 点は包含層（Ⅱ層・Ⅲ層）からの出土であった。包含層出土の土師器の大半は破片が小さく、また摩耗が著しいため器種の判別ができなかった。SR1 と遺構出土の土師器は約 4,000 点で、そのうち約 70%は SR1 からの出土であった。破片数からの器種の構成比率は無台椀が 73%、小甕 9%、長甕 14%などとなる。多く出土した土師器無台椀 A・B・C 類は、一部を除き、口径 15.6～17.3cm、器高 5.4～6.5cm の Ⅰ 類、口径 11.7～13.9cm、器

器種			口縁部残存率（/36）	比　率（残存率）	破片数	比　率（破片数）
食 膳 具	須 恵 器	杯　蓋	39	1.4 %	5	0.2 %
		有 台 杯	101	3.5 %	16	0.7 %
		無 台 杯	622	21.7 %	147	6.3 %
	土 師 器	無 台 椀（黒色土器）	1889	65.8 %	1488	63.6 %
		鉢	3	0.1 %	5	0.2 %
食膳具小計			2654	92.5 %	1661	71.0 %
貯 蔵 具	須 恵 器	壺・瓶類	6	0.2 %	21	0.9 %
		甕	85	3.0 %	135	5.8 %
貯蔵具小計			91	3.2 %	156	6.7 %
煮 炊 具	土 師 器	小　甕	84	2.9 %	209	8.9 %
		長　甕	37	1.3 %	237	10.1 %
煮炊具小計			121	4.2 %	446	19.0 %
そ の 他	灰釉陶器	皿	0	0 %	1	0.04 %
	土 師 器	製塩土器	4	0.1 %	77	3.3 %
その他小計			4	0.1 %	78	3.3 %
総　計			2870	100 %	2341	100 %

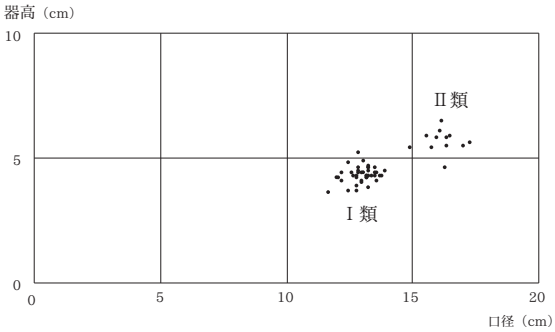
第 4 表　SR1（3・4 層）の器種構成比率



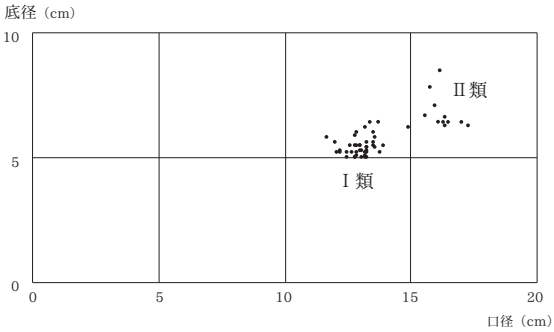
第 13 図　須恵器無台杯の法量（1）



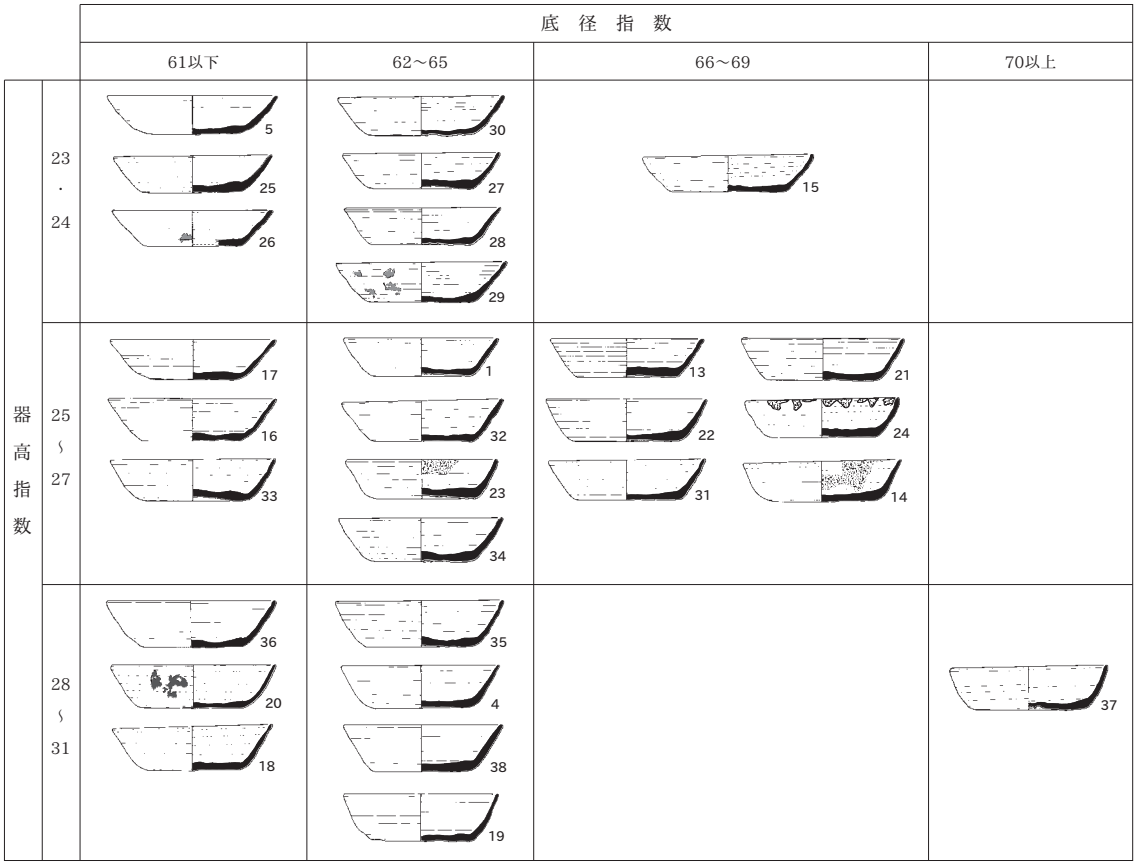
第 14 図　須恵器無台杯の法量（2）



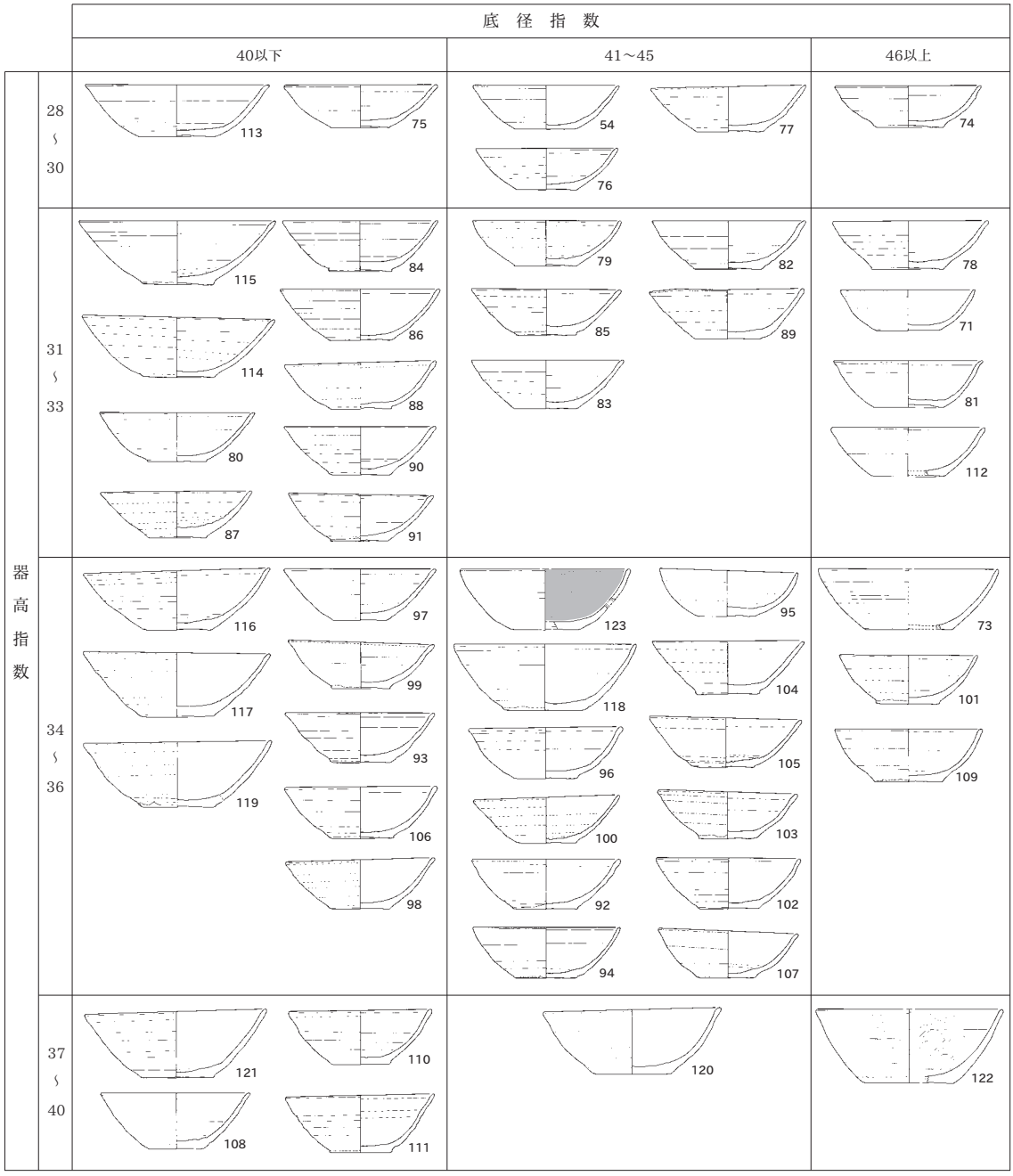
第 15 図　土師器無台椀の法量（1）



第 16 図　土師器無台椀の法量（2）



第 17 図　須恵器無台杯の器高・底径指数



第 18 図　土師器無台椀の器高・底径指数

高 3.6～5.2cm のⅡ類に明確に分けることができる（第 15・16 図）。さらに器高指数から 28～30、31～33、34～36、37～40 に、底径指数 40 以下、41～45、46 以上のグループに分けた（第 18 図）。第 4 表には、土師器、須恵器を最も多く出土した SR1（3・4 層）の器種構成比率を掲げた。1～2 層、特に 1 層出土の破片数は多いものの、破片は概して小さい。完形に近い個体を多く出土した 3・4 層出土のものとは接合関係がまったくなかったため、ここでの集計から除外した。本遺跡では、食膳具が大半を占めていることがわかる。

2）編年的位置付け

本遺跡出土の須恵器、土師器は概ね9世紀後半前後に位置付けられるようである。県内のこの時期の基準資料の一つとして、上越市今池遺跡SD3出土土器がある［坂井ほか1984］。須恵器では、底部切り離しがヘラ切りの無台杯、深身の有台杯B・C類、杯蓋、土師器では無台椀、黒色土器無台椀、小甕の存在や形状に類似性が認められる。細部を見ると、ヘラ切りの須恵器無台杯の法量、器高指数は両遺跡で一致する。一方、土師器無台椀は、本遺跡では口径15.6～17.3cm、器高5.4～6.5cm、器高指数32～40のⅠ類、口径11.7～13.9cm、器高3.6～5.2cm、器高指数29～40のⅡ類に分けたが、今池遺跡SD3では口径17～18cmの杯Ⅰ、口径14～15cmの杯Ⅱ、口径11～13cm、器高2.5～4.5cm、器高指数24～35の杯Ⅲに分けられ、本遺跡と法量分布が異なることがわかる。

次に長岡市（旧和島村）八幡林遺跡3期・4期［田中2005］を見る。八幡林遺跡3期は9世紀後半に位置付けられている。すべて佐渡小泊窯跡群の製品であるという須恵器無台杯は、口径12～13cm、器高3cm前後、底径指数63～65・69～70、器高指数23～24のものが多いという。本遺跡とは口径・器高が一致するが、底径指数と器高指数、とくに後者については最小領域のみ一致する。土師器無台椀は出土していないという。八幡林遺跡4期は9世紀末～10世紀初頭に位置付けられている。須恵器無台杯は口径12～13cm、器高3cm前後のものと、2cm前後のものがあり、底径指数52～63、器高指数22～25である。底径指数、器高指数は本遺跡の最小領域のみ一致している。土師器無台椀は、口径11.0～14.3cm、器高3.5～5.2cm、器高指数30～34・35～38・41～43、底径指数40～45程度であるという。本遺跡のⅡ類に類似するようである。

続いて出土土器が9世紀第2四半期と報告された新潟市（旧新津市）寺道上遺跡［渡邊2001］を見る。須恵器無台杯は、底径指数50～65、器高指数26前後にまとまるという。本遺跡とは底径指数、器高指数とも一部の領域で一致する。SK3・SX26出土の土師器無台椀は、口径16～17cmのⅠ類、12～14cmのⅡ類が存在する。器高指数はⅠ類が28.5前後・32～33・35～36、Ⅱ類が26前後・30前後・35～36に分かれる。底径指数はSX26で40・50・58の3種が確認できるという。本遺跡とは、Ⅱ類に限り、法量・器高指数が一致するようである。また、黒色土器無台椀が出土している。

［春日1997・1999］編年では、今池遺跡SD3出土土器はⅥ1期・Ⅵ2期・Ⅵ3期、八幡林遺跡3期（下ノ西遺跡8期併行［田中2003］）はⅤ2期・Ⅵ1期に、同4期（下ノ西遺跡9期併行）はⅥ2期・Ⅵ3期に位置付けられる。ここではⅤ2期・Ⅵ1期・Ⅵ2期の様相を見る。Ⅵ1～2期の事例としてあげた、今池遺跡SD3の土師器無台椀は、器高指数が25・29・32・38前後の4タイプがあり、38前後のものは2種の法量があることが、本遺跡と共通するようである。器高指数25前後のタイプがこの段階に終わり、38前後のタイプがこの段階に出現した可能性が高いようである［春日1997］。和島・出雲崎地域8期（Ⅴ2期・Ⅵ1期）の検討では、7期まで見られたハケメの「土師器釜・西古志型釜」は確認されておらず、須恵器技法を用いた「土師器長釜・小釜」が大半を占めるという［春日2001］。下ノ西遺跡8・9期の検討では、下ノ西遺跡9期（Ⅵ2・Ⅵ3期）の須恵器無台杯は同8期（Ⅵ1期）のものに比べ器壁が薄く、また、器高が低く大型のものが多いという［春日2005］。

本遺跡の土器は、器高指数が29～36の土師器無台椀Ⅱ類と器高指数が25～31の須恵器無台杯の多くをⅤ2期、器高指数が37～40の土師器無台椀Ⅰ類・Ⅱ類と器高指数が23・24の須恵器無台杯の多くをⅥ1期、器高指数が24、底径指数62の器厚の薄い30などはⅥ2期の可能性がある。ただ、SR1の右岸、

13E5 とその周辺の 3・4 層からまとまって出土した土器群は、このように時期幅があるので、9 世紀末頃に一括廃棄されたと考えたい。

B　墨書土器について

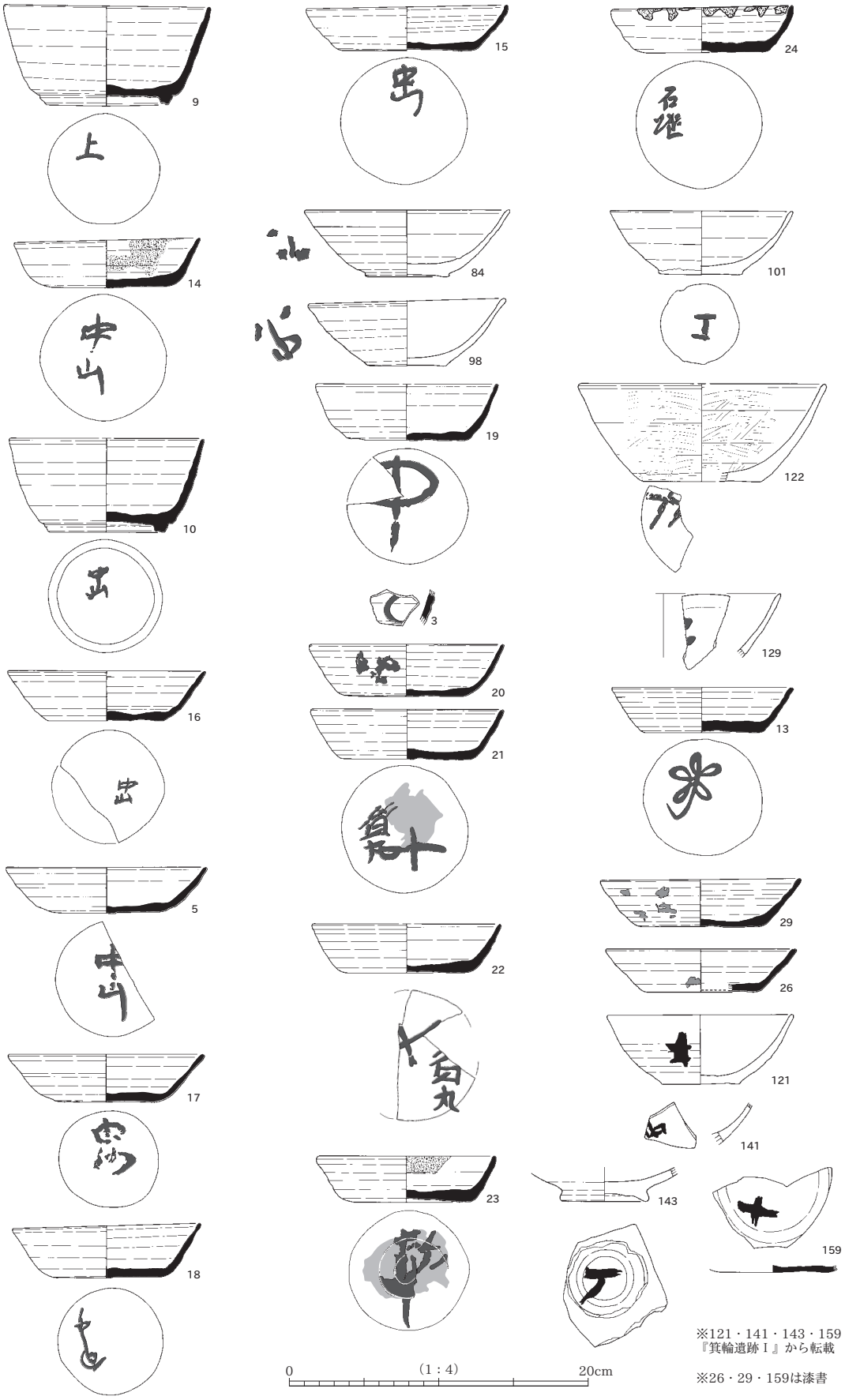
今回の調査では、墨書土器が 21 点、漆書土器が 2 点出土した。山崎遺跡の特徴として、須恵器は底部外面に、土師器は体部外面に書かれるものが多い。体部外面に書かれたものは、倒位で書かれたものと推測する。また量の多少はあるが、14・23・24 のようにタール状付着物が認められるものもあり、最終的に灯明具として使用されているものがある。

まず、須恵器無台杯 7 点、土師器無台椀 2 点に書かれた「中山」について検討する。須恵器無台杯 14 は底部外面に大きく、10･16 は小さく書かれている。書体も様々で、5･14･16 が楷書体、17 が行書体、18 が草書体、15 が合わせ文字で、10 は楷書体と合わせ文字の両者の可能性がある。土師器無台椀 84・98 は倒位にした場合、上位にくるのが「中」と読めることから、同様に「中山」が変化したものと判断した。なお、「中」だけが書かれたものに、3 と 19 がある。また 20 は倒位にした場合、三角状に点が並ぶため、「山」だけが書かれたものと考える。本遺跡から南西へ 3km 離れた柏崎市箕輪遺跡からは、1997（平成 9）年度の調査［中澤 1998］において、底部外面に本遺跡 5 の書体に似た「中山」が、2000（平成 12）年度の調査［小野塚ほか 2002］において、土師器椀の体部外面に「中」と読めそうな文字（第 19 図 141）が書かれた墨書土器が出土しており、その関連性が注目される。

21 は一文字では無く、右に「十」の一文字、左に「□（白・百か）」と「丸」の二文字を書いたものと考える。『新潟県内出土古代文字資料集成』［小林・戸根・相沢 2004］によれば、上越市寺町遺跡からは、「十嶋継」と右に一文字、左に二文字書かれたものが複数出土している。22 は 21 の文字を分解し、左右を入れ替えて配置したように見える。23 は判読不能で、単なる墨痕の可能性もあるが、墨の濃い部分を見ると、上半の左側に「□」、右側に「丸」、下半に「十」を配置したようにも見える。24 は「石継」と読め、人名の可能性がある。

101 は、「工」字状の文字、あるいは「I」や「H」状の記号が書かれている。これは、箕輪遺跡の土師器椀底面に「T」、あるいは「丁」字状の文字、あるいは記号が書かれた墨書土器（第 19 図 143）と関連がありそうである。122 は「七」字状の文字を反転したものに類似する。26・29 は漆が点状に付着するものであり、記号の可能性もある。箕輪遺跡でも同様に、漆で書かれたものが数点出土している。

13 は、須恵器無台杯の底面に、草花文が描かれている。一筆書きされており、「左上→左下→右下→右上→上部→茎（上→下）→下端でハネ」の順に描かれている。自然物を対象とする例は珍しく、県内では初めての出土である。今後は県外資料に類例を求めるとともに、当時の様々な調度品に描かれたであろう草花文にも注目したい。



第 19 図　山崎遺跡と『箕輪遺跡Ⅰ』の墨書・漆書土器

要　　約

1　山崎遺跡の今回の調査区は、新潟県柏崎市大字藤井字山崎 1691-1 番地ほかに所在する。柏崎平野の中央部、鯖石川左岸の扇状地先端付近に立地し、現況は水田で、遺構検出面の標高は 4.2～5.0m である。

2　発掘調査は一般国道 8 号柏崎バイパスの建設に伴い、2010（平成 22）年 9 月 13 日～2011（平成 23）年 1 月 29 日にかけて実施した。調査面積は 3,975m^2 である。

3　調査の結果、古代・中世・近世の遺構・遺物を検出した。今回の調査区の主体は古代である。

4　古代の遺構は、掘立柱建物 2 棟、井戸 1 基、土坑 17 基、溝 9 条、ピット 66 基で、ほかに自然流路を 1 条検出した。遺構は、蛇行しながら西流する自然流路を挟んで、11～13D・E グリッドと 16・17F グリッドに集中する。前者は居住域で、古代の集落の中心部は、その調査区外東側に存在する。自然流路にはその居住域から廃棄されたと思える、遺物集中区をいくつか検出した。

5　古代の可能性があるブロック状埋土の土坑を 10 基検出した。いずれも居住域から離れた場所に散在しており、水田などは検出できなかったが、耕作に関わる遺構であった可能性が高い。

6　古代の遺物は須恵器・土師器が主体で、9 世紀第 2 四半期～後半ころのものが中心となる。自然流路から出土したものが多く、盤・曲物などの木製品、刀子などの金属製品も出土している。墨書土器も多くあり、「中山」と書かれているものが多い。同じ文字が出土した同市箕輪遺跡との関連も考慮する必要がある。また「草花文」が 1 点あり、自然物を対象に描く例は珍しいことから注目される。

7　中世の遺構は、土坑 1 基、溝 6 条、ピット 1 基、性格不明遺構 2 基で、南区南端（19～21E～G グリッド）付近に分布する。調査区外南側に中世集落の中心部が存在する可能性が高い。SD3 と SD101 は区画溝と考えられ、居住域と生産域をつなぐ出入口を構成している可能性がある。

8　中世の遺物は少量で、土器類では青磁、白磁、天目茶碗、瀬戸美濃焼、珠洲焼、土師質土器などがある。ほかに、石鉢・砥石などの石製品、漆器椀・曲物・下駄などの木製品、銭貨などが出土した。珠洲焼はⅣ期ころ（14 世紀代）のものが多い。

9　近世の遺構は溝 2 条、性格不明遺構 1 基のみで、溝は用水と考える。調査区全体が水田などの生産域であったと思われ、出土遺物も少量である。18 世紀代の肥前系陶磁器が最も多い。

引用・参考文献

愛知県史編さん委員会　2007 『愛知県史 別編　中世・近世 瀬戸系』 愛知県

荒川隆史・加藤　学　1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第93集 和泉A遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

石川智紀　2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第103集 新保遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

上田秀夫　1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会

大橋康二　1993 『考古学ライブラリー55 肥前陶磁』 ニューサイエンス社

岡田和則ほか 2000 「箕輪遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査時事業団年報』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

荻野正博　1983 「越後国中世荘園の成立」『新潟史学』第16号　新潟史学会

小田由美子ほか　2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第149集 滝寺古窯跡群・大貫古窯跡群』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

小野塚徹夫ほか　2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第109集 箕輪遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

加賀真樹　1997 「第6章第1節 珠洲窯」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会編　桂書房

春日真実　1997 「越後・佐渡における9世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第6号　北陸古代土器研究会

春日真実　1999a 「第4章 古代 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編　高志書院

春日真実　1999b 「越後佐渡の様相」『北陸古代土器研究』第8号　北陸古代土器研究会

春日真実　2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第104集 梯子谷窯跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　2003 「消費遺跡出土佐渡小泊産須恵器のロクロ回転方向 －越後出土の資料を中心に－」『研究紀要』第4号　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について －「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に－」『新潟考古』第16号　新潟県考古学会

春日真実　2007 「越後における古代の煮炊具について」『新潟考古』第18号　新潟県考古学会

金子拓男　1987 「三締寺経塚遺跡」『柏崎市史資料集 考古篇1』 新潟県柏崎市史編纂委員会

金子拓男　1990 「第6章第5節 交通と交通路、第6節 延喜式内神社」『柏崎市史 上巻』 新潟県柏崎市史編纂委員会

九州近世陶磁学会　2000 『九州陶磁の編年 －九州近世陶磁学会10周年記念－』

小林昌二・戸根与八郎・相沢　央　2004 『新潟県内出土文字資料集成』 新潟墨書土器検討会

坂井秀弥ほか 1984 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第35集 今池・下新町・子安遺跡』 新潟県教育委員会

坂井秀弥　1997 「第5章第8節 中・近世の越後国」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会編　桂書房

坂上有紀ほか 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第118集 上浦遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

笹沢正史　2001 「須恵器瓶類の口縁頸部接合痕跡」『北陸古代土器研究』第9号　北陸古代土器研究会

品田高志ほか 1990 『吉井遺跡群Ⅱ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第13　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志ほか 1991 『小児石』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第15　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志ほか 1992 『行塚遺跡』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第17　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志　1995a 『藤橋東遺跡群』柏崎市埋蔵文化財調査図録第1集　新潟県柏崎市教育員会

品田高志　1995b 「Ⅶ 総括 1 鵜川中流域における古代・中世の遺跡」『柏崎市の遺跡Ⅳ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第20集　新潟県柏崎市教育員会

品田高志・伊藤啓雄　1997 『前掛り』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第26集　新潟県柏崎市教育員会

品田高志ほか 1999 『角田』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第32集　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志・中野　純ほか　2000 『横山東遺跡群Ⅰ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 34 集　新潟県柏崎市教育委員会
品田高志・伊藤啓雄　2001 『柏崎町』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 38 集　新潟県柏崎市教育員会
品田高志　2008 『江ノ下』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 52 集　新潟県柏崎市教育委員会
鈴木郁夫ほか 1988 『土地分類基本調査 岡野町』 新潟県
鈴木郁夫ほか 1989 『土地分類基本調査 柏崎・出雲崎』 新潟県
田中　靖　2003 『和島村埋蔵文化財調査報告書 第 14 集 下ノ西遺跡Ⅳ』 新潟県和島村教育委員会
田中　靖　2005 『和島村埋蔵文化財調査報告書 第 16 集 八幡林遺跡Ⅳ』 新潟県和島村教育委員会
中澤　毅　1998 「箕輪遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報　平成 9 年度』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
中野　純　2008 『よみがえった古代の製鉄』柏崎の遺跡シリーズ第 1 集　新潟県柏崎市教育委員会
新潟県考古学会編　1999 『新潟県の考古学』 高志書院
平川　南　2000 『墨書土器の研究』 吉川弘文館
平吹　靖ほか 2010 『軽井川南遺跡群Ⅰ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 59 集　新潟県柏崎市教育委員会
藤田　登　2012 「第Ⅳ章 4 中世」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 231 集 上道下西遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
藤巻正信　1988 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 27 集 西田・鶴巻田遺跡群』 新潟県教育委員会
水澤幸一　2005 「越後の中世土器」『新潟考古』第 16 号　新潟県考古学会
水澤幸一　2007 「中世越後の土器と陶磁器 －11～14c. 前半」『中世前期北陸のカワラケと輸入陶磁器・施釉陶器・瀬戸美濃製品』 北陸中世考古学研究会
本山幸一・桑原　孝　1987 「第四章第五節 二 河川水運」『新潟県史 通史編 3 近世一』 新潟県
山崎忠良ほか 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 140 集 東原町遺跡・下沖北遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
山本信夫　2000 『大宰府条坊跡XV －陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第 49 集　太宰府市教育委員会
山本　肇ほか 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 125 集 下沖北遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
吉岡康暢　1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
吉岡康暢　2003 「珠洲焼概論」『珠洲焼概論』平成 15 年度埋蔵文化財専門職員実務研修資料集　新潟県教育庁文化行政課
米沢　康　1976 「古代北陸道の伝馬制について」『信濃』第 28 巻 5 号　信濃史学会
米沢　康　1980 「大宝二年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』第 32 巻 6 号　信濃史学会
渡邊朋和　2001 「第Ⅶ章 まとめ 2 遺物」『寺道上遺跡発掘調査報告書』 新潟県新津市教育委員会

山崎遺跡　遺構観察表（1）

「断面形」は図面作成または写真撮影を行ったもので、判別可能な遺構について記載した。

遺構番号	遺構種別	建物	分割図版	個別図版	写真図版	グリッド	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	主要な切り合い	時期・備考	出土遺物
1	SR	—	5・8 9・12	7・14	30・31 32・36 37・40	11I2・3～ 14D16–15D20	—	台形状	（6300）	595–741	14–146	SR1 ≠ SD54 SR1 ＜ SD2 SD52.SK65	古代	須恵器・土師器・土製品 木製品・金属製品
2	SD	—	5・9 12・13	6・14	37・39 40	12I8・9–16D20	—	弧状 台形状	6500	63–344	6–96	SD2 ＞ SR1. SD52	近世	須恵器・土師器・珠洲焼 青磁・瀬戸美濃焼・天目 近世陶磁器
3	SD	—	16・17	18	31・32 41・42	19G9–21E19	—	半円状 台形状	（3240）	44–186	13–124		中世	須恵器・土師器・珠洲焼 瀬戸美濃焼・石製品 木製品
4	SD	—	16・17	18	42	19G17・18 –20F20	—	弧状	（1880）	45–76	4–16		N–32°–W	
5	SD	—	16	18	42	19G8–11	—	弧状	460	42–79	6–9		N–41°–W	
6	SD	—	16・17	18	42	19G5–20F14	—	弧状	919	39–89	5–13		N–34°–W	
7	SK	—	16	15	41	19G15・20, 20G11	楕円形	弧状	148	109	15		中世 N–40°–W	須恵器・土師質土器
8	P	—	16	15	41	19G19・20	円形	弧状	51	38	12			
9	SK	—	12	14	39	15F14・19	長方形	箱状	184	120	42		（古代） N–48°–E	土師器
10	SK	—	13	14	39	16F10・15	楕円形	半円状	111	84	48		N–46°–E	
11	P	—	12	—	—	15F20	円形	半円状	15	—	15			
12	P	—	12	—	—	16F21	円形	—	16	—	18			
13	P	—	12	—	—	16F6	円形	U字状	13	—	14			
14	P	—	12・13	—	—	16F18	円形	—	19	—	22			
15	P	—	12・13	—	—	16F13	円形	U字状	12	—	15			
16	P	—	12・13	—	—	16F8	円形	U字状	14	—	16			
17	P	—	12・13	14	40	16F14	楕円形	階段状	28	（19）	26			
18	P	—	12・13	—	—	16F14	円形	半円状	23	—	13			
19	P	—	12・13	—	—	16F13・14	円形	—	15	—	33			
20	SK	—	12	14	39	15F11	楕円形？	階段状	100	—	64		（古代）	
21	P	—	12・13	—	—	16F14・19	円形	階段状	20	—	21			
22	P	—	12・13	—	—	16F19	円形	—	14	—	22			
23	P	—	12・13	—	—	16F19	円形	—	13	—	20			
24	P	—	12・13	14	40	16F19	円形	階段状	17	—	14			
25	P	—	12・13	—	—	16F23	円形	—	15	—	19			
26	P	—	12・13	—	—	16F23	円形	—	17	—	30			
27	P	—	12・13	—	—	16F23	円形	U字状	14	—	11			
28	P	—	12・13	—	—	16F24	円形	U字状	17	—	26			
29	P	—	12・13	—	—	16F24	円形	U字状	10	—	8			
30	P	—	12・13	—	—	16F24	円形	箱状	19	—	12			
31	P	—	13	—	—	16F25	円形	U字状	19	—	15			
32	P	—	13	14	40	16G5	円形	U字状	18	—	18			
33	P	—	13	—	—	16F25	円形	U字状	12	—	12			
34	P	—	12・13	—	—	16F19	円形	U字状	11	—	12			
35	P	—	12・13	—	—	16F14	円形	漏斗状	12	—	13			
36	P	—	12・13	—	—	16F9	円形	袋状	18	—	13			
37	P	—	13	—	—	17F11	円形	箱状	14	—	10			
38	P	—	13	—	—	17F11	円形	U字状	14	—	31			
39	P	—	13	—	—	17F17	円形	U字状	13	—	15			
40	P	—	13	—	—	17F17	円形	U字状	11	—	13			
41	P	—	13	14	40	16F25	円形	U字状	16	—	24			
42	P	—	13	—	—	17F22	円形	U字状	12	—	13			
43	P	—	13	—	—	17G2	円形	—	19	—	18			
44	P	—	13	—	—	17G2	円形	U字状	13	—	11			
45	P	—	13	—	—	17G1	円形	箱状	19	—	8			
46	P	—	13	—	—	17F8	円形	台形状	16	—	11			
47	P	—	13	—	—	17F12	円形	U字状	16	—	11			
48	P	—	13	—	—	17F18	円形	U字状	16	—	14			
49	P	SB01	8・9	11	—	12E9	円形	U字状	20	—	27		古代	
51	P	—	12・13	—	—	16F9	円形	U字状	10	—	17			
52	SD	—	12・13	14	39・40	15F2–17D17	—	弧状 半円状	（2680）	71–140	26–49	SD52 ＞ SR1 SD52 ＜ SD2	近世 N–33°–W	土師器・珠洲焼 近世陶磁器
53	P	—	12・13	—	—	16F23	円形	—	14	—	13			
54	SD	—	9	10	35・37	13E11–13G3・ 4	—	弧状 半円状	（1215）	44–138	4–20	SD54 ≠ SR1 SD54 ＞ SK55	古代	須恵器・土師器
55	SK	—	9	10	35	13E7・8・12・ 13	楕円形？	弧状	不明	（188）	25	SK55 ＜ SD54	古代	須恵器・土師器
56	P	SB01	8	11	33	12E22	円形	漏斗状	28	—	37		古代	
57	P	SB01	8	11	33	11E15, 12E11	円形	半円状	20	—	14		古代	
58	SD	—	5・9	6	38	13G14・15・19	楕円形	弧状	152	52	19		古代	
59	SD	—	5	6	38	13G19・20	楕円形	弧状	161	49	26		古代	土師器
60	SD	—	5	6	38	13G19・20・24	楕円形	漏斗状	247	64	29		古代	土師器
61	SD	—	5	6	38	13G24・25	楕円形	弧状	111 以上	62	17		古代	土師器
62	SD	—	5	6	38	13G25	楕円形	半円状	82 以上	39	21		古代	土師器
63	SD	—	5	6	—	13G25	（楕円形）	—	—	—	—		古代	
64	SK	—	5	6	38	11I5, 12I1	楕円形	台形状	278	112	51	SK64 ＞ SK65	N–38°–E	

山崎遺跡　遺構観察表（2）

遺構番号	遺構種別	建物	分割図版	個別図版	写真図版	グリッド	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	主要な切り合い	時期・備考	出土遺物
65	SK	—	5	6	38	11H24, 11I4	楕円形	半円状 台形状	（185）	（120）	27	SK65 ＜ SK64 SK65 ＞ SR1	N-38°-E	
66	P	—	8	10	36	11E25	円形	U字状	25	—	38			
67	P	—	8	10	36	11E15	円形	台形状	45	—	54		古代 柱根残存	
68	P	SB02	8	11	33	12E7	円形	箱状	36	—	48		古代 柱根残存	
69	P	SB01	8・9	11	33	12E3	円形	U字状	31	—	39			
70	P	—	8	—	—	11E24	円形	—	15	—	25			
71	P	—	8	—	—	11E23	円形	—	16	—	14			
72	P	—	8	—	—	10E15	円形	—	15	—	11			
73	P	—	8	—	—	11E16	円形	—	17	—	11			
74	SK	—	8・9	10	35	12D17・18	楕円形？	弧状	（74）	63	10	SK74 ＜ SK75		
75	SK	—	8・9	10	35	12D17・18・ 22・23	楕円形	弧状	226	163	24	SK75 ＜ SK76 SK75 ＞ SK74	古代 N-16°-E	須恵器・土師器
76	SK	—	8・9	10	34	12D23	円形	U字状	62	56	71	SK76 ＞ SK75	古代	須恵器・土師器
77	SK	—	8	10	35	10E5・10	楕円形	半円状	98	76	41		古代 N-67°-E	須恵器・土師器
78	SK	—	8	10	35・36	11E2・7	楕円形	弧状	260	154	28		古代 N-70°-W	須恵器・土師器
79	P	—	8	—	—	11D17	円形	—	9	—	12			
80	P	—	8	—	—	11D18	円形	—	14	—	18			
81	P	—	8	—	—	11D23	円形	—	14	—	18			
82	P	—	8	—	—	11D19	円形	—	16	—	15			
83	P	—	8	—	—	11D20	円形	—	16	—	15			
84	P	—	8	—	—	11D20	円形	—	15	—	15			
85	SE	—	9	10	34	13D17	円形	U字状	83	76	91		古代	土師器
86	P	SB02	8・9	11	34	12D24	円形	U字状	35	—	44		古代 柱根残存	
87	P	—	8	—	—	12D21・22	円形	—	19	—	17			
88	P	—	8	—	—	11D23	円形	—	10	—	18			
89	P	—	8	—	—	11D22	円形	—	19	—	18			
90	SK	—	5	6	38	12G19・20・24	楕円形	台形状	285	110	40		N-50°-W	
91	P	SB02	8・9	11	34	12E18・19	楕円形	箱状	38	28	55		古代 柱根残存	
92	SD	—	8	10	36	10E24・25	—	弧状	126	66	11			
93	SK	—	5	6	38	12H22, 12I2	楕円形	台形状	196	136	30		N-55°-W	
95	SK	—	13	15	39	17E5, 18E1	楕円形	台形状	197	144	47		N-40°-E	
96	SK	—	16	15	41	18E19	円形	箱状	155	148	49			
97	SK	—	13・16	15	41	18F7・8	円形	箱状	149	145	58			
98	SX	—	16	15	42	19D25, 19E5 20D21・22 20E1・2	不整形	弧状	344	159	12			
99	SX	—	17	15	42	20E25, 20F5 21E21, 21F1	楕円形	弧状	270	196	12			
101	SD	—	17	18	31・32 42	21E3-21E15	—	台形状	624	169- 199	50-58		中世	須恵器・珠洲焼・石製品 木製品・銭貨
102	SD	—	17	18	31・32	21E4-22E11	—	弧状	402	25-35	1-10		中世	
103	P	SB02	9	11	—	12D25	楕円形	半円状	35	27	28		古代	
104	P	SB02	8・9	11	—	12E7・8	円形	半円状	19	—	13		古代	
105	P	SB01	9	11	33	12E15	円形	U字状	30	—	42	P105 ＞ P107	古代 柱根残存	
106	P	SB02	8・9	11	34	12E3	円形	U字状	32	—	38		古代 柱根残存	
107	P	SB02	9	11	—	12E15	円形	半円状	30	—	23	P107 ＜ P105	古代	
108	SK	—	4	4	32	6G12・13	楕円形	弧状	194	146	36		N-23°-E	
109	SD	—	4	4	32	7G8-7G21	—	弧状 台形状	592	65-110	18-49	SD109 ＜ SX110	N-58°-W	
110	SX	—	4	4	32	6G25, 6H5 7G21・22 7H1-4・6-9	不整形	弧状 漏斗状	902	（331）	108	SX110 ＞ SD109	近世	土師器・珠洲焼 近世磁器

古代の須恵器・土師器（1）

① 白色粒子を多量に、石英等を少量含む　② 白色粒子を多量に、石英・小砂利等を少量含む
③ 白色粒子・石英・小砂利等をまばらに含む　④ 白色粒子・石英・小砂利等を多く含む

報告番号	図版番号	出土位置			種別	器種	法量（cm）			口縁残存率（/36）	焼成	胎土	鉱物	色調	調整・文様等		回転方向	備　考
		グリッド	遺構名	層位			口径	底径	器高						外面	内面		
1	19 43	13E7・8 ・12・13	SK55		須恵	無台杯	12.0	7.7	3.0	32	良好	普通	①	外：灰 内：灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	
2	19 43	13E7・8 ・12・13	SK55	2	須恵	無台杯	(12.8)	—	(3.2)	8	良好	普通	①	外：灰白 内：灰白	口～体：ロクロナデ	ロクロナデ	—	
3	19 43	13E13	SD54	1	須恵	杯	—	—	(2.3)		やや不良	普通	②	外：灰白 内：灰白	口～体：ロクロナデ	ロクロナデ	—	体部に「中」？墨書。
4	19 43	11E2・7	SK78	1	須恵	無台杯	(12.3)	7.8	3.5	17	やや不良	やや粗	②	外：灰白 内：灰白	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	—	
5	19 43	12D17・18 ・22・23	SK75	1	須恵	無台杯	(13.2)	(7.2)	3.1	15	良好	普通	①	外：灰白 内：灰白	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	右	底面に「中山」墨書。
6	19 43	13D25	SR1	4	須恵	杯蓋	13.8	—	2.4	28	良好	普通	①	外：灰 内：灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	内面に墨痕。転用硯。
7	19 43	12F9	SR1	3	須恵	杯蓋	(14.6)	—	(1.7)	6	良好	普通	②	外：灰白 内：灰白	口：ロクロナデ	ロクロナデ	—	内面に墨痕。転用硯。
8	19 43	12F22 13F8	SR1	4 1	須恵	有台杯	(14.7)	8.2	8.1	18	良好	普通	①	外：灰白 内：灰白	口～体：ロクロナデ	ロクロナデ	—	底面に墨痕。転用硯か。
		12F7		Ⅱ・Ⅲ														
9	19 43	14E6	SR1	4	須恵	有台杯	13.7	8.0	6.8	36	良好	普通	①	外：褐灰 内：褐灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り →ヘラナデ	ロクロナデ	左	底面に「上」墨書。口縁一部にタール状付着物。
10	19 43	14E6	SR1	4	須恵	有台杯	(12.8)	7.6	6.2	5	良好	緻密精良	①	外：灰白 内：褐灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	底面に「中山」墨書。
11	19 43	12F8		Ⅱ・Ⅲ	須恵	有台杯	9.8	5.9	5.0	21	良好	普通	②	外：灰白・灰 内：灰白・灰	口～体：ロクロナデ →ケズリ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	—	
		13D25	SR1	4														
12	19 43	12F9	SR1	3	須恵	有台杯	(8.8)	6.5	4.9	10	良好	普通	①	外：灰白 内：灰白	口～体：ロクロナデ →ケズリ	ロクロナデ	—	
13	19 43	14D16	SR1	4	須恵	無台杯	11.9	8.0	3.0	10	良好	緻密	①	外：灰 内：灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	底面に墨書。五弁の草花文。
14	19 43	13D25	SR1	4	須恵	無台杯	12.3	8.5	3.3	36	良好	普通	②	外：灰褐 内：灰褐	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	内面にタール状付着物。 底面に「中山」墨書。
15	19 43	13E10	SR1	4	須恵	無台杯	13.3	8.9	3.1	24	良好	精良	①	外：灰白 内：褐灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	底面に「中山」墨書。
16	19 43	14E8	SR1	3・4	須恵	無台杯	(13.0)	(7.5)	3.4	15	良好	普通	①	外：灰白 内：灰白	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	底面に「中山」墨書。
17	19 43	13D25 13E5	SR1	4	須恵	無台杯	(12.9)	6.9	3.2	31	やや不良	普通	③	外：明褐灰 内：灰褐	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	右	底面に「中山」？墨書。
18	19 44	13D25 13E5	SR1	4	須恵	無台杯	12.4	7.2	3.7	23	良好	緻密精良	①	外：褐灰 内：褐灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	底面に「中山」？墨書。
19	19 44	13E10 14E11	SR1	4	須恵	無台杯	(12.0)	7.5	3.7	2	良好	精良	①	外：灰白 内：灰白	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	底面に「中」墨書。
20	19 44	12F8・9	SR1	3	須恵	無台杯	12.7	7.7	3.5	30	良好	普通	①	外：暗褐灰 内：暗褐灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	体部に墨書。3点で「山」？か。
21	19 44	12F9	SR1	3・4	須恵	無台杯	12.7	8.5	3.3	14	良好	普通	②	外：褐灰 内：褐灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り →ナデ	ロクロナデ	左	底面に墨書。 3文字で字「百丸十」？か。 No.22と共通する。
22	19 44	12G7 12G8	SR1	1 3	須恵	無台杯	(12.5)	(8.2)	3.3	7	良好	普通	①	外：灰白 内：灰白	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り →ナデ	ロクロナデ	左	底面に墨書。 3文字で字「百丸十」？か。 No.21と共通する。
23	20 44	13F8	SR1	3	須恵	無台杯	11.8	7.7	3.1	36	良好	普通	②	外：灰白 内：灰白	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	底面に広範囲の墨痕。文字か不明。口縁内面にタール状付着物。
24	20 44	13D25	SR1	4	須恵	無台杯	12.0	8.0	3.2	28	良好	普通	③	外：灰 内：灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	口縁内外面にタール状付着物。 底面に「石継」？墨書。
25	20 44	13D25 13E5 14E6	SR1	4	須恵	無台杯	12.5	7.5	2.9	33	良好	普通	②	外：褐灰 内：褐灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	口縁部に棒状工具による2か所の凹み有り。
26	20 44	12F9	SR1	3	須恵	無台杯	12.7	7.6	2.9	7	やや不良	普通	②	外：灰 内：灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	—	体部外面に漆付着。
27	20 44	13E5	SR1	4	須恵	無台杯	12.3	7.7	2.9	32	良好	緻密	②	外：灰 内：褐灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	
28	20 44	13E5	SR1	4	須恵	無台杯	12.2	7.7	2.9	34	良好	普通	①	外：灰 内：灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	
29	20 44	13D24 13E5	SR1	4	須恵	無台杯	13.2	8.5	3.2	28	やや不良	普通	③	外：灰褐 内：灰褐	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	体部外面に漆付着。4点あり、文字かは不明。
30	20 44	13D20	SR1	4	須恵	無台杯	13.0	8.1	3.1	18	良好	普通	①	外：褐灰 内：褐灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	
31	20 44	12F4・9	SR1	3	須恵	無台杯	12.3	8.1	3.2	36	良好	普通	④	外：灰 内：灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	
32	20 44	13D25 13E5	SR1	4	須恵	無台杯	12.5	7.8	3.3	12	良好	普通	②	外：褐灰 内：褐灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	右	
33	20 44	13E5・10	SR1	4	須恵	無台杯	12.8	(7.8)	3.3	32	良好	普通	②	外：灰 内：褐灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	
34	20 44	13E5 14E6	SR1	4	須恵	無台杯	12.8	7.9	3.4	31	良好	緻密	②	外：褐灰・灰 内：褐灰・灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	
35	20 45	12F21	SR1	1	須恵	無台杯	13.1	8.1	3.7	14	良好	やや粗	①	外：灰白 内：褐灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	

古代の須恵器・土師器（2）

報告番号	図版番号	出土位置			種別	器種	法量（cm）			口縁残存率（/36）	焼成	胎土	鉱物	色調	調整・文様等		回転方向	備　考
		グリッド	遺構名	層位			口径	底径	器高						外面	内面		
36	20 45	12F9	SR1	3	須恵	無台杯	13.1	7.7	3.7	4	やや不良	普通	①	外：灰白 内：灰白	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	
37	20 45	14E22	SR1	4	須恵	無台杯	12.2	8.6	3.5	30	良好	普通	②	外：灰 内：灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	左	
38	20 45	12F8・9	SR1	3	須恵	無台杯	12.5	7.7	3.7	3	やや不良	普通	③	外：灰 内：灰	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	右	類城産。ヒダスキ痕有り。
39	20 45	12F10	SR1	3	須恵	無台杯	—	6.1	—		良好	やや粗	④	外：にぶい赤褐 内：にぶい赤褐	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
40	20 45	13D25 13E15 13F1 13F15	SR1	4 4 1 3・4	須恵	広口瓶	—	(14.0)	—		良好	緻密精良	②	外：灰 内：灰	口～体：ロクロナデ 底：ケズリ	ロクロナデ	—	肩部に漆付着。
		13E18・23	SD54	2														
		12F5		Ⅱ・Ⅲ														
41	20 45	12F17	SR1	1	須恵	瓶	—	13.8	(2.9)		良好	普通	③	外：灰 内：灰	口～体：ロクロナデ →ケズリ 底：回転ヘラ切り	ロクロナデ	—	
42	20 45	12F6	SR1	1	須恵	瓶？	(15.4)	—	(2.3)	6	良好	緻密精良	①	外：青灰 内：青灰	口～体：ロクロナデ	ロクロナデ	—	
43	20 45	11G19	SR1	3	須恵	瓶	—	—	(5.0)		良好	普通	①	外：暗灰 内：灰	口～体：ロクロナデ	ロクロナデ	—	
44	20 45	14E17	SR1	3	須恵	横瓶	—	—	(14.1)		良好	普通	④	外：灰 内：褐灰	口～体：ロクロナデ	ロクロナデ	—	
45	20 45	13D20・25 13E4・5 13E15 13F8 13F19 14E6・11 14F21	SR1	4 4 4 1 2・3 4 1	須恵	甕	(21.4)	—	(24.5)	7	良好	普通	②	外：黄灰 内：黄灰	口：ナデ 体：平行タタキ （擬格子状）	同心円 あて具痕	—	
		13F9		Ⅰ														
46	20 45	12F4・9 13D25 13E5・10 14E1 14E6・11	SR1	3 4 4 3 4	須恵	甕	26.5	—	(44.5)	31	良好	普通	②	外：灰白 内：灰白	口：ナデ 体：平行タタキ	上：同心円 あて具痕 下：平行 あて具痕	—	
47	21 45	11G10 12F9 12F21 12F21 12G1 12G10	SR1	1 3・4 1 2・3 1・2 2・3	須恵	甕	—	—	(23.9)		良好	普通	③	外：紫灰 内：灰	平行タタキ	同心円 あて具痕	—	
		11D20 11E22		Ⅲ Ⅱ・Ⅲ														
48	21 46	11F5		Ⅱ・Ⅲ	須恵	無台杯	—	6.4	(1.0)		良好	普通	④	外：灰褐 内：灰褐	底：回転糸切り	ロクロナデ	右	ヒダスキ痕有り。
49	21 46	10F15		Ⅱ・Ⅲ	須恵	無台杯	—	6.6	(1.1)		良好	普通	④	外：灰褐 内：灰褐	底：回転糸切り	ロクロナデ	右	ヒダスキ痕有り。
50	21 46	11F2		Ⅱ・Ⅲ	須恵	瓶	—	9.6	(4.8)		良好	普通	③	外：灰白 内：灰	体：ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ	—	
		11G19		Ⅲ														
51	21 46	13E1		Ⅲ	須恵	瓶	—	6.0	(2.4)		良好	普通	④	外：灰 内：灰白	体：ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ	—	
52	21 46		10T		須恵	瓶	—	10.7	(7.0)		良好	普通	②	外：灰 内：灰白	口～体：ロクロナデ	ロクロナデ	—	09 柏 BP 10T 出土
53	21 46	11D18		Ⅲ	須恵	短頸壺	—	—	(3.4)		良好	普通	③	外：灰 内：灰	口～体：ロクロナデ	ロクロナデ	—	
54	21 46	13E7・8 ・12・13	SK55		土師	無台椀	12.8	5.5	3.9	7	良好	普通	③	外：にぶい橙 内：にぶい橙	口～体：ロクロナデ →ケズリ 底：ケズリ	ロクロナデ →ナデ？	—	09 柏 BP 8T 出土
55	21 46	13E7・8 ・12・13	SK55		土師	無台椀	—	5.2	(2.8)		良好	普通	③	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り		右	09 柏 BP 8T 出土
56	21 46	13E7・8 ・12・13	SK55	2	土師	無台椀	—	5.0	(2.2)		良好	普通	③	外：灰黄 内：にぶい黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
57	21 46	13E7・8 ・12・13	SK55	2	土師	小甕	(14.0)	—	(2.5)	4	良好	普通	③	外：にぶい褐 内：にぶい褐	口～体：ロクロナデ	ロクロナデ	—	
58	21 46	13E7・8 ・12・13	SK55	2	土師	小甕	(13.0)	—	(4.7)	5	良好	普通	③	外：灰黄褐 内：灰黄褐	口～体：ロクロナデ	ロクロナデ	—	
59	21 46	13E7・8 ・12・13	SK55	2	土師	小甕	—	6.5	(7.2)		良好	普通	③	外：浅黄橙 内：浅黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
60	21 46	13E7・8 ・12・13	SK55	1	土師	長甕	(23.0)	—	—	7	良好	普通	④	外：浅黄橙 内・淡橙	口～体：ロクロナデ タタキ	ロクロナデ	—	互いに接しない複数の破片から図上合成。
61	21 46	12D17・18 ・22・23	SK75	1	土師	長甕	(23.5)	—	(12.1)	8	良好	普通	③	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	口～体：ロクロナデ	ロクロナデ	—	
62	21 46	12D17・18 ・22・23	SK75	1	土師	長甕	23.1	—	(28.4)	30	良好	普通	③	外：淡赤橙 内：浅黄橙	口～体：ロクロナデ タタキ・ケズリ	ロクロナデ	—	
63	22 46	12D17・18 ・22・23	SK75	1	土師	小甕	13.2	5.8	12.3	11	良好	普通	③	外：橙 内：赤橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	—	
64	22 46	12D17・18 ・22・23	SK75	1	土師	小甕	14.0	—	(4.4)	9	良好	普通	③	外：灰黄褐 内：浅黄橙	口～体：ロクロナデ	ロクロナデ	—	
65	22 46	12D17・18 ・22・23	SK75	1	土師	小甕	—	5.2	(1.9)		良好	普通	③	外：灰褐 内：にぶい橙	体：ロクロナデ 底：回転糸切り		—	
66	22 46	12D17・18 ・22・23	SK75	2	土師	小甕	—	5.6	(3.2)		良好	普通	④	外：橙 内：橙	口～体：ロクロナデ	ロクロナデ	—	
67	22 46	12D23	SK76	2	土師	小甕	(14.2)	—	(4.7)	3	良好	普通	④	外：灰黄褐 内：にぶい黄橙	口～体：ロクロナデ	ロクロナデ	—	
68	22 46	10E5・10	SK77	1	土師	無台椀	—	5.1	(1.4)		良好	普通	③	外：橙 内：にぶい黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	

古代の須恵器・土師器（3）

報告番号	図版番号	出土位置			種別	器種	法量（cm）			口縁残存率（/36）	焼成	胎土	鉱物	色調	調整・文様等		回転方向	備　考
		グリッド	遺構名	層位			口径	底径	器高						外面	内面		
69	22 46	10E5・10	SK77	1	土師	長甕	(22.3)	—	(5.4)	3	良好	普通	③	外：にぶい橙 内：橙	口～体：ロクロナデ	ロクロナデ	—	
70	22 46	10E10	SK77	1	土師	鍋	(34.2)	—	(5.3)	2	良好	普通	③	外：浅黄橙 内：浅黄橙			—	器面摩耗で調整不明。
71	22 46	11E2・7	SK78	1	土師	無台椀	11.7	5.8	3.6	21	良好	普通	③	外：にぶい橙 内：にぶい橙	口～体：ロクロナデ 底：不明（磨滅）	ロクロナデ	—	
72	22 46	13D17	SE85	3	土師	無台椀	—	5.0	(1.1)		やや不良	普通	③	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
73	22 46	7H1	SX 110	1	土師	無台椀	(15.8)	(7.8)	5.4	1	良好	普通	④	外：にぶい褐 内：にぶい褐	口～体：ロクロナデ →ケズリ 底：不明（磨滅）	ロクロナデ	—	
74	22 47	13E5	SR1	4	土師	無台椀	12.8	5.9	3.7	10	良好	普通	③	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
75	22 47	13E5	SR1	4	土師	無台椀	13.3	5.2	3.8	27	良好	普通	③	外：にぶい橙 内：浅黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
76	22 47	13E10・15	SR1	4	土師	無台椀	12.5	5.2	3.7	19	良好	普通	④	外：にぶい橙 内：橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
77	22 47	13E5・15	SR1	4	土師	無台椀	13.6	5.8	4.1	30	良好	普通	④	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	口～体：ロクロナデ →ナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ →ナデ	右	
78	22 47	13E10	SR1	4	土師	無台椀	13.7	6.4	4.3	33	良好	普通	③	外：淡橙 内：にぶい黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
79	22 47	13D25 13E5	SR1	4	土師	無台椀	13.0	5.5	4.0	11	良好	普通	③	外：にぶい橙 内：にぶい橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	内外面にススで黒変している部分有り。
80	22 47	13E5	SR1	4	土師	無台椀	13.8	5.2	4.3	22	良好	普通	③	外：浅黄橙 内：浅黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
81	22 47	13E5	SR1	4	土師	無台椀	13.2	6.2	4.2	19	良好	粗	④	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	口～体：ロクロナデ 底：ケズリ	ロクロナデ →ミガキ	—	内外面とも点状剥離が著しい。
82	22 47	14E21	SR1	4	土師	無台椀	13.5	6.0	4.3	13	良好	普通	③	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙	口～体：ロクロナデ →ナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ →ナデ	右	
83	22 47	13E5	SR1	4	土師	無台椀	13.3	5.6	4.3	12	良好	普通	③	外：にぶい橙 内：にぶい橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
84	22 47	14E6・11 14E12	SR1	4 3	土師	無台椀	13.6	5.4	4.4	10	良好	普通		外：にぶい褐 内：橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	体部に墨書。No.98と同形状で、「中山」？か。
85	22 47	13D25 13E5 14F11	SR1	4	土師	無台椀	13.0	5.3	4.1	25	良好	普通	④	外：にぶい橙 内：橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
86	22 47	14E6	SR1	4	土師	無台椀	13.9	5.5	4.5	19	良好	普通	④	外：淡橙 内：にぶい橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
87	22 47	13E5	SR1	4	土師	無台椀	13.2	5	4.2	33	良好	普通	③	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
88	22 47	13E5・15	SR1	4	土師	無台椀	13.2	5.2	4.3	35	良好	普通	④	外：浅黄橙 内：浅黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
89	22 47	13E5	SR1	4	土師	無台椀	13.5	5.6	4.4	32	良好	普通	③	外：淡橙 内：淡橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
90	22 47	13E5	SR1	4	土師	無台椀	13.2	5.1	4.3	30	普通	普通	③	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄褐	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
91	22 47	12F5	SR1	3	土師	無台椀	12.8	5.0	4.2	18	普通	普通	④	外：浅黄橙 内：浅黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
92	22 47	13E10 14E16	SR1	4	土師	無台椀	13.0	5.5	4.4	24	良好	普通	③	外：浅黄橙 内：橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
93	22 47	13E5 14D21	SR1	4	土師	無台椀	13.1	5.3	4.4	23	良好	普通	③	外：にぶい橙 内：橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	口縁内外面にタール状付着物。灯明皿に転用か。
94	23 47	13E5 14E6	SR1	4	土師	無台椀	12.9	5.5	4.4	11	良好	普通	③	外：にぶい橙 内：橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
95	23 47	13D19・ 24	SR1	1	土師	無台椀	12.2	5.2	4.1	19	良好	普通	④	外：橙 内：橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
96	23 47	13E5	SR1	4	土師	無台椀	13.5	5.5	4.6	36	良好	普通	③	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
97	23 48	13D25	SR1	4	土師	無台椀	13.3	5.0	4.5	8	良好	普通	③	外：にぶい橙 内：浅黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
98	23 48	13D25 13E5	SR1	4	土師	無台椀	12.9	5.2	4.5	32	良好	普通	④	外：にぶい橙 内：にぶい橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	体部に墨書。No.84と同形状で、「中山」？か。
99	23 48	13E5	SR1	4	土師	無台椀	12.8	5.0	4.3	27	良好	普通	③	外：橙 内：にぶい橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	灯明皿に転用か。
100	23 48	13E10	SR1	4	土師	無台椀	12.7	5.2	4.3	26	良好	普通	④	外：橙 内：にぶい橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
101	23 48	13E5	SR1	4	土師	無台椀	12.0	5.6	4.2	25	良好	普通	④	外：橙 内：橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	底面に「Ｉ」または「H」墨書。
102	23 48	13E5・10 ・15	SR1	4	土師	無台椀	12.6	5.5	4.4	32	普通	普通	③	外：淡橙 内：淡橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
103	23 48	13E5 14E6	SR1	4	土師	無台椀	12.1	5.2	4.2	21	良好	普通	③	外：にぶい赤褐 内：にぶい褐	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
104	23 48	13E20	SR1	4	土師	無台椀	13.3	5.4	4.7	24	良好	普通	③	外：にぶい褐 内：にぶい褐	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
105	23 48	13E10	SR1	4	土師	無台椀	13.3	5.4	4.6	34	良好	普通	③	外：淡橙 内：橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
106	23 48	13E15	SR1	4	土師	無台椀	13.3	5.3	4.6	27	良好	普通	③	外：にぶい黄橙 内：オリーブ褐	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
107	23 48	13E15	SR1	4	土師	無台椀	12.2	5.3	4.4	30	良好	普通	③	外：淡橙 内：にぶい橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	

古代の須恵器・土師器（4）

報告番号	図版番号	出土位置			種別	器種	法量（cm）			口縁残存率（/36）	焼成	胎土	鉱物	色調	調整・文様等		回転方向	備　考
		グリッド	遺構名	層位			口径	底径	器高						外面	内面		
108	23 48	13E5	SR1	3	土師	無台 椀	13.1	5.0	4.9	15	良好	普通	③	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
109	23 48	13E5	SR1	4	土師	無台 椀	12.9	6.0	4.6	4	良好	普通	③	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
110	23 48	13E5	SR1	4	土師	無台 椀	12.5	5	4.8	36	良好	普通	③	外：浅黄橙 内：浅黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
111	23 48	13E15	SR1	4	土師	無台 椀	12.9	5.1	5.2	36	良好	普通	③	外：淡橙 内：淡橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
112	23 48	13D25 13E5	SR1	4	土師	無台 椀	13.4	6.4	4.3	14	良好	普通	③	外：浅黄橙 内：淡橙	口～体：ロクロナデ →ミガキ 底：回転糸切り	ロクロナデ →ミガキ	右	
113	23 48	13D25 13E5	SR1	4	土師	無台 椀	16.3	6.4	4.6	7	良好	普通	③	外：橙 内：橙	口～体：ロクロナデ →ミガキ 底：ケズリ	ロクロナデ →ミガキ	—	
114	23 48	14E21	SR1	4	土師	無台 椀	17.0	6.4	5.5	12	良好	普通	③	外：にぶい橙 内：浅黄橙	口～体：ロクロナデ →ナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ →ナデ	右	
115	23 48	13F8	SR1	3	土師	無台 椀	17.3	6.3	5.6	11	良好	普通	③	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
116	23 49	13E10・15	SR1	4	土師	無台 椀	16.4	6.3	5.5	31	良好	普通	③	外：橙 内：にぶい橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
117	23 49	13E15 14E6	SR1	4	土師	無台 椀	16.4	6.6	5.8	23	良好	普通	③	外：淡橙 内：にぶい橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
118	23 49	13D24	SR1	4	土師	無台 椀	16.0	7.1	5.8	13	良好	普通	④	外：浅黄橙 内：浅黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
119	23 49	13E5	SR1	4	土師	無台 椀	16.5	6.4	5.9	35	良好	普通	③	外：にぶい橙 内：にぶい橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	体部と底部の間を故意に打ち欠いたか。
120	23 49	13E10	SR1	4	土師	無台 椀	15.6	6.7	5.9	26	良好	普通	④	外：浅黄橙 内：淡橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
121	23 49	13E20	SR1	4	土師	無台 椀	16.1	6.4	6.1	19	良好		③	外：淡橙 内：淡橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
122	24 49	13F6・7	SR1	3	土師	無台 椀	(16.2)	8.5	6.5	18	良好	普通	④	外：にぶい橙 内：にぶい橙	口～体：ロクロナデ →ミガキ・ケズリ 底：ケズリ？	ロクロナデ →ミガキ？	—	底面に墨書。「□」不明。
123	24 49	12F4 12F9 13F20	SR1	3 2 1	土師	無台 椀	(14.9)	6.2	(5.4)	9	良好	普通	④	外：にぶい褐 内：黒	口～体：ロクロナデ 底：ケズリ	ミガキ	—	内面黒色処理。
124	24 49	13E10	SR1	4	土師	無台 椀	(13.9)	6.0	3.6	23	良好	普通	③	外：橙 内：橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	歪み大。
125	24 49	14E6 14E8	SR1	4 3・4	土師	無台 椀	(13.9)	5.8	4.8	30	良好	普通	③	外：浅黄橙 内：浅黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	歪み大。
126	24 49	13E5 14E6	SR1	4	土師	無台 椀	(13.6)	5.8	4.8	29	良好	普通	③	外：浅黄橙 内：浅黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	歪み大。
127	24 49	13E5	SR1	4	土師	無台 椀	(13.2)	5.4	4.8	25	良好	普通	③	外：褐灰 内：浅黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	歪み大。
128	24 49	13E5	SR1	4	土師	無台 椀	(13.2)	5.4	4.0	18	良好	普通	③	外：浅黄橙 内：浅黄橙	口～体：ロクロナデ →ミガキ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	歪み大。
129	24 49	12F9	SR1	3	土師	無台 椀	—	—	(4.2)	1	良好	普通	③	外：にぶい橙 内：にぶい橙	口～体：ロクロナデ	ロクロナデ	—	体部に墨書。「□」不明。
130	24 49	13D24 13E5	SR1	4	土師	鉢	(13.8)	—	(3.8)	14	良好	普通	③	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	口～体：ロクロナデ →ミガキ	ロクロナデ →ミガキ	—	
131	24 49	14E6	SR1	3	土師	円筒 支脚	(13.2)	—	(4.3)	4	良好	普通		外：淡橙 内：橙	ナデ	指ナデ	—	粗砂を多量に含む。
132	24 49	12F5	SR1	3	土師	小甕	(14.6)	—	(4.7)	7	良好	普通	④	外：にぶい橙 内：にぶい橙	口～体：ロクロナデ	ロクロナデ	—	
133	24 49	13E10・15 ・20	SR1	4	土師	小甕	—	5.0	(10.7)		良好	普通	③	外：にぶい橙 内：にぶい橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
134	24 49	13D24	SR1	4	土師	小甕	—	7	(8.1)		良好	普通	③	外：褐灰 内：褐灰	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
135	24 49	12F9	SR1	3	土師	小甕	—	5.9	(11.3)		良好	普通	③	外：灰褐 内：にぶい橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
136	24 50	13D25 13E5	SR1	4	土師	小甕	—	6.7	(8.0)		良好	普通	③	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄褐	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
137	24 50	12F9	SR1	3	土師	小甕	—	7.2	(6.9)		普通	普通	④	外：褐灰 内：浅黄橙	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
138	24 50	13D25 13E5	SR1	4	土師	小甕	—	5.6	(6.3)		良好	普通	③	外：灰黄褐 内：黒褐	口～体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	右	
139	24 50	13E10	SR1	4	土師	長甕	(23.0)	—	(12.2)	6	良好	普通	③	外：明褐灰 内：浅黄橙	口～体：ロクロナデ →カキメ・ケズリ	ロクロナデ	—	
140	24 50	13E5	SR1	4	土師	長甕	(23.8)	—	(7.8)	4	良好	精良	③	外：灰黄褐 内：暗灰黄	口～体：ロクロナデ	ロクロナデ	—	
141	24 50	12F9	SR1	3	土師	長甕	21.0	—	(7.2)	5	良好		④	外：浅黄橙 内：にぶい橙	口～体：ロクロナデ	ロクロナデ	—	
142	24 50	12F9	SR1	3	土師	長甕	(23.0)	—	(5.5)	2	良好	普通	④	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	口～体：ロクロナデ →カキメ	ロクロナデ →カキメ	—	
143	24 50	13E15	SR1	4	土師	長甕	—	—	—		良好	普通	③	外：にぶい黄橙 内：にぶい橙	指ナデ 指オサエ	ナデ 指ナデ	—	

中世以降の土器・陶磁器・土製品

報告番号	図版番号	出土地点			種別	器種	法量（cm）			色調	調整・文様等		胎土の混入物	備　考
		グリッド	遺構	層位			口径	底径	器高		外面	内面		
176	28 52	19G15・20 20G11	SK7	1	土師質	皿	(7.6)	3.4	1.4	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	口：ナデ 体～底：指オサエ	ナデ	緻密	手づくね。京都系。
177	28 52	21E12	SD3	1	瀬戸美濃	皿	—	(4.1)	(1.7)	外：灰白 内：灰白	ロクロナデ →ケズリ	ロクロナデ	緻密	内外面の一部に緑色釉。畳付に胎土目状の貼付け有り。
178	28 52	20E22	SD3 (SE100)	1	珠洲	片口鉢	—	—	—	外：灰 内：灰	ロクロナデ	ロクロナデ 卸目２条	白色粒子多 砂粒・骨針	
179	28 52	21E10	SD101	1	珠洲	甕	—	—	—	外：灰 内：灰	平行タタキ	押圧痕	白色粒子 砂粒	タタキの稜が鋭角的。
180	28 52	21E10	SD101	1	珠洲	甕	—	—	—	外：灰 内：暗灰	平行タタキ	押圧痕	砂粒	天地逆。底部付近の可能性有り。
181	28 52	21E8	SD101	1	珠洲	壺	—	—	—	外：灰白 内：灰白	平行タタキ	押圧痕 →ナデ	砂粒 骨針	
182	28 52	22E6	SD101	1	珠洲	甕	—	—	—	外：灰白 内：灰	平行タタキ	押圧痕	白色粒子 砂粒	内面スス付着。外面中央に左下がりの磨痕。転用砥石。
183	28 52	22E6	SD101	1	越中瀬戸	擂鉢	—	12.5	(5.5)	外：(釉)暗赤褐 内：(釉)褐灰	体：ロクロナデ 底：回転糸切り →ケズリ？	２単位複数条の卸目	砂粒多	混入品か。
184	28 52	13G9	SD2	1	青磁	椀	(13.6)	—	(3.8)	外：(釉) 暗オリーブ灰 内：(釉) 暗オリーブ灰	退化した連弁文	ロクロナデ		上田Ｂ類。やや幅広の蓮弁？で、単位が意識されていない。15C 後半以降か。被熱している。
185	28 52	15E10	SD2	1	天目	茶碗	—	4.0	(2.6)	外：(釉)黒褐 内：(釉)黒褐	体：ロクロナデ 底：ケズリ	ロクロナデ	胎土は灰黄色	削り出し高台。高台畳付に重ね焼き痕。
186	28 52	13G14	SD2	1	中世陶器	鉢	(25.4)	—	(4.4)	外：(釉)浅黄 内：(釉)浅黄	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土は灰白色	瀬戸美濃産か。 被熱している。
187	28 52	13G22	SD2	1	珠洲	甕	—	—	—	外：灰 内：灰	ナデ	ナデ	砂粒	珠洲Ⅰ期（12C 後半）か。
188	28 52	12F3	SD2	1	珠洲	甕	—	—	—	外：灰 内：灰	平行タタキ	押圧痕	砂粒 骨針少	
189	28 52	13G9	SD2	1	珠洲	片口鉢	—	—	—	外：灰 内：灰	ロクロナデ	ロクロナデ 細条の卸目	砂粒多 骨針少	１単位（幅 2.0cm）20 条以上の細かい卸目。
190	28 52	16E5	SD2	1	珠洲	甕	—	—	—	外：灰 内：灰	平行タタキ	押圧痕	砂粒多 骨針少	
191	28 52	13H6	SD2	1	肥前	皿	—	4.3	(1.7)	外：(釉)明青灰 内：(釉)明青灰	体：ロクロナデ 高台：砂目	見込みに線状の文様		初期伊万里。肥前系Ⅱ期（1630～50 年）。
192	28 52	15F2	SD2	1	唐津	皿	(13.6)	—	(2.3)	外：(釉) にぶい黄橙 内：(釉)灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ		肥前系Ⅰ期かⅡ期。絵唐津か。
193	28 52	16E16	SD52	1	唐津	皿	(12.7)	—	(3.3)	外：(釉) オリーブ褐 内：(釉) オリーブ褐	ロクロナデ	ロクロナデ		溝縁皿。肥前系Ⅱ期（1630～50 年）。
194	28 52	13G14	SD2	1	唐津	皿	—	3.8	(2.8)	外：にぶい褐 内：(釉) 灰オリーブ	体：ロクロナデ 底：ケズリ	ロクロナデ		削り出し高台。肥前系Ⅰ期かⅡ期。
195	28 52	7H1	SX110	1	肥前	皿	(12.5)	—	(1.7)	外：(釉)明緑灰 内：(釉)明緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ		17C 後半～18C 初。
196	28 52	7H1	SX110	1	珠洲	片口鉢	—	—	—	外：灰 内：灰	ロクロナデ	ロクロナデ 卸目数条	砂粒 骨針少	使用で滑らか。卸目は磨滅のため単位不明。
197	28 53	20F24	—	Ⅱ・Ⅲ	白磁	皿	(11.0)	6.3	3.3	外：(釉)灰白 内：(釉)灰白	口～体：ロクロナデ 斜行するミガキ？ 底：不明	ロクロナデ		内面口縁端部が口禿げ。山本Ⅸ-1c 類。13C 後半～14C 前半か。
198	28 53	16E21	—	Ⅲ	青磁	椀	(15.7)	—	(2.6)	外：(釉) オリーブ灰 内：(釉) オリーブ灰	鎬蓮弁文	ロクロナデ		鎬蓮弁文椀。蓮弁は中央に稜をもつ。山本Ⅱ-b 類。13C 初～13C 前半か。
199	28 53	15F2	—	Ⅱ・Ⅲ	青磁	—	縦 3.4	横 4.8	厚 1.7	表：(釉) オリーブ灰 裏：灰赤	表：草花文	褐色部分有り。釉薬かは不明		青磁製品。破損面の風化も著しく、全体形状も不明。装飾品または置物か。
200	28 53	20F17	—	Ⅱ・Ⅲ	珠洲	片口鉢	—	—		外：灰 内：灰	ロクロナデ	ロクロナデ 卸目	砂粒 骨針少	１単位（幅 2.1cm）10 条以上の卸目。 珠洲Ⅳ3 期（1360～70 年代）。
201	28 53	13F8	—	Ⅱ・Ⅲ	珠洲	片口鉢	—	—		外：灰白 内：灰白	体：ロクロナデ 底：静止糸切り＋板状圧痕	ロクロナデ 卸目	砂粒多 骨針少	１単位（幅 2.3cm）11 条以上の卸目。
202	28 53	20G17	—	Ⅱ・Ⅲ	珠洲	甕	縦 6.5	横 7.9	厚 2.3	外：灰白 内：灰	磨面	押圧痕 磨面	白色粒子・砂粒 骨針少	正・裏・右側・下面に磨痕。転用砥石。
203	28 53	12F22	—	Ⅱ・Ⅲ	土師質	皿	(8.4)	—	(2.2)	外：明黄褐 内：明黄褐	ナデ	ナデ	チャート少	手づくね。口縁内面にタール状付着物。15C 中葉～後葉か。
204	28 53	20F20	—	Ⅱ・Ⅲ	土師質	皿	(12.5)	—	(2.3)	外：浅黄橙 内：灰褐	ナデ	ナデ	チャート少	手づくね。口縁内面にタール状付着物少量。13C 末～14C か。
205	28 53	20E23	SD3	1	唐津	皿	縦 4.6	横 4.5	厚 1.2	外：(釉) 暗オリーブ灰 内：(釉) 暗オリーブ灰	—	ロクロナデ	黒色粒子	削り出し高台。肥前系Ⅰ期（1610～30年）。胎土目が表裏に4か所ずつ有り。周縁に故意的な打ち欠き痕。
206	28 53	19E2	—	Ⅱ・Ⅲ	肥前	皿	—	5.6	(1.3)	外：(釉)灰白 内：(釉)灰白	—	二重圏線＋草花文？		初期伊万里。肥前系Ⅱ期（1630～50 年）。
207	28 53	10F10	—	Ⅱ・Ⅲ	唐津	皿	—	—	—	外：(釉)灰白 内：(釉)灰白	ロクロナデ 見込みに文様	ロクロナデ	砂粒	溝縁皿。 肥前系Ⅱ期。
208	28 53	19F20	—	Ⅲ	唐津	皿	—	4.5	(2.5)	外：(胎)灰赤 内：(釉)暗灰黄	体：ロクロナデ 底：ケズリ	ロクロナデ		絵唐津。削り出し高台。内面無釉部は胎土目か。
209	28 53	18G8	—	Ⅱ・Ⅲ	唐津	椀	—	4.6	(3.0)	外：(胎)明赤褐 内：(釉) オリーブ灰	体：ロクロナデ 底：ケズリ	ロクロナデ		削り出し高台。肥前系Ⅱ期（1630～50 年）。
210	28 53	19E3	—	Ⅱ・Ⅲ	越中瀬戸	皿	—	4.2	(2.0)	外：淡黄 内：にぶい赤橙	体：ロクロナデ 底：ケズリ	ロクロナデ	砂粒多	削り出し高台。底面に墨書「十」。

古代の木製品

報告番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	木取り	備　考
144	25・50	P67	11E15	1	柱根	49.0	20.9	12.8	分割（半割）材	方形に整形。
145	25・50	SB1（P105）	12E15	2	柱根	20.0	4.8	3.4	分割材	
146	25・50	SB2（P91）	12F18	1	柱根	36.3	19.8	6.1	分割材	
147	25・50	SB2（P68）	12E7	1	柱根	35.3	15.3	11.1	丸木	
148	25・50	SB2（P106）	12E3	1	柱根	17.4	14.8	7.1	分割材	
149	25・50	SB2（P86）	12D24	3	柱根	22.3	13.4	3.9	分割材	
150	25・50	SR1	14E16	3	盤	口：22.0	底：18.0	高：1.6	縦木取り	
151	25・50	SR1	12G6	3	盤	口：(19.4)	底：16.0	高：(0.9)	縦木取り	
152	25・51	SR1	13E5	4	曲物（底板）	18.2	7.7	0.9	柾目	推定径 19.2cm。樺皮結合。
153	25・51	SR1	13E5	4	曲物（底板）	14.8	4.8	0.6	柾目	推定径 21.0cm。樺皮結合。
154	26・51	SR1	12G6	3	曲物（底板）	16.8	17.2	1.0	柾目	径 17.5cm。樺皮結合。
155	26・51	SR1	12G7	3	曲物（底板）	27.1	10.1	1.0	柾目	木釘結合か。
156	26・51	SR1	14E16	4	曲物（底板）または板状木製品	23.4	9.2	1.0	柾目	底板を部材として転用した可能性有り。
157	26・51	SR1	13E10	4	曲物（底板）	21.4	23.0	0.9	柾目	径 23.0cm。木釘結合。
158	26・51	SR1	13E15	4	曲物（底板）	18.3	9.7	0.8	板目	径 18.8cm。
159	26・51	SR1	14F16	4	曲物（側板）	16.9	15.4	0.3	板目	綴じ部周辺のみケビキ有り。
160	26・51	SR1	11G20	3	曲物（底板）	17.3	17.6	0.8	柾目	径 17.6cm。木釘結合。
161	26・51	SR1	13F18	3	曲物（底板）	16.2	11.4	1.1	流れ柾目	径 16.2cm。木釘結合。
162	26・51	SR1	13D25	4	曲物（側板）	15.6	5.3	0.6	柾目	綴じ部 2 か所。
163	27・52	SR1	13F8	4	祭祀具	11.7	2.7	0.5	板目	馬（牛）形か。
164	27・52	SR1	13E10	4	部材	9.6	9.6	2.1	柾目	底板や挽物等の素材か。
165	27・52	SR1	13E5	4	部材	13.6	5.4	2.8	板目	
166	27・52	SR1	14F16	3	箸状木製品	20.4	0.7	0.7	—	
167	27・52	SR1	12F18	3	棒状木製品	26.2	1.4	1.3	—	上部を欠損。
168	27・52	SR1	12F19		棒状木製品	53.5	1.4	1.2	—	上部は折り取り。
169	27・52	SR1	13F10	4	棒状木製品	74.1	1.2	1.2	—	中央につぶれた凹部有り。
170	27・52	SR1	12G6	3	部材	53.1	27.4	5.0	柾目	櫂の未製品（欠損品）または挽物等の素材か。
171	27・52	SR1	13F20	4	部材	39.5	15.1	9.4	半割材	
172	27・52	SR1	14F16	4	部材	48.9	10.2	6.8	分割材	

中世以降の木製品

報告番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	木取り	備　考
211	29・53	SD3	20E15	2	漆器椀	—	底：6.0	高：4.1	縦木取り	内赤色外黒色漆。
212	29・53	SD3	21E6	2	漆器椀	—	底：6.0	高：4.0	縦木取り	総黒色漆。高台最大径 7.0cm。
213	29・53	SD3	20E22	2	棒状木製品（部材？）	36.7	3.2	2.6	板目	
214	29・53	SD3	20E22	2	棒状木製品（部材？）	38.3	3.9	1.6	板目	
215	29・53	SD3	20E22	2	棒状木製品（部材？）	35.6	3.5	2.5	板目	
216	29・53	SD3	20E22	2	棒状木製品（部材？）	33.3	2.5	2.1	板目	
217	29・53	SD3	20E15	1	祭祀具	16.0	3.4	0.5	柾目	
218	29・53	SD3	19F20		板状木製品	19.0	6.1	1.4	板目	
219	29・53	SD3	21E13	2	板状木製品	17.3	3.1	0.5	柾目	
220	29・53	SD3	21E12	2	部材	27.0	2.8	0.9	柾目	φ 3mm の穿孔 4 か所。
221	29・53	SD3	21E6	2	下駄	21.2	10.3	4.6	板目	
222	29・53	SD101	21E9	2	曲物（側板・底板）	—	12.4	4.0	側板：柾目 底板：板目	側板と底板の結合部 3 か所。

石製品

報告番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	器種	長さ・縦（cm）	幅・横（cm）	厚さ・高（cm）	重量（g）	備考
223	29・53	SD3	21E14	2	石鉢？	—	—	11.6	289.2	凝灰岩。外面剥落。スス付着。
224	29・53	SD3	19F20	上層	砥石	3.9	4.1	0.7	16.9	凝灰岩。正面に刃痕多数。
225	29・53	SD101	21E3	2	砥石	4.7	3.1	2.2	27.0	安山岩。
226	29・53	SD101	21E10	1	砥石	8.8	7.8	5.7	401.3	凝灰岩。刃痕有り。スス付着。
227	29・53	—	19G4	Ⅱ・Ⅲ	磨石	9.2	7.8	5.1	543.0	安山岩。
228	29・53	—	12F4	Ⅱ・Ⅲ	磨石	7.4	5.3	4.5	212.0	安山岩。

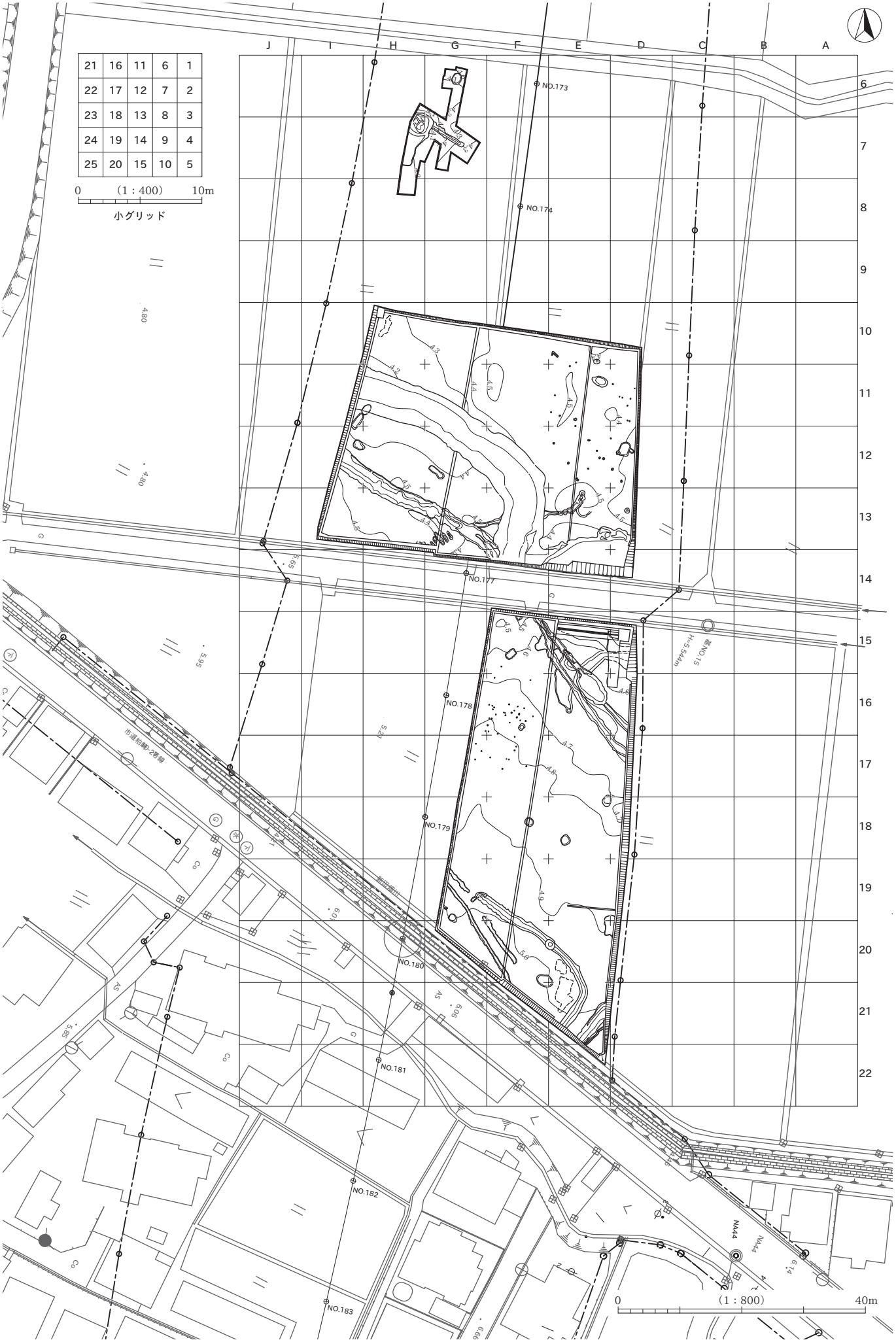
金属製品

報告番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	器種	長さ・縦（cm）	幅・横（cm）	厚さ・高（cm）	重量（g）	備考
173	27・52	SR1	15E18	1	包丁または刀子	16.6	4.9	1.1	32.6	古代。
174	27・52	—	10G19	Ⅱ	板状金属製品	8.8	6.7	0.4	30.8	古代。
175	27・52	—	19G11	Ⅱ・Ⅲ	鉄滓	4.9	3.9	3.1	85.3	古代。
229	29・53	SD101	21E1	1	銭貨（元祐通寶）	2.37	2.38	0.10	1.2	篆書体。宋銭。初鋳年 1086 年。
230	29・53	—	15H10	Ⅰ	銭貨（洪武通寶）	2.34	2.30	0.11	2.0	09 柏 BP 6T 出土。明銭。初鋳年 1368 年。背面上部の字種不明。

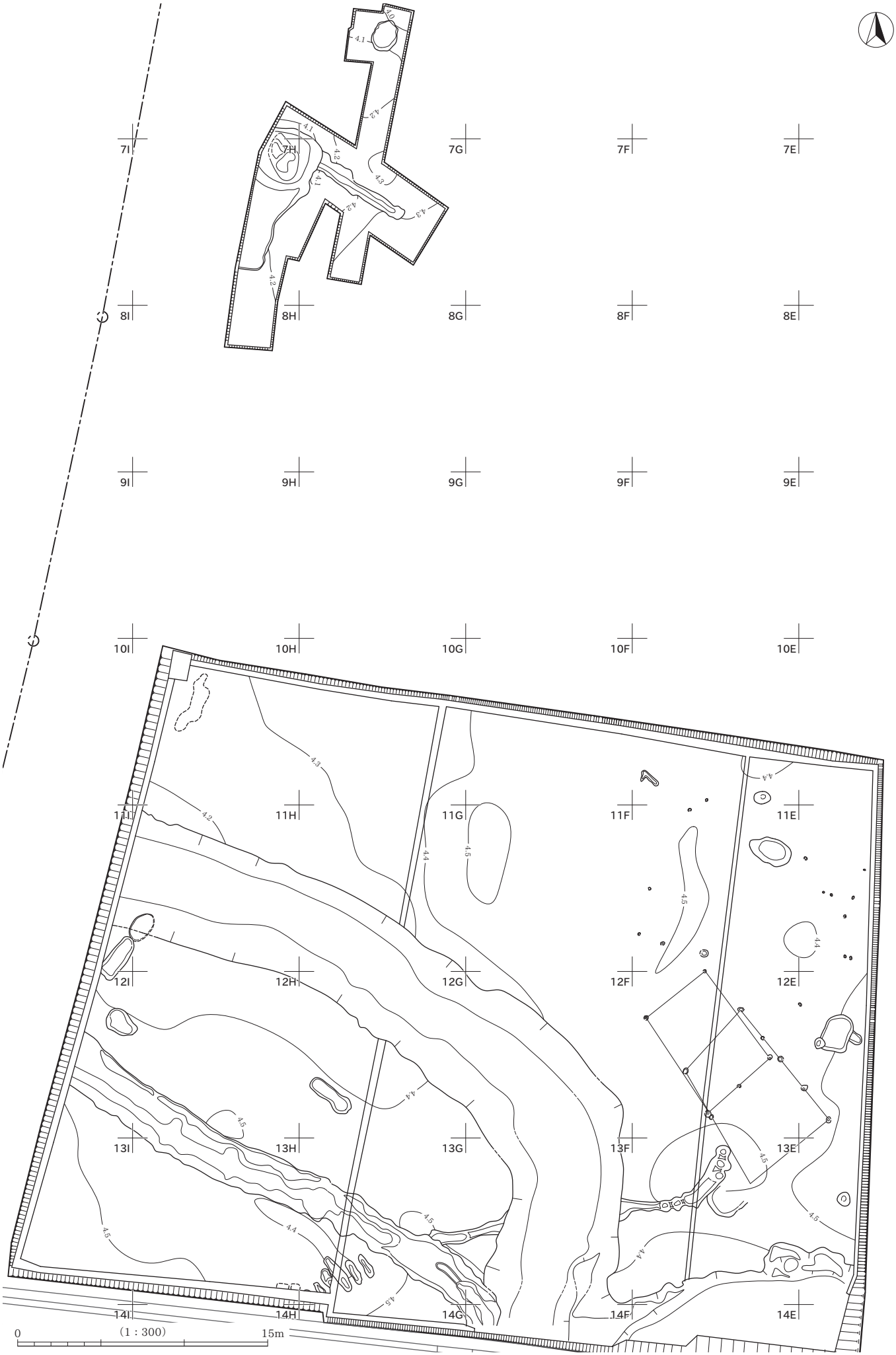
図　　版

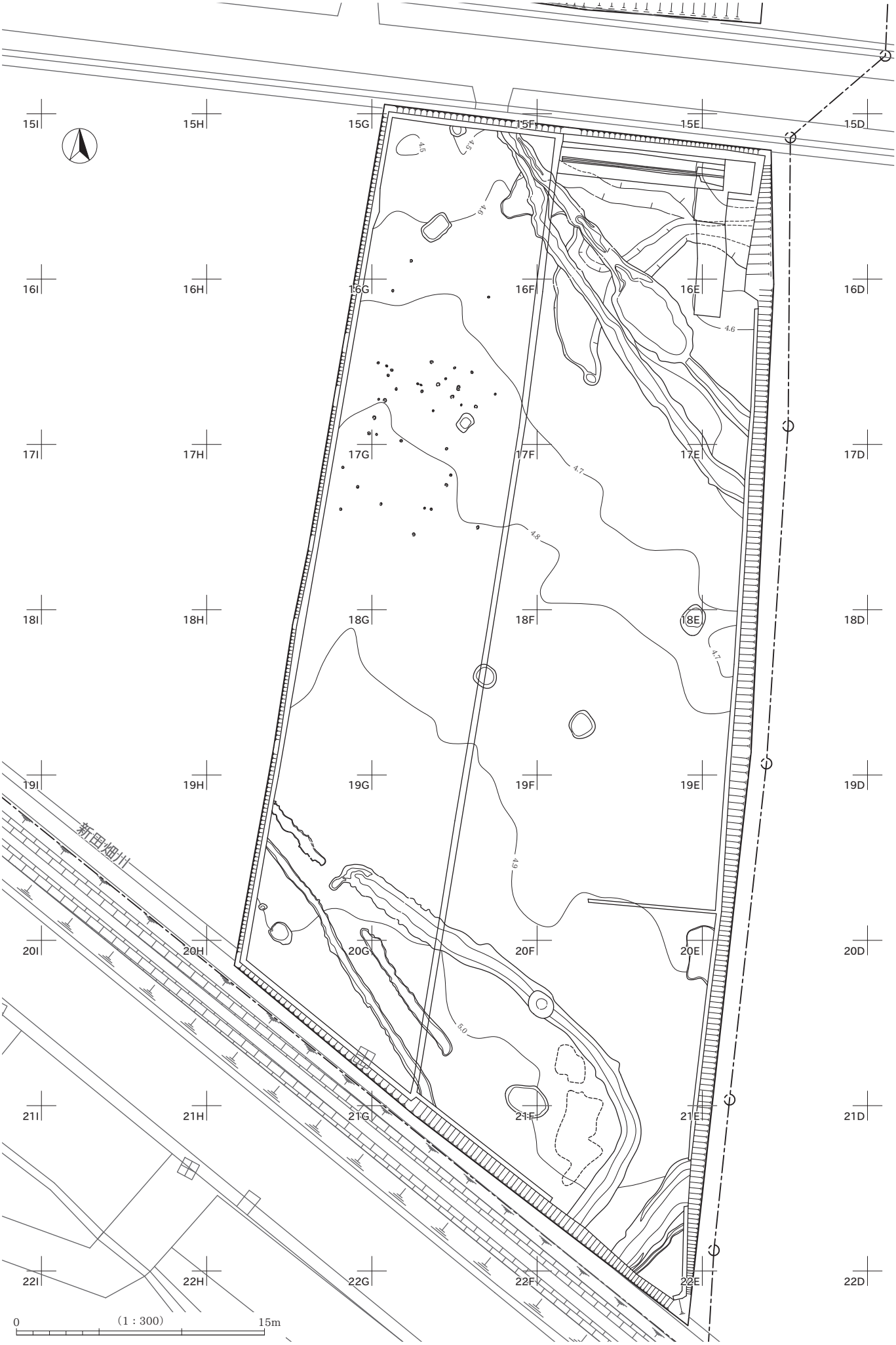
遺跡全体図

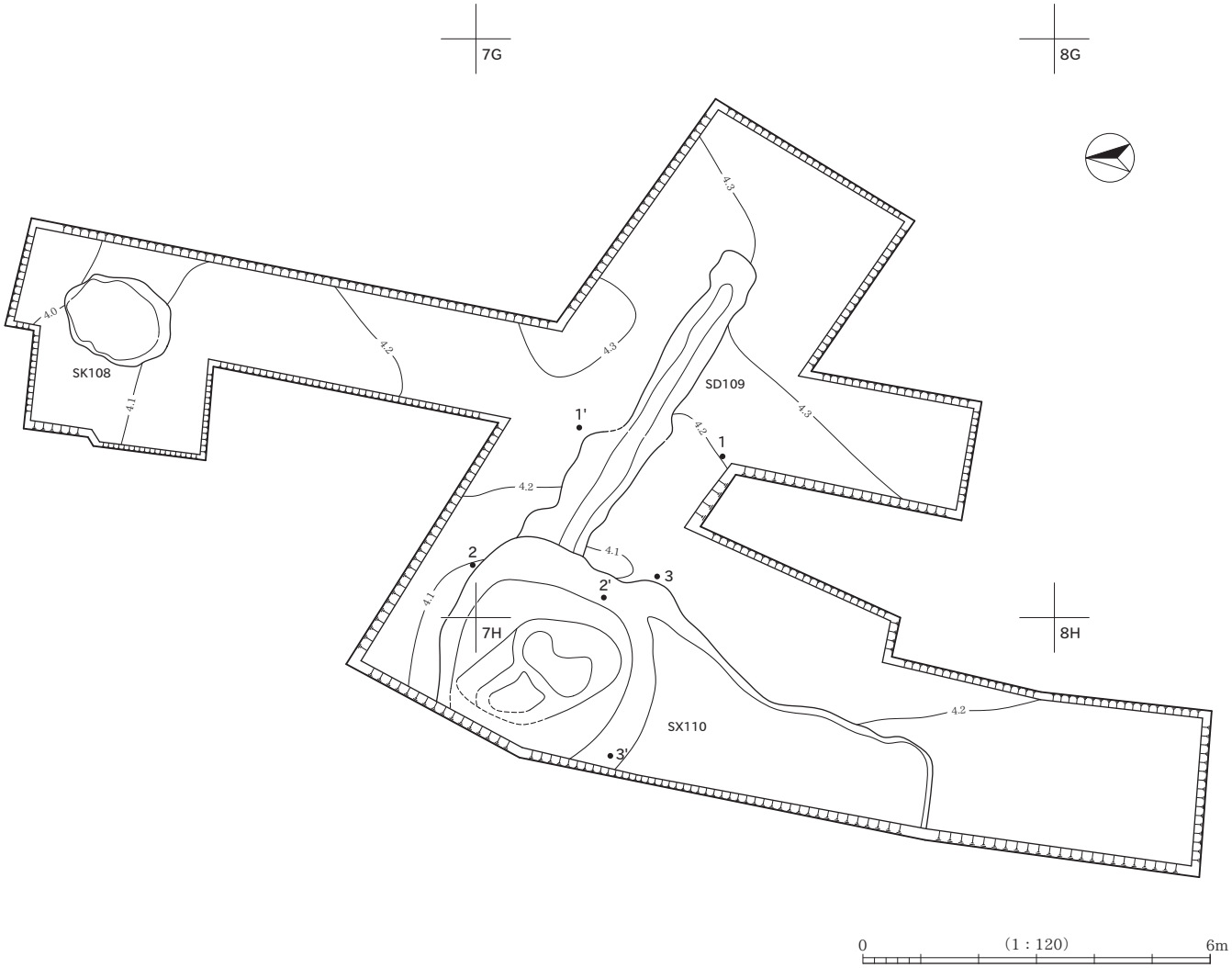
図 版 1

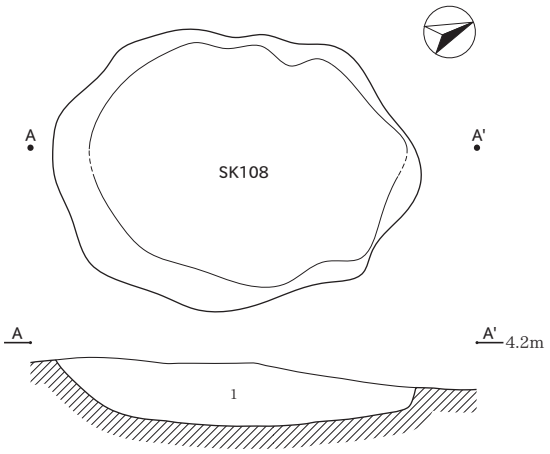

21 16 11 6 1
22 17 12 7 2
23 18 13 8 3
24 19 14 9 4
25 20 15 10 5
0 (1：400) 10m
小グリッド
J I H G F E D C B A
6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22
NO.173
NO.174
NO.177
NO.178
NO.179
NO.180
NO.181
NO.182
NO.183
基NO.15
H=5.54m
N44
0 (1：800) 40m

遺構配置図（1）

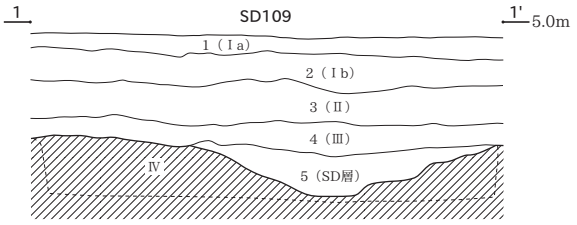

7I
7H
7G
7F
7E
8I
8H
8G
8F
8E
9I
9H
9G
9F
9E
10I
10H
10G
10F
10E
11I
11H
11G
11F
11E
12I
12H
12G
12F
12E
13I
13H
13G
13F
13E
14I
14H
14G
14F
14E
0
(1：300)
15m


15I
15H
15G
15F
15E
15D
16I
16H
16G
16F
16E
16D
17I
17H
17G
17F
17E
17D
18I
18H
18G
18F
18E
18D
19I
19H
19G
19F
19E
19D
20I
20H
20G
20F
20E
20D
21I
21H
21G
21F
21E
21D
22I
22H
22G
22F
22E
22D
4.5
4.6
4.7
4.8
4.9
5.0
新田畑川
0
(1：300)
15m

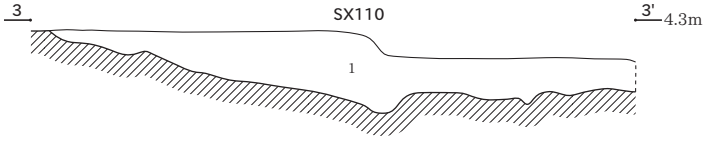




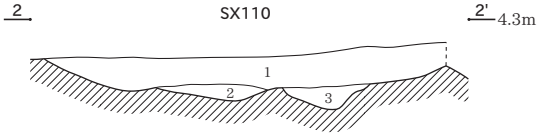
SK108
1　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。
　　黄灰色粘質土とφ1～20cmのオリーブ灰色シルトブロックの混合土。



SD109・試掘22-31トレンチ基本層序
1　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土　粘性強く、しまり弱い。
2　灰色（5Y4/1）粘質土　粘性・しまり強い。
3　灰色（5Y5/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。
4　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。
　　φ1～5mmの炭化物少量含む。
5　（SD109の1層）黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。
　　φ1～3cmのオリーブ灰色シルトブロック少量含む。

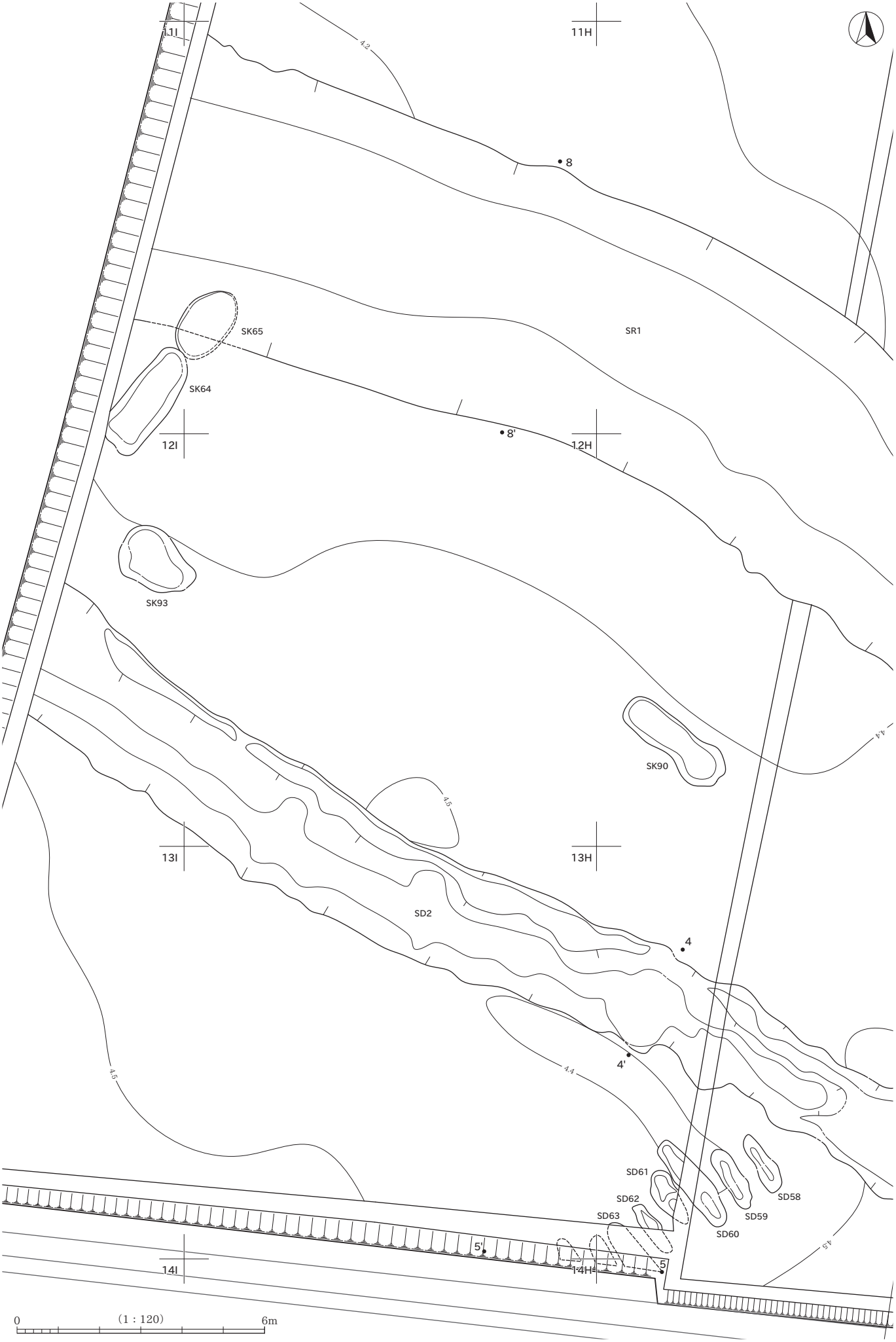


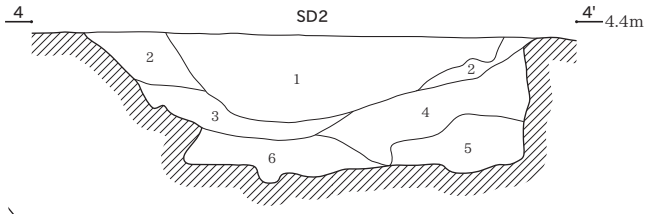
SX110（Bライン）
1　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。
　　φ5mmの炭化物少量含む。



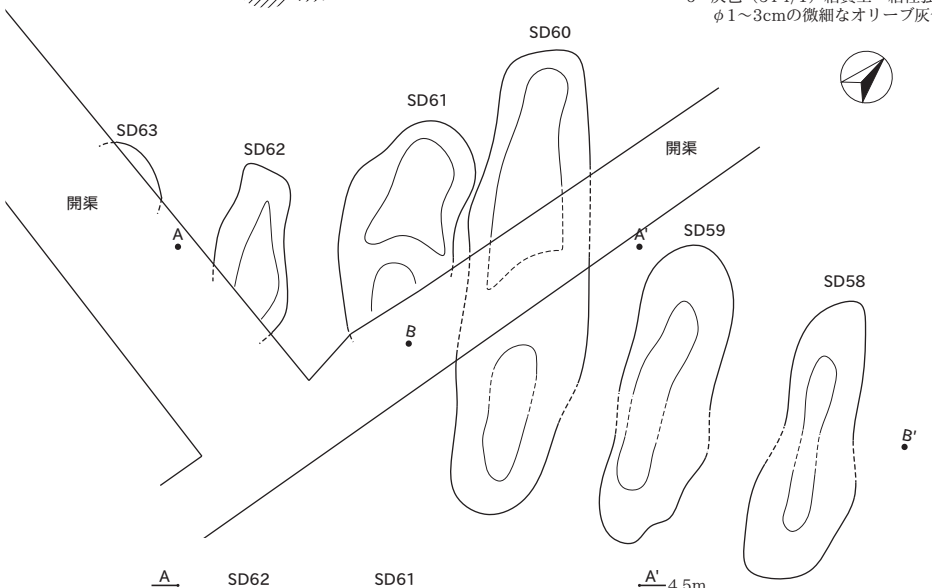
SX110（Aライン）
1　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。
　　φ5～10mmのオリーブ灰色シルトブロック、炭化物少量含む。
2　オリーブ灰色（2.5GY5/1）シルト　粘性やや強く、しまりやや弱い。
　　腐植物を少量含む。
3　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。
　　φ5mmの炭化物少量含む。1層よりやや黒ずむ。SD109の覆土か。

0　(1：40)　2m

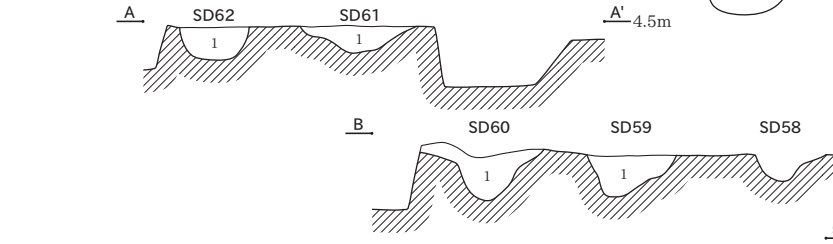

11I
11H
4.2
8
SR1
SK65
SK64
12I
8'
12H
SK93
SK90
4.4
4.5
13I
13H
SD2
4
4'
4.5
4.4
SD61
SD62
SD63
SD58
SD59
SD60
5'
5
14I
14H
4.5
0
(1 : 120)
6m

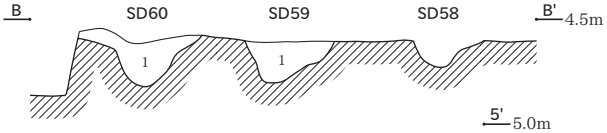


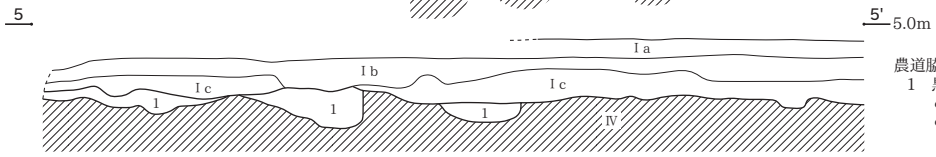
SD2（Aライン）
1　暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘質土　粘性やや弱く、しまり強い。粗砂と互層をなす。
2　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性・しまり強い。φ1mmの炭化物微量含む。
3　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。
φ3cmのオリーブ灰色シルトブロック少量含む。2層よりしまりが弱い。
4　暗オリーブ灰色（5GY3/1）砂　粘性なし、しまり弱い。
黄灰色粘質土、オリーブ灰色シルトブロック多量含む。
5　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性やや強く、しまり弱い。
暗オリーブ灰色砂多量、オリーブ灰色シルトブロック少量含む。
6　灰色（5Y4/1）粘質土　粘性強く、しまり弱い。
φ1～3cmの微細なオリーブ灰色シルトブロック多量、暗オリーブ灰色砂を少量含む。



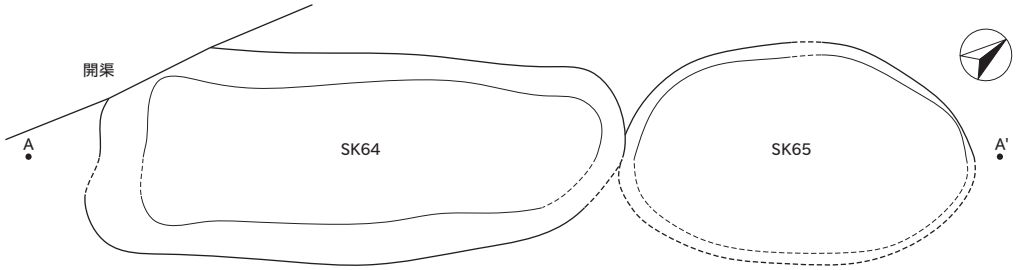
SD58
1　灰色（7.5Y4/1）粘質土　粘性・しまり強い。
φ1～3mmの炭化物少量、
オリーブ灰色シルトブロック多量含む。
SD59
1　灰色（7.5Y4/1）粘質土　粘性・しまり強い。
φ1～10mm炭化物少量、
オリーブ灰色シルトブロック多量含む。
SD60
1　灰色（7.5Y4/1）粘質土　粘性・しまり強い。
φ1～3mmの炭化物少量、
φ1～10cmのオリーブ灰色シルトブロック多量含む。
SD61
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
粘性強く、しまりやや強い。
φ1～3mmの炭化物、
φ1～20mmのオリーブ灰色シルトブロック多量含む。
SD62
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
粘性強く、しまりやや強い。
φ3mmの炭化物少量、
φ1～20mmのオリーブ灰色シルトブロック多量含む。



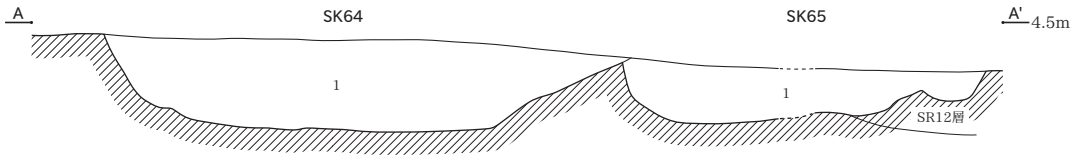




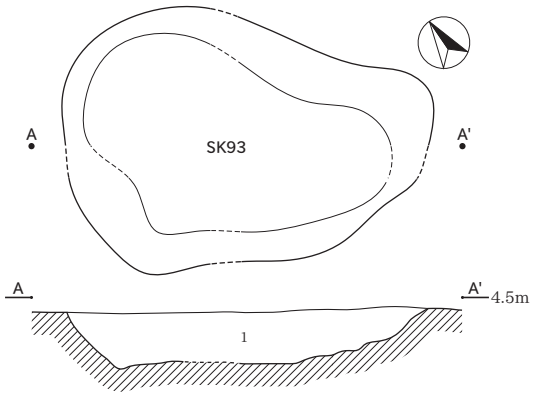
農道脇開渠壁面SD
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土　粘性強く、しまりやや強い。
φ1～3mmの炭化物、
φ1～20mmのオリーブ灰色シルトブロック多量含む。



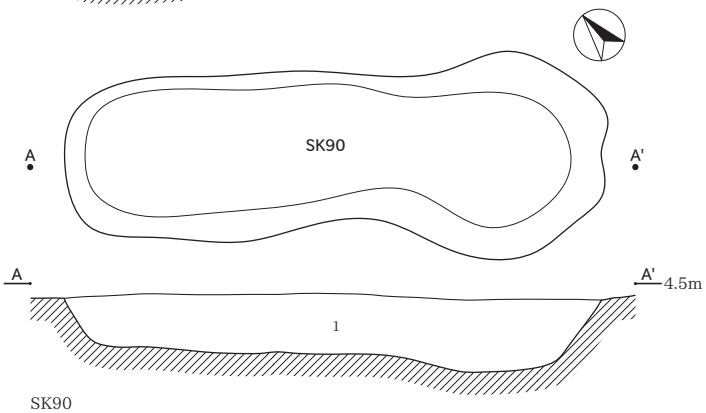
SK64
1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
粘性強く、しまり弱い。
オリーブ灰色シルト多量含む。
SK65を切る。



SK65
1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
粘性強く、しまりやや弱い。
オリーブ灰色シルト多量含む。
SK64に切られる。

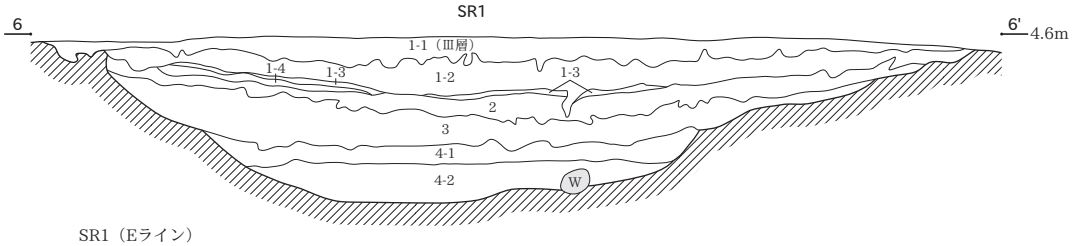


SK93
1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性・しまり強い。
炭化物少量含む。オリーブ灰色シルトブロック多量含む。

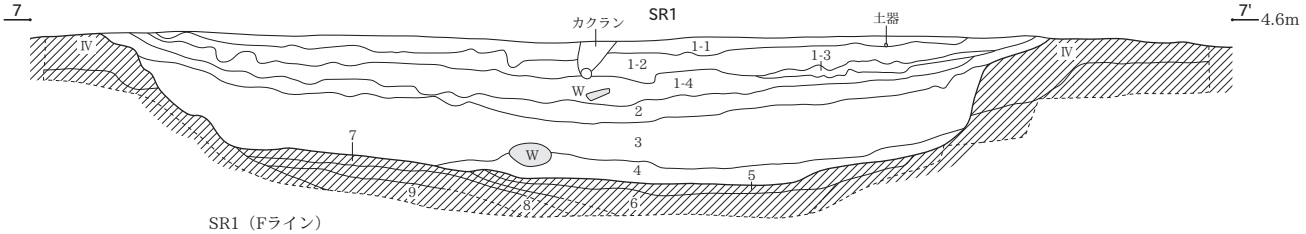


SK90
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土　粘性・しまり強い。
オリーブ灰色シルトブロック多量含む。

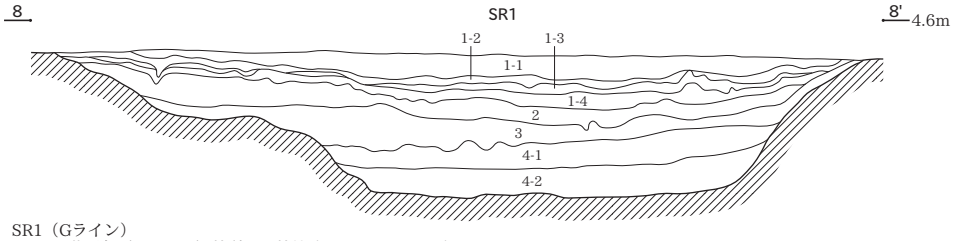
0　（1：40）　2m



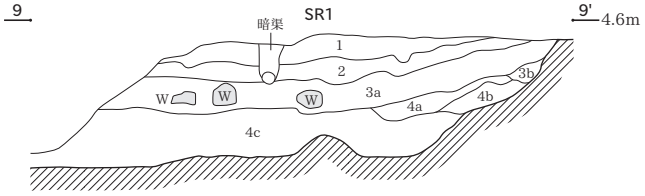
SR1（Eライン）
1-1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性強く、しまりやや強い。
　φ1mmの炭化物を斑状に多量含む。土師器・須恵器小片を含む層。Ⅲ層に相当か。
1-2　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。
　φ1～2mmの炭化物、オリーブ灰色シルトブロック多量含む。下部に厚さ1cm前後の炭化物層が筋状に認められる。
1-3　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。
　オリーブ灰色シルトをブロック状に多量含み、調査区内の全てに堆積する。地山に近似する。
1-4　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性強く、しまり弱い。φ1～10mmの炭化物多量含む。1-2層に似る。
2　黄灰色（2.5Y6/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。φ1～20mmの炭化物を斑状に多量含む。
3　灰色（5Y5/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。
　オリーブ灰色シルトをブロック状に多量含む。遺物を多く含む層。
4-1　褐灰色（10YR6/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。
　3層と4層の漸移層。灰色細砂を斑状に多量含む。炭化物多量含む。
4-2　灰黄褐色（10YR4/2）土　粘性弱く、しまりやや強い。
　腐植物を主体とする層。遺物を含み、下位よりも腐植物多量含む。



SR1（Fライン）
1-1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性・しまり強い。
　φ1mmの炭化物を斑状に多量含む。土師器・須恵器の小片を含む層。Ⅲ層に相当か。
1-2　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。
　φ1～10mmの炭化物多量、ブロック状のオリーブ灰色シルトを斑状に少量含む。
1-3　灰白色（2.5Y7/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。
　オリーブ灰色シルトをブロック状に多量含む。調査区全てで確認できるが、本ベルトでは右岸側のみに堆積する。
1-4　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性強く、しまり弱い。
　ブロック状のオリーブ灰色シルトと、炭化物を筋状に多量含む。
2　黄灰色（2.5Y6/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。φ1～10mmの炭化物を斑状に多量含む。
3　灰色（5Y6/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。腐植物を斑状に含む。
　Ⅳ層・Ⅴ層をブロック状・筋状に含み、下部ほど色調は暗くなる。遺物を最も多く含む層。
4　灰黄褐色（10YR4/2）土　粘性弱く、しまりやや強い。腐植物を主体とする層。
　緑灰色砂を少量含み、遺物が出土する。平安時代の川底。
5　褐灰色（10YR6/1）土　腐植物多量含む層。Ⅳ層・Ⅴ層をブロック状に多量含む。緑灰色砂を含む。
6　灰黄褐色（10YR4/2）土　粘性弱く、しまりやや強い。腐植物を主体とする層。
　4層に似るが、緑灰色砂多量含む。腐植物との互層堆積。
7　灰色（5Y6/1）粘質土　3層に似る。下部ほど腐植物が多くなる。
8　腐植物主体の層。灰色砂多量含む。
9　粗砂が主体の層。腐植物多量含む。



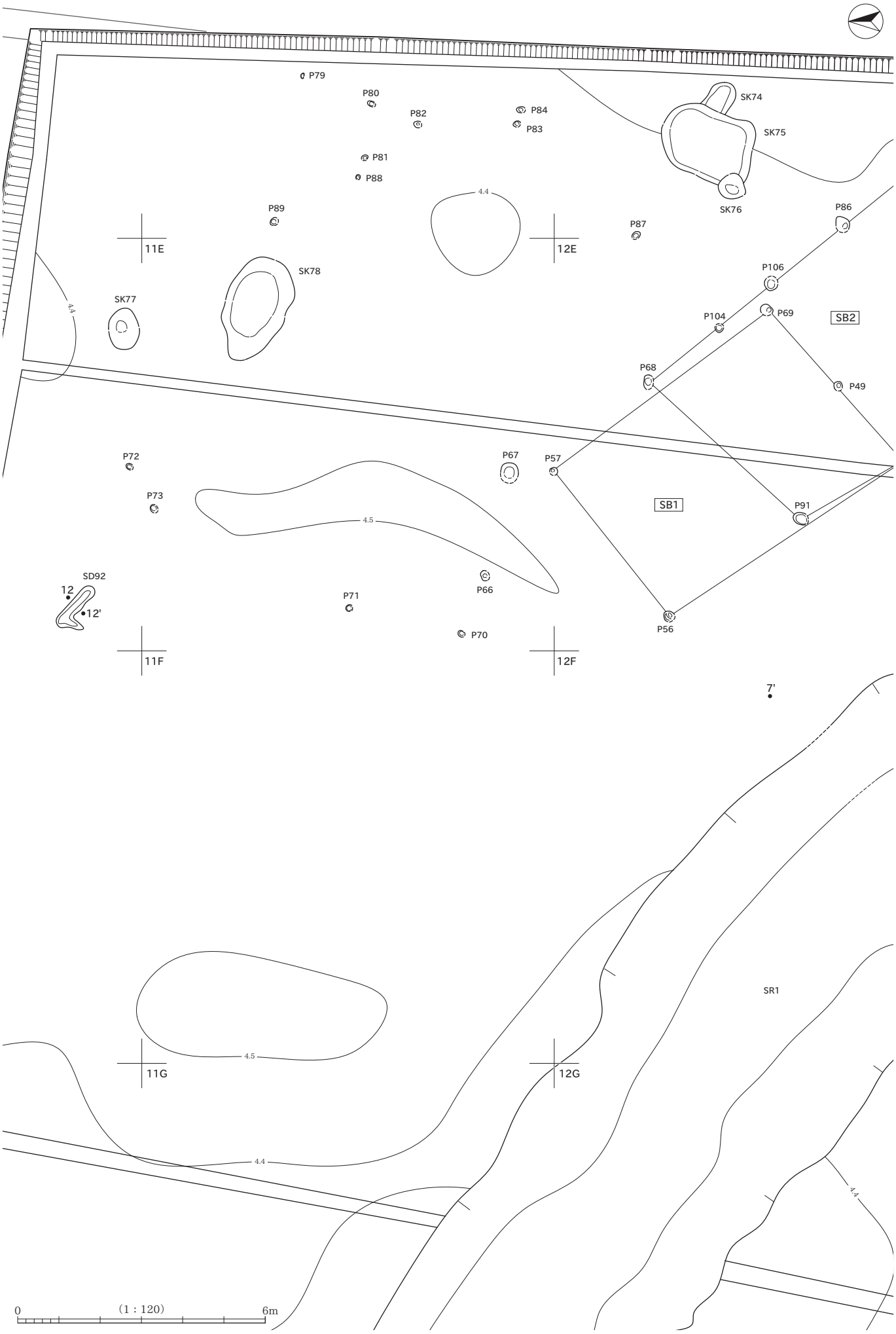
SR1（Gライン）
1-1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性強く、しまりやや強い。
　φ1mmの炭化物を斑状に多量含む。土師器・須恵器小片を含む層。Ⅲ層に相当か。
1-2　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。
　φ1～10mmの炭化物、ブロック状のⅣ層を多量含む。
1-3　灰白色（2.5Y7/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。ブロック状のⅣ層を多量含む。
1-4　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性強く、しまり弱い。φ1～10mmの炭化物多量含む。
2　黄灰色（2.5Y6/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。φ1～20mmの炭化物を斑状に多量含む。
3　灰色（5Y5/1）粘質土　粘性強く、しまりやや強い。ブロック状のⅣ層を斑状に多量含む。
4-1　褐灰色（10YR6/1）土　粘性強く、しまりやや弱い。
　腐植物を粒子状、ブロック状に多量含み、灰色細砂を斑状に多量含む。
4-2　灰黄褐色（10YR4/2）土　粘性弱く、しまりやや強い。
　腐植物を主体とし、緑灰色砂を斑状に含む。

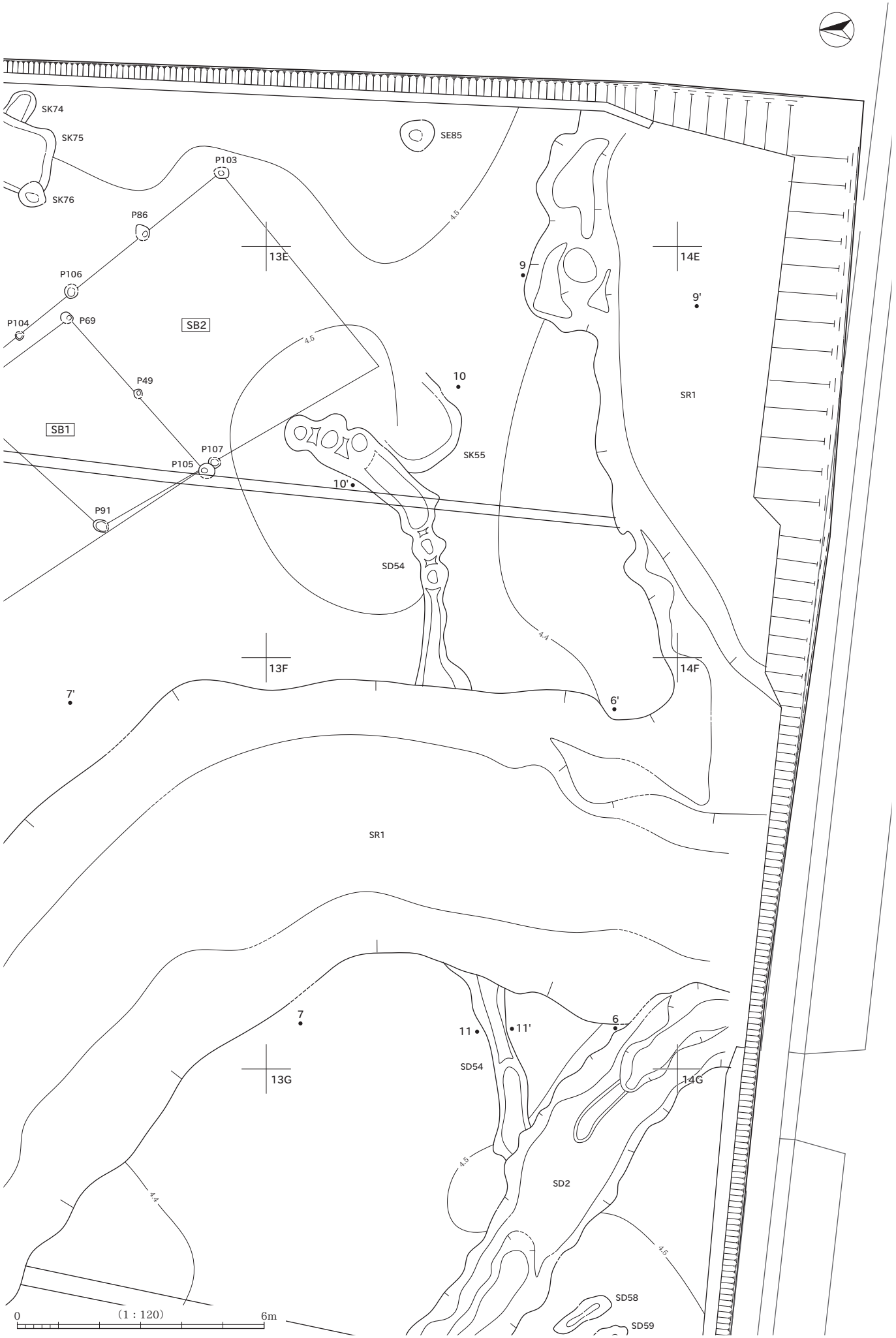


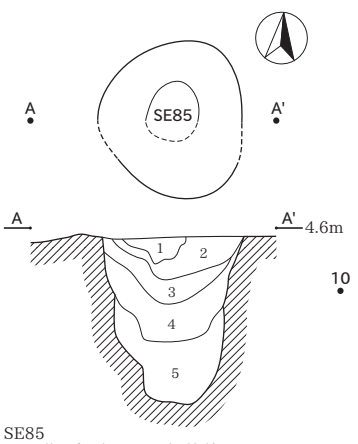
SR1（Hライン）
1　黒色（2.5Y2/1）粘質土　粘性・しまり強い。地山シルトを帯状に含む。
2　黄灰色（2.5Y5/1）粘土　粘性・しまり強い。φ5mmの炭化物少量含む。
3a　黄灰色（2.5Y4/1）粘土　粘性・しまり強い。φ5mmの炭化物少量含む。
3b　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性・しまり強い。
　φ5mmの炭化物、オリーブ灰色シルト少量含む。
4a　オリーブ灰色（2.5GY6/1）粘質シルト　粘性・しまり強い。
　黄灰色粘土、φ3～5mmの炭化物少量含む。
4b　オリーブ灰色（2.5GY6/1）シルト　粘性・しまり強い。黄灰色粘土少量含む。
4c　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性やや強く、しまりやや弱い。
　φ1～5mmの炭化物、腐植物多量、オリーブ灰色シルト少量含む。

0　（1：60）　3m

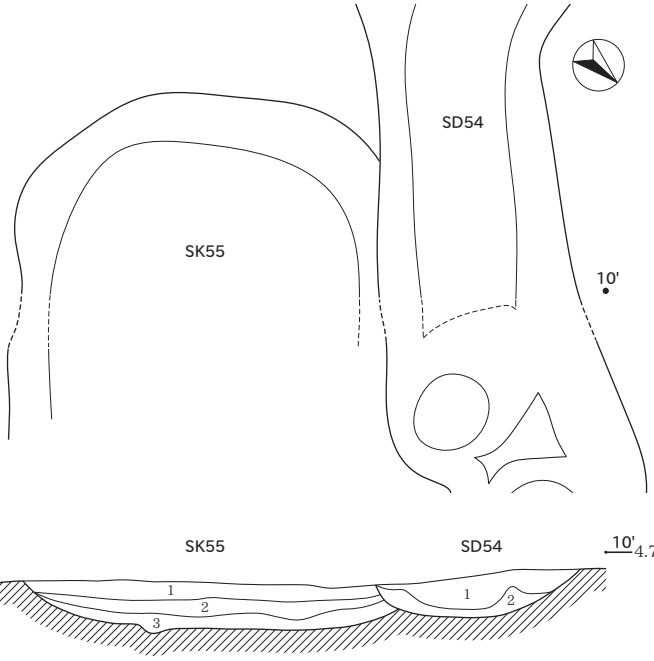
遺構分割図（3）


P79
P80
P82
P84
P83
P81
P88
SK74
SK75
SK76
P86
P87
P89
4.4
11E
12E
SK78
SK77
P106
P104
P69
SB2
P68
P49
P72
P67
P57
P73
SB1
P91
4.5
SD92
12
12'
P66
P71
P56
P70
11F
12F
7'
SR1
11G
12G
0
(1 : 120)
6m


SK74
SK75
SK76
SE85
P103
P86
P106
P104
P69
SB2
P49
SB1
P107
P105
P91
13E
14E
9
9'
10
10'
SK55
SR1
SD54
13F
14F
7'
6'
SR1
7
11
11'
6
13G
14G
SD54
SD2
SD58
SD59
4.5
4.4
0
(1 : 120)
6m

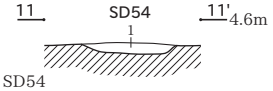


SE85
1　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土
粘性・しまり強い。
φ5mmの炭化物少量含む。
2　灰色（7.5Y6/1）粘質シルト
粘性強く、しまりやや強い。
3　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
粘性強く、しまりやや弱い。
φ1～5mmの炭化物多量含む。
4　オリーブ灰色（2.5GY6/1）粘質
シルト粘性強く、しまりやや弱い。
黄灰色粘質土多量、φ5mmの炭化物少量含む。
5　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
粘性強く、しまり弱い。1～3層より色調黒い。
腐植物、φ1～5mmのオリーブ灰色シルトブロック少量含む。

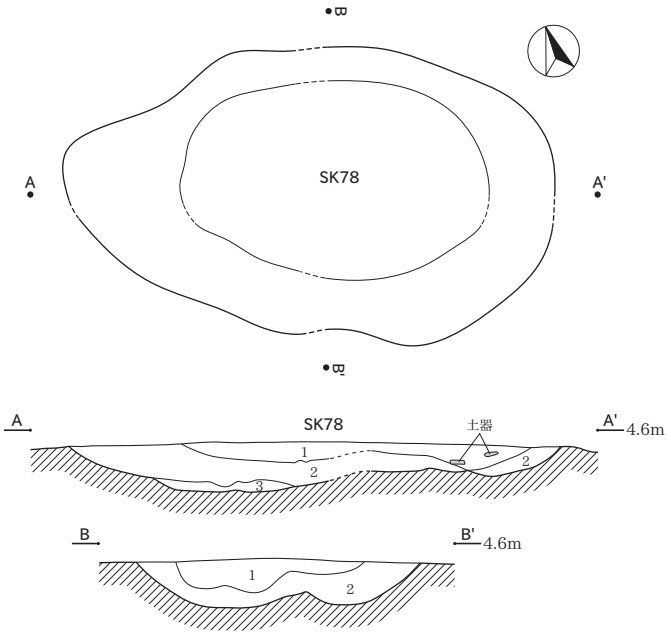


SD54
1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
粘性・しまり強い。
φ1cm前後の炭化物粒多量、
オリーブ灰色シルトブロック少量含む。
2　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
粘性・しまり強い。
φ1cm前後の炭化物粒少量、
オリーブ灰色シルトブロック少量含む。

SK55
1　黄灰色（2.5Y6/1）粘質土
粘性・しまり強い。
φ1～2cm前後の炭化物多量含む。
2　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
粘性強く、しまりやや強い。
1層より色調が暗い。
φ1～5cm前後の炭化物粒少量含む。
3　灰色（5Y6/1）粘質土
粘性強く、しまり弱い。
2層より色調が明るい。Ⅳ層に似る。
緑灰色砂多量含む。

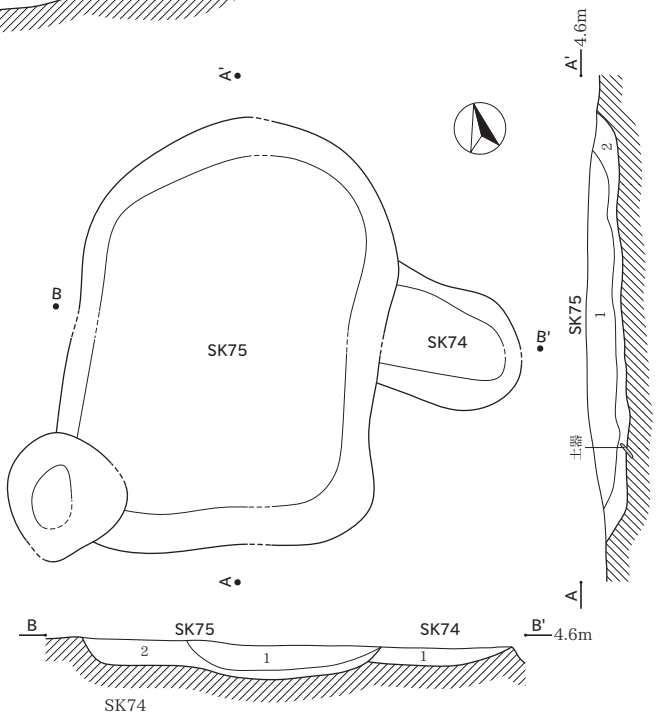


SD54
1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
粘性・しまり強い。
φ1～5mmの炭化物少量、白色砂粒少量含む。
SR1の2層と近似する。



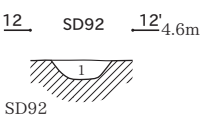
SK78（Aライン）
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
粘性・しまりやや強い。φ1～5mmの炭化物少量、
オリーブ灰色シルトブロック少量含む。
2　黄灰色（2.5Y6/1）粘質土
粘性・しまりやや弱い。φ1～5mmの炭化物少量、
φ1～5mmのオリーブ灰色シルトブロック少量含む。
3　オリーブ灰色（2.5GY6/1）シルト
粘性やや強く、しまり弱い。黄灰色粘質土少量含む。

SK78（Bライン）
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
粘性・しまり強い。φ1～5mmの炭化物多量含む。φ1～5mmのオリーブ灰色シルトブロック少量含む。
2　黄灰色（2.5Y6/1）粘質土
粘性強く、しまりやや弱い。φ1～5mmの炭化物少量、φ1～5mmのオリーブ灰色シルトブロック少量含む。

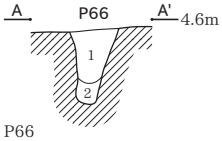


SK74
1　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性・しまり強い。
φ1～3mmの炭化物微量含む。SK75より色調が青黒い。

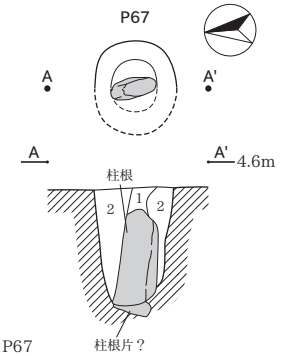
SK75
1　褐灰色（10YR5/1）粘質土　粘性・しまり強い。
φ1～5mmの炭化物、オリーブ灰色シルトブロック多量含む。
2　灰白色（2.5GY8/1）シルト　粘性やや強く、しまりやや弱い。
褐灰色粘質土少量含む。



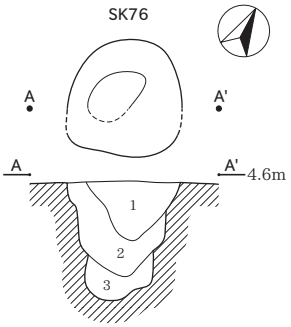
SD92
1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
粘性・しまり強い。
φ1～5mmの炭化物少量含む。



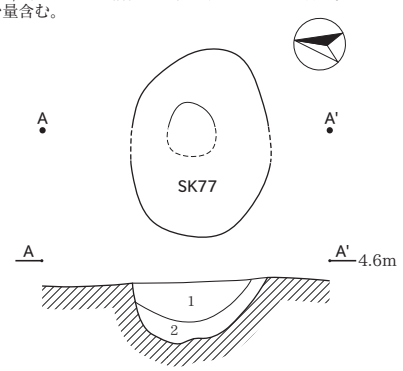
P66
1　褐灰色（10YR6/1）粘質土
粘性・しまり強い。
φ5mmの炭化物少量含む。
2　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
粘性強く、しまり弱い。
φ5mmの炭化物少量含む。



P67
1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
粘性強く、しまり弱い。
φ5mmのオリーブ灰色シルトブロック少量含む。
2　オリーブ灰色（2.5GY5/1）シルト
粘性やや強く、しまり強い。
黄灰色粘質土少量含む。

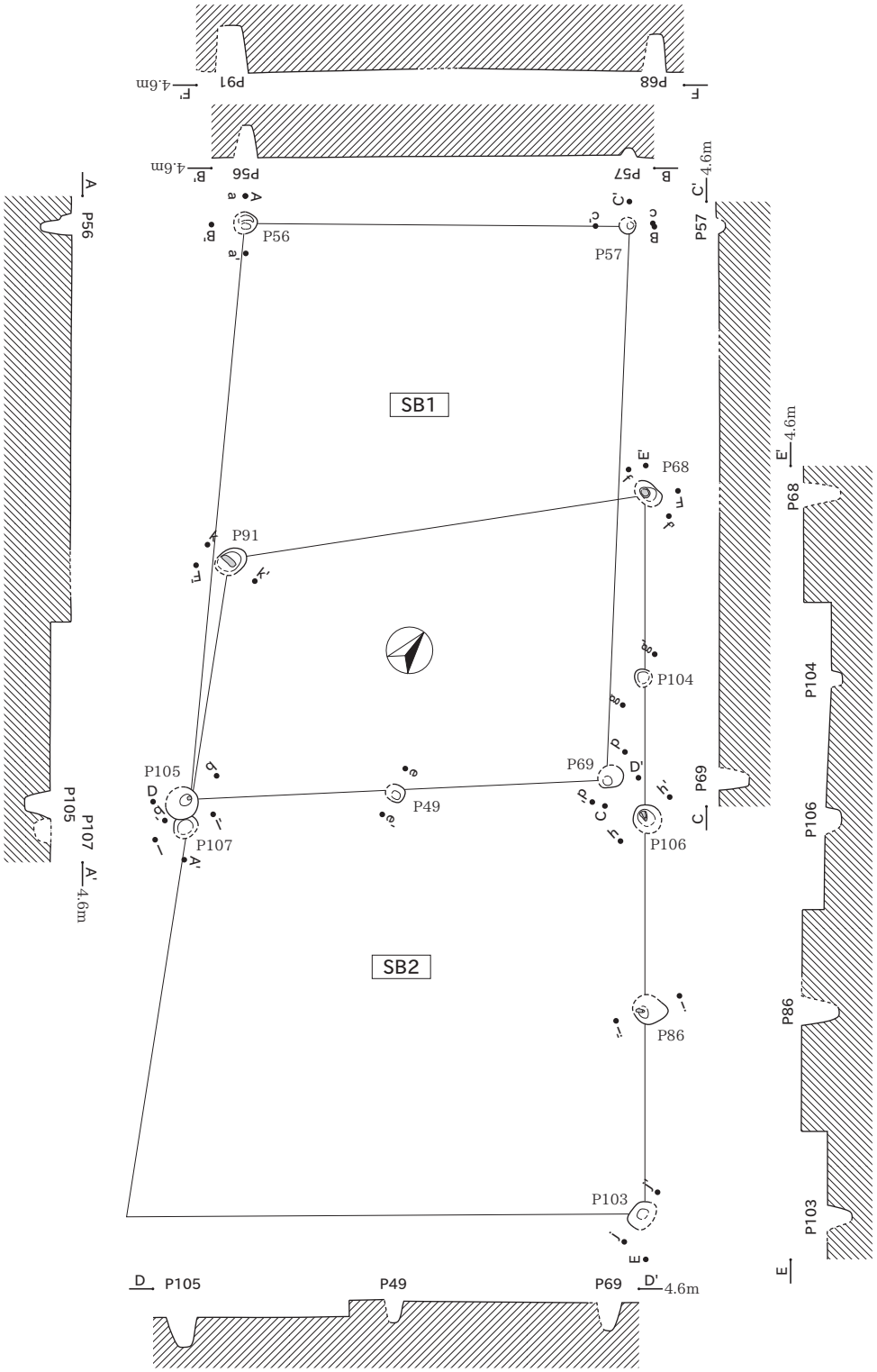


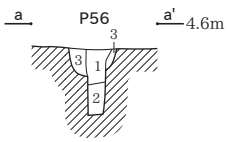
SK76
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
粘性・しまり強い。φ5mmの炭化物、
オリーブ灰色シルトブロックを帯状に多量含む。
2　黄灰色（2.5Y6/1）粘質土
粘性強く、しまり弱い。
φ5mmの炭化物少量含む。
3　オリーブ灰色（2.5GY6/1）シルト
粘性やや強く、しまり弱い。
1･2層を多量含む。



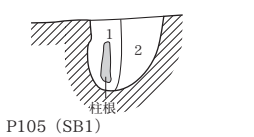
SK77
1　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土
粘性・しまり強い。
φ1～3mmの炭化物少量含む。
2　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
粘性・しまり強い。φ1～5mmの炭化物、
オリーブ灰色シルトブロック少量含む。

0　（1：40）　2m

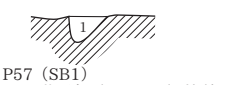




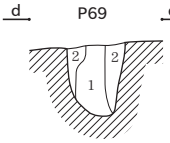
P56（SB1）
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・しまり強い。
　φ1～5mmの炭化物少量、オリーブ灰色シルトブロック多量含む。
2　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性強く、しまり弱い。
3　灰色（7.5Y5/1）粘質土　粘性・しまり強い。
　φ1～5mmの炭化物少量、オリーブ灰色シルトブロック多量含む。



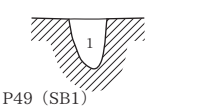
P105（SB1）
1　オリーブ灰色（2.5GY6/1）シルト
　粘性強く、しまり弱い。
　φ1～3mmの炭化物少量、
　褐灰色粘質土多量含む。
2　オリーブ灰色（2.5GY5/1）シルト
　粘性強く、しまり弱い。
　φ1～5mmの炭化物、
　褐灰色粘質土少量含む。



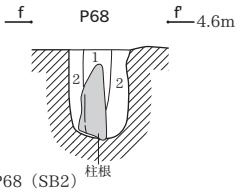
P57（SB1）
1　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土
　粘性強く、しまりやや弱い。
　φ5mmの炭化物少量含む。



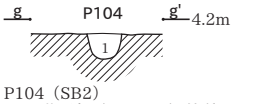
P69（SB1）
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
　粘性強く、しまり弱い。
　φ5mmのオリーブ灰色シルトブロック多量含む。
2　オリーブ灰色（2.5GY6/1）シルト
　粘性・しまりやや弱い。
　黄灰色粘質土多量含む。



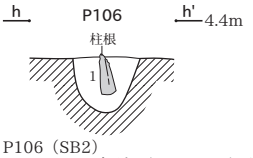
P49（SB1）
1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
　粘性・しまり強い。
　φ1～3mmの炭化物少量含む。



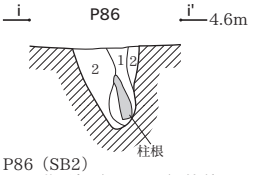
P68（SB2）
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土
　粘性強く、しまり弱い。
2　オリーブ灰色（2.5GY6/1）シルト
　粘性やや強く、しまり強い。
　黄灰色粘質土少量含む。



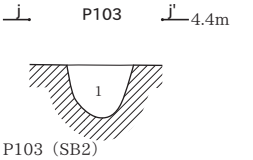
P104（SB2）
1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
　粘性・しまり強い。
　φ1～3mmの炭化物少量含む。



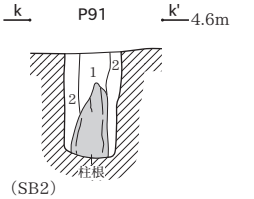
P106（SB2）
1　オリーブ灰色（2.5GY6/1）砂質シルト
　粘性・しまり強い。
　黄灰色粘質土ブロック、砂粒多量含む。



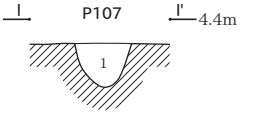
P86（SB2）
1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
　粘性・しまり強い。
　φ1～3mmの炭化物少量含む。
2　黄灰色（2.5Y6/1）粘質土
　粘性・しまり強い。
　φ1mmの炭化物少量含む。



P103（SB2）
1　黄灰色（2.5Y6/1）粘質土
　粘性・しまり強い。
　φ1～5mmの炭化物少量含む。



P91（SB2）
1　黄灰色（2.5Y6/1）粘質土
　粘性強く、しまり弱い。
　φ5～10mmのオリーブ灰色シルトブロック、
　黒褐色粘質土少量含む。
2　オリーブ灰色（2.5GY6/1）シルト
　粘性やや弱く、しまり強い。
　φ1～5mmの炭化物少量、1層を多量含む。



P107（SB2）
1　オリーブ灰色（2.5GY6/1）シルト
　粘性強く、しまり弱い。
　φ1～3mmの炭化物少量含む。
　褐灰色粘質土少量含む。

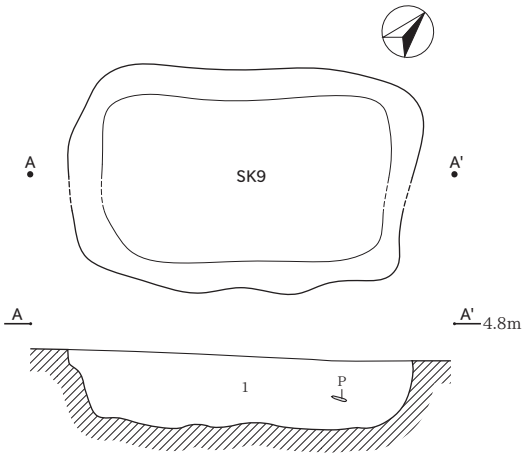
SB平面図
（1：80）
0　4m

P断面
（1：40）
0　2m

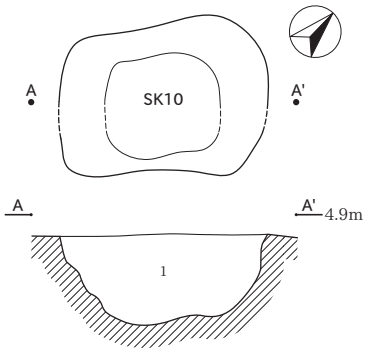
遺構分割図（5）

16
16'
15E
16E
13'
15'
SD2
SR1
13
14'
15
15F
SD52
16F
14
P13
P51
P36
P16
P35
P17
P18
P15
P19
P21
P14
P34
P23
P24
P22
P11
P12
P28
P26
P25
P27
P30
P53
P29
SK20
SK9
4.6
4.5
4.7
15G
16G
0
(1 : 120)
6m

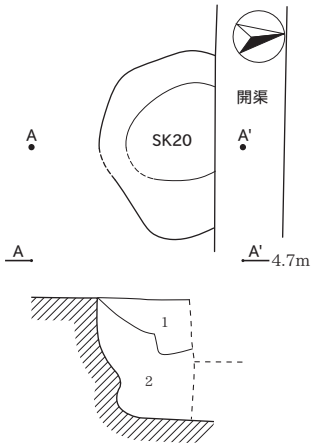
SD2
4.6
17E
18E
SK95
4.7
SD52
13
SR1
4.7
17F
18F
4.8
SK97
P51
P36
P16
SK10
P46
P17
P35
P15
P18
P37
P38
P19
P47
P21
P34
P14
P39
P23
P24
P40
P22
P48
P41
P28
P26
P27
P25
P30
P42
P53
P29
P31
P33
17G
18G
4.9
P32
P43
P45
P44
0
(1：120)
6m



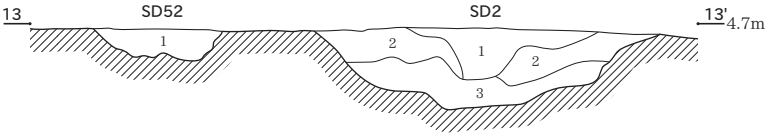
SK9
1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘質強く、しまりやや弱い。
　φ1～30cmのオリーブ灰色シルトブロック多量、
　φ1～5mmの黒色粘質土ブロック・炭化物少量含む混合土。



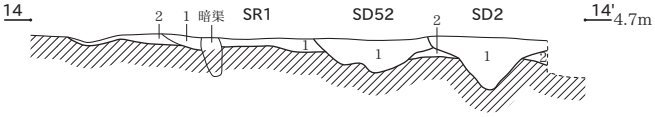
SK10
1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性・しまり強い。
　黄灰色粘質土とφ5～20cmのオリーブ灰色シルト
　ブロックの混合土。



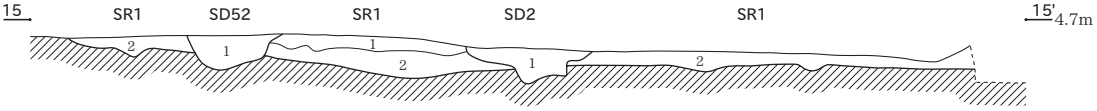
SK20
1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
　粘性強く、しまり弱い。
　φ1～5mmの炭化物少量含む。
2　灰色（7.5Y5/1）粘質土
　粘性強く、しまり弱い。
　φ3mm大の炭化物微量含む。



SD2（Dライン）
1　黄灰色（2.5Y4/1）砂質粘土　粘性・しまりやや強い。
　炭化物少量、腐植土中量含む。
2　黄灰色（2.5Y6/1）粘質土　粘性・しまり強い。
　炭化物・オリーブ灰色シルト少量含む。
3　黄灰色（2.5Y5/1）土　粘性・しまりやや強い。
　腐植物主体の層。細砂含む。
SD52（Dライン）
1　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性・しまり強い。
　オリーブ灰色シルト、炭化物少量含む。

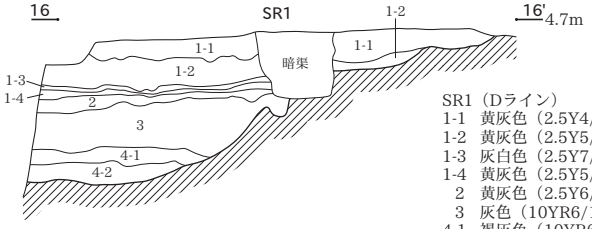


SR1（Bライン）
1　黒色（2.5Y2/1）粘質土　粘性・しまり強い。オリーブ灰色シルトを帯状に含む。
2　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性・しまり強い。φ5mmの炭化物少量含む。
SD2（Bライン）
1　灰色（5Y5/1）シルト　粘性・しまり強い。
SD52（Bライン）
1　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性・しまり強い。

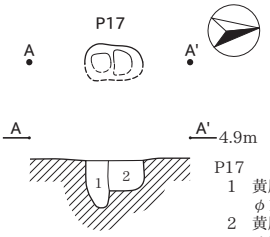


SR1（Cライン）
1　黒色（2.5Y2/1）粘質土　粘性・しまり強い。オリーブ灰色シルトを帯状に含む。
2　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性・しまり強い。φ5mmの炭化物少量含む。

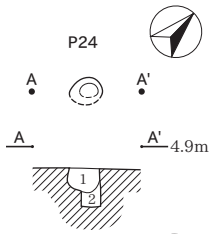
SD2（Cライン）
1　灰色（7.5Y4/1）シルト　粘性やや強く、しまり強い。黒色砂粒多量含む。
SD52（Cライン）
1　灰色（5Y6/1）粘質土　粘性・しまり強い。



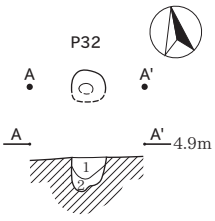
SR1（Dライン）
1-1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性強く、しまりやや強い。φ1mm前後の炭粒を斑状に多量含む。
1-2　黄灰色（2.5Y5/1）粘性強く、しまりやや弱い。φ1～10mm前後の炭化粒多量含む。
1-3　灰白色（2.5Y7/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。オリーブ灰色シルトブロックを斑状に多量含む。
1-4　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性強く、しまり弱い。φ1～10mm前後の炭化物含む。
2　黄灰色（2.5Y6/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。φ1～20mm前後の炭化物粒を斑状に多量含む。
3　灰色（10YR6/1）粘質土　粘性強く、しまりやや強い。オリーブ灰色シルトをブロック状に多量含む。
4-1　褐灰色（10YR6/1）土　粘性強く、しまりやや強い。腐植物粒子状・ブロック状に多量、灰色細砂を斑状に多量含む。
4-2　灰黄褐色（10YR4/2）土　粘性弱く、しまりやや強い。腐植物を主体とする層、緑灰色砂を筋状に斑状に含む。



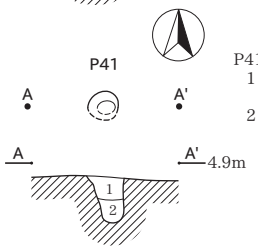
P17
1　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性・しまり強い。
　φ1mmの炭化物少量含む。
2　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性・しまり強い。
　φ5～20mmのオリーブ灰色シルトブロック少量、
　φ1mmの炭化物微量含む。



P24
1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性・しまり強い。
　φ1～5mmの炭化物、オリーブ灰色シルトブロック少量含む。
2　オリーブ灰色（5GY6/1）シルト　粘性・しまりやや強い。
　φ1～3mmの炭化物少量、灰色粘質土多量含む。



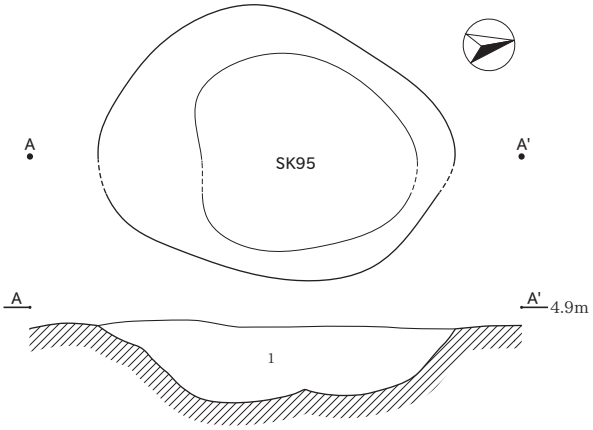
P32
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土　粘性・しまり強い。
　φ1mmの炭化物、φ5mmのオリーブ灰色シルト
　ブロック少量含む。
2　オリーブ灰色（5GY6/1）粘質シルト
　粘性やや強く、しまりやや弱い。1層を少量含む。



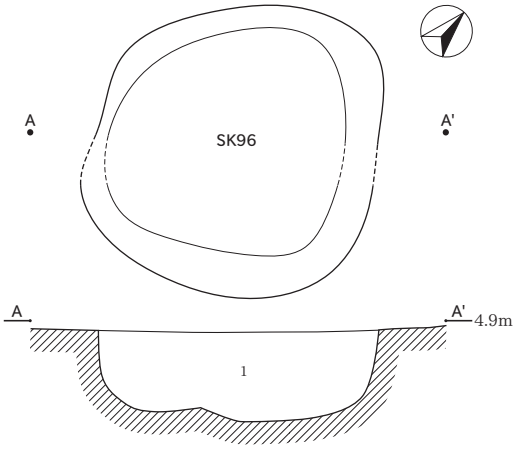
P41
1　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性・しまり強い。
　φ1～5mmの炭化物、オリーブ灰色シルトブロック少量含む。
2　オリーブ灰色（5GY6/1）粘質シルト
　粘性・しまり強い。1層を多量含む。

13～16断面図
（1：60）
0　3m

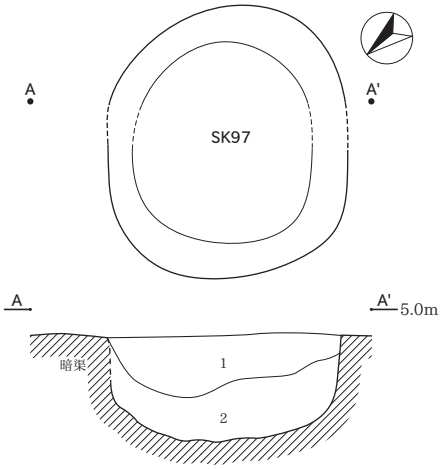
個別図
（1：40）
0　2m



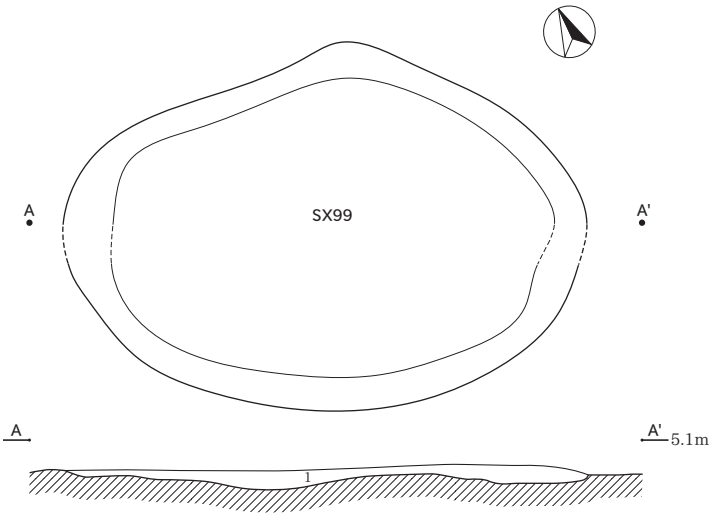
SK95
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土　粘性・しまり強い。
　φ1～5mmのオリーブ灰色シルトブロック多量含む。



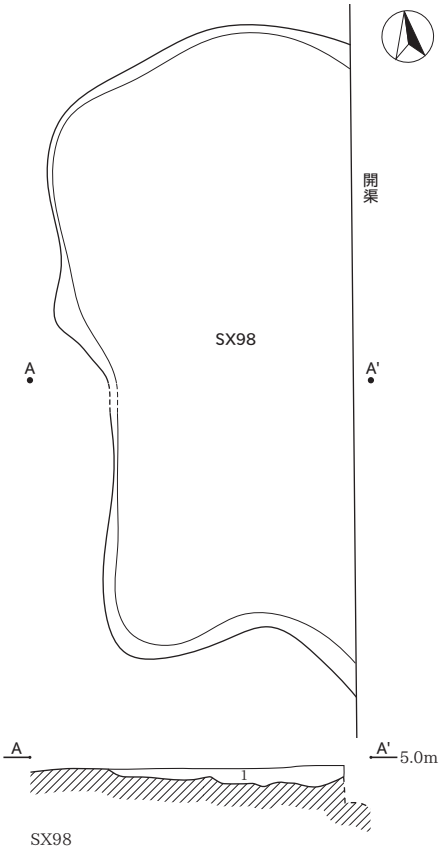
SK96
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土　粘性・しまり強い。
　φ1～5mmのオリーブ灰色シルトブロック、砂粒少量含む。



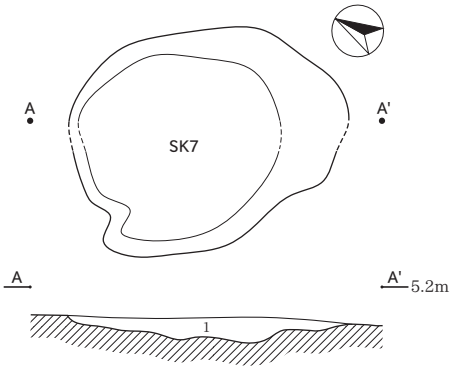
SK97
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土　粘性・しまり強い。
　φ5mmの灰白色粘質土ブロック少量含む。
2　灰色（N6/0）粘質土　粘性・しまり強い。
　黒褐色粘質土ブロック中量含む。



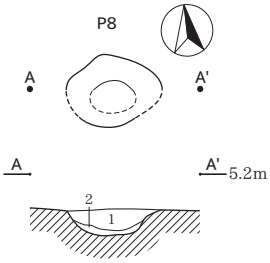
SX99
1　黒褐色（2.5Y3/2）粘質土　粘性やや強く、しまりやや弱い。
　φ1～10mmのオリーブ灰色シルトブロック多量、
　φ1～5mmの炭化物少量含む。



SX98
1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性・しまり強い。
　φ1～5mmの炭化物、オリーブ灰色シルトブロック少量含む。



SK7
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土　粘性・しまり強い。
　中～下部に黒色粘質土ブロックを含む。

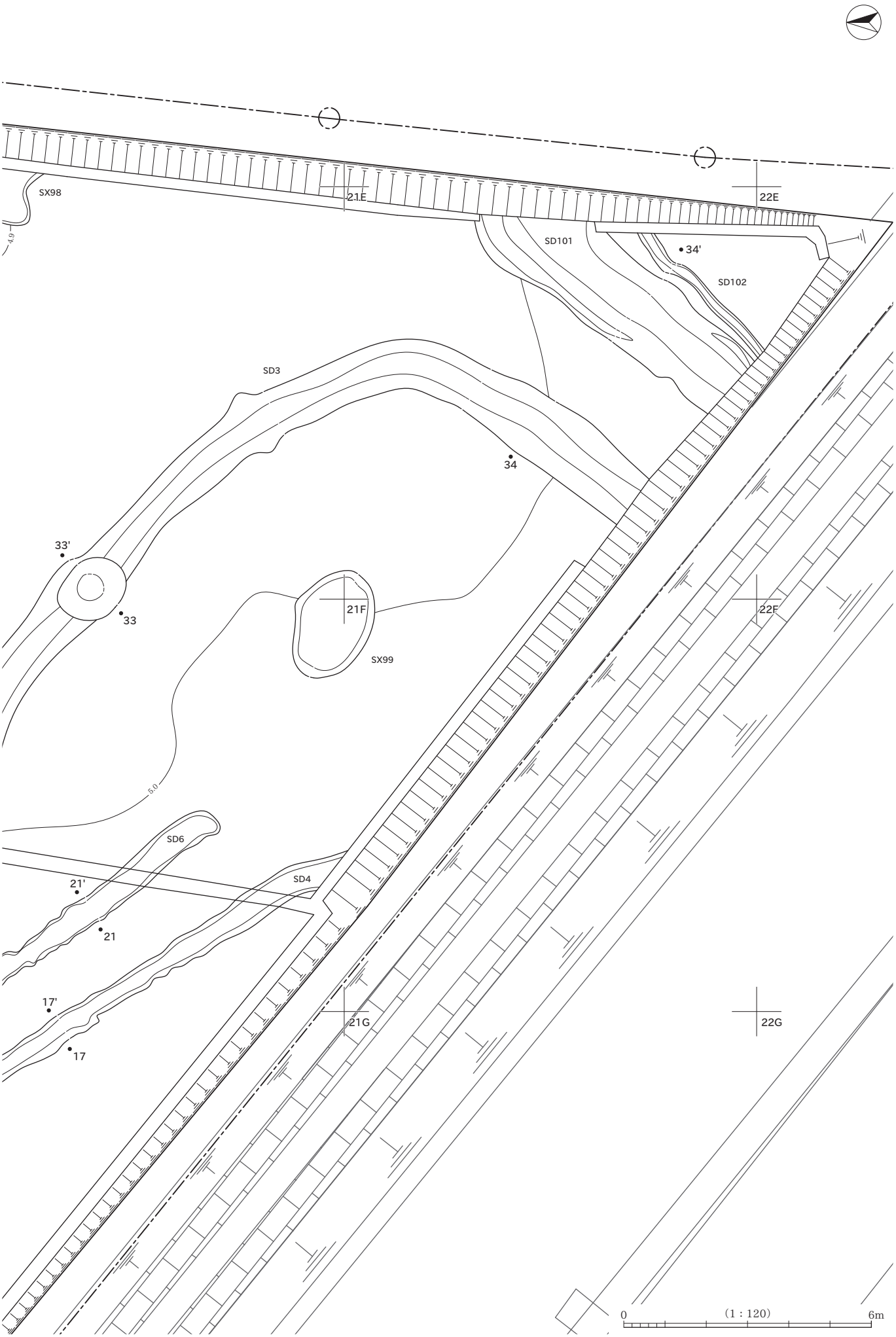


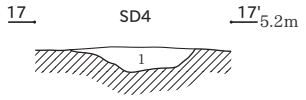
P8
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
　粘性・しまり強い。
2　灰色（7.5Y6/1）シルト
　粘性・しまり強い。
　黄灰色粘質土多量含む。

0　（1：40）　2m

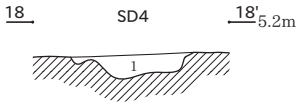
遺構分割図（7）

19E
20E
SX98
SK96
19F
20F
33'
33
4.9
SK97
SD3
5.0
21'
SD6
21
32'
32
22'
31'
5.0
17'
19G
20G
22
31
17
18'
30
30'
18
SD4
4.9
SD5
20'
19'
SK7
19
20
P8
0
(1 : 120)
6m

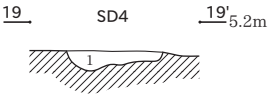

SX98
21E
22E
4.9
SD101
34'
SD102
SD3
34
33'
33
21F
22F
SX99
5.0
SD6
SD4
21'
21
17'
17
21G
22G
0
(1：120)
6m



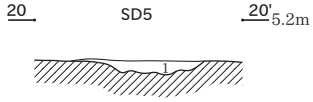
SD4（Aライン）
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
粘性・しまり強い。
φ1～3mmの炭化物、
白色砂粒少量含む。



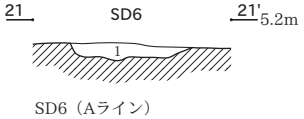
SD4（Bライン）
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
粘性・しまり強い。
φ1～5mmのオリーブ灰色シルトブロック・
黒色粘質土ブロック・
炭化物・白色砂粒少量含む。



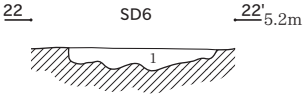
SD4（Cライン）
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
粘性・しまり強い。
φ1～3mmのオリーブ灰色シルトブロック多量、
炭化物少量含む。



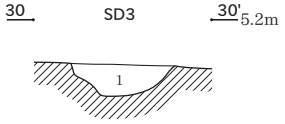
SD5
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土　粘性・しまり強い。
オリーブ灰色シルトがマーブル状に混入する。



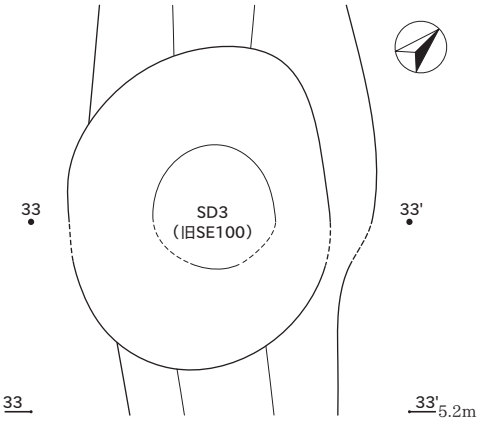
SD6（Aライン）
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土　粘性・しまり強い。
φ10mmのオリーブ灰色シルトブロック少量、
φ1mmの炭化物微量含む。

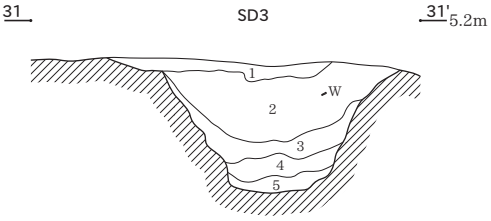


SD6（Bライン）
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土　粘性・しまり強い。
φ5～50mmのオリーブ灰色シルトブロック多量含む。

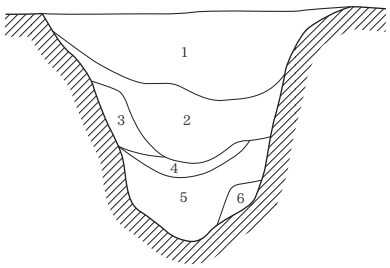


SD3（Cライン）
1　黒褐色（2.5Y3/2）粘質土
粘性やや強く、しまり強い。
φ1～5mmの炭化物微量、
白色砂粒少量含む。

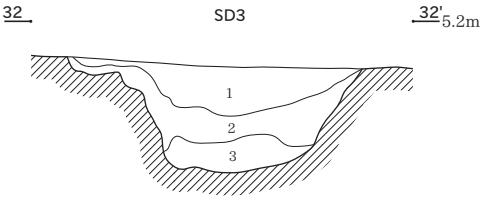




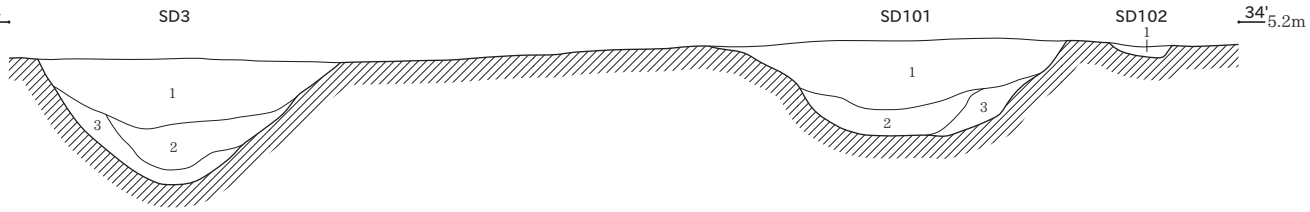
SD3（Bライン）
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性強く、しまり弱い。
φ1mmの炭化物、白色砂粒少量含む。
壁際はオリーブ灰色シルトブロック多量含む。
褐鉄鉱を多く含み、色調は赤味を帯びる。
2　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性強く、しまりやや弱い。
φ3mmの炭化物少量含む。褐鉄鉱を多く含み、赤味帯びる。
1層よりしまり弱い。
3　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土　粘性強く、しまり弱い。
壁際にφ1cmのオリーブ灰色シルトブロック少量含む。
4　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土　粘性強く、しまり弱い。
φ5～10mmのオリーブ灰色シルトブロック多量含む。
覆土中、最もしまりが弱い。
5　暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）シルト　粘性・しまり弱い。
褐灰色粘質土ブロック多量含む。



SD3（Dライン、旧SE100）
1　灰褐色（7.5YR4/2）粘質土　粘性・しまり強い。
粗砂少量含む。
2　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性・しまり強い。
φ1～3mmの炭化物少量含む。
3　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性・しまり弱い。
灰白色粘質土、粗砂多量含む。
4　黒褐色（2.5Y3/2）粘質土　粘性・しまりやや強い。
φ1～3mmの炭化物少量含む。
5　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土　粘性・しまり弱い。
φ1～3mmの炭化物、
φ5～10mmのオリーブ灰色シルトブロック少量含む。
6　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性・しまり弱い。
オリーブ灰色シルトブロック多量含む。



SD3（Aライン）
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・しまり強い。
φ1～5mmの炭化物少量含む。褐鉄鉱を多量に含み、
赤味帯びる。下部ほどしまり弱い。
2　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性弱く、しまりやや弱い。
φ5～30mmのオリーブ灰色シルトブロック多量含む。
3　黒褐色（10YR3/2）粘質土　粘性強く、しまり弱い。
オリーブ灰色シルト・砂質土ブロック少量含む。

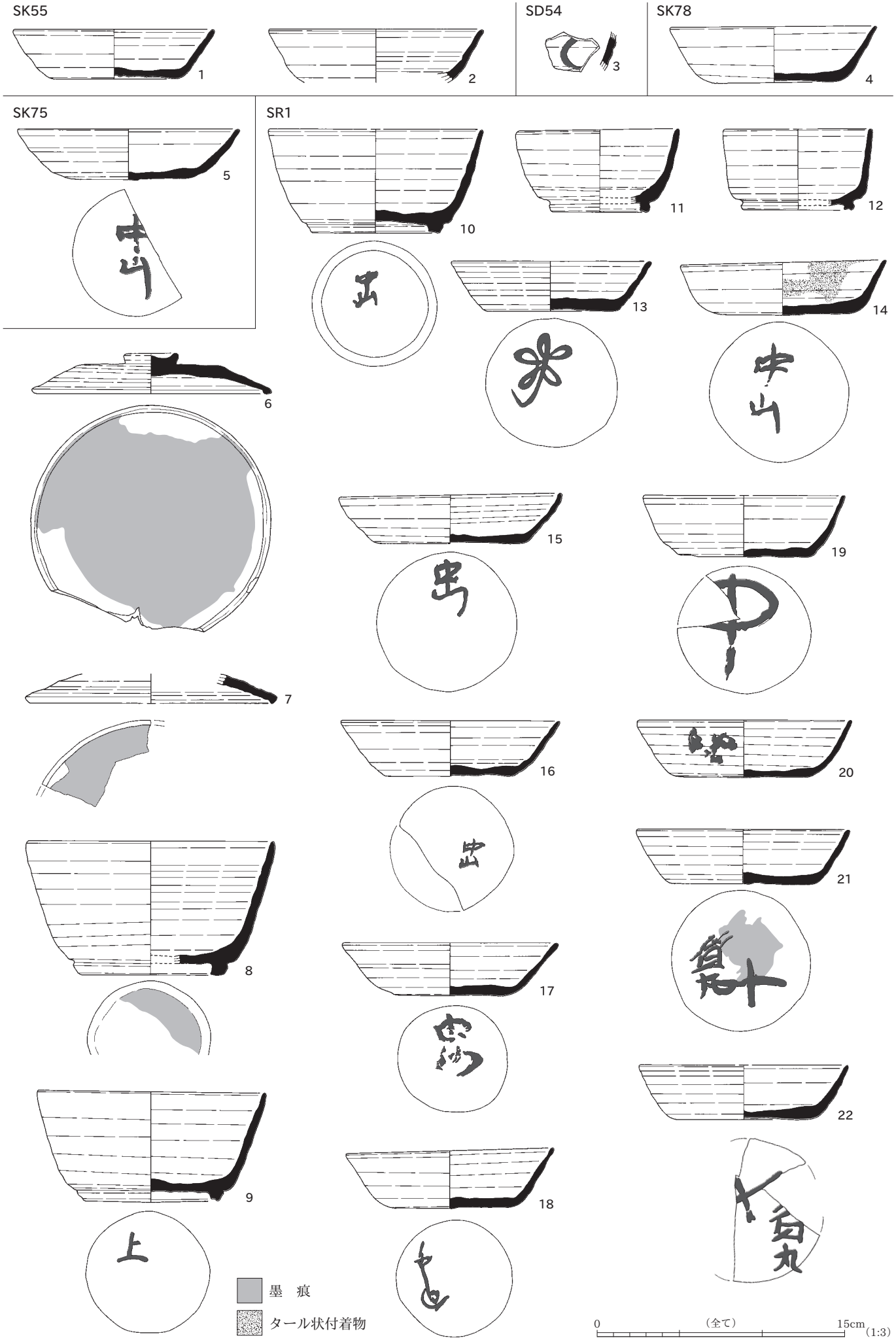


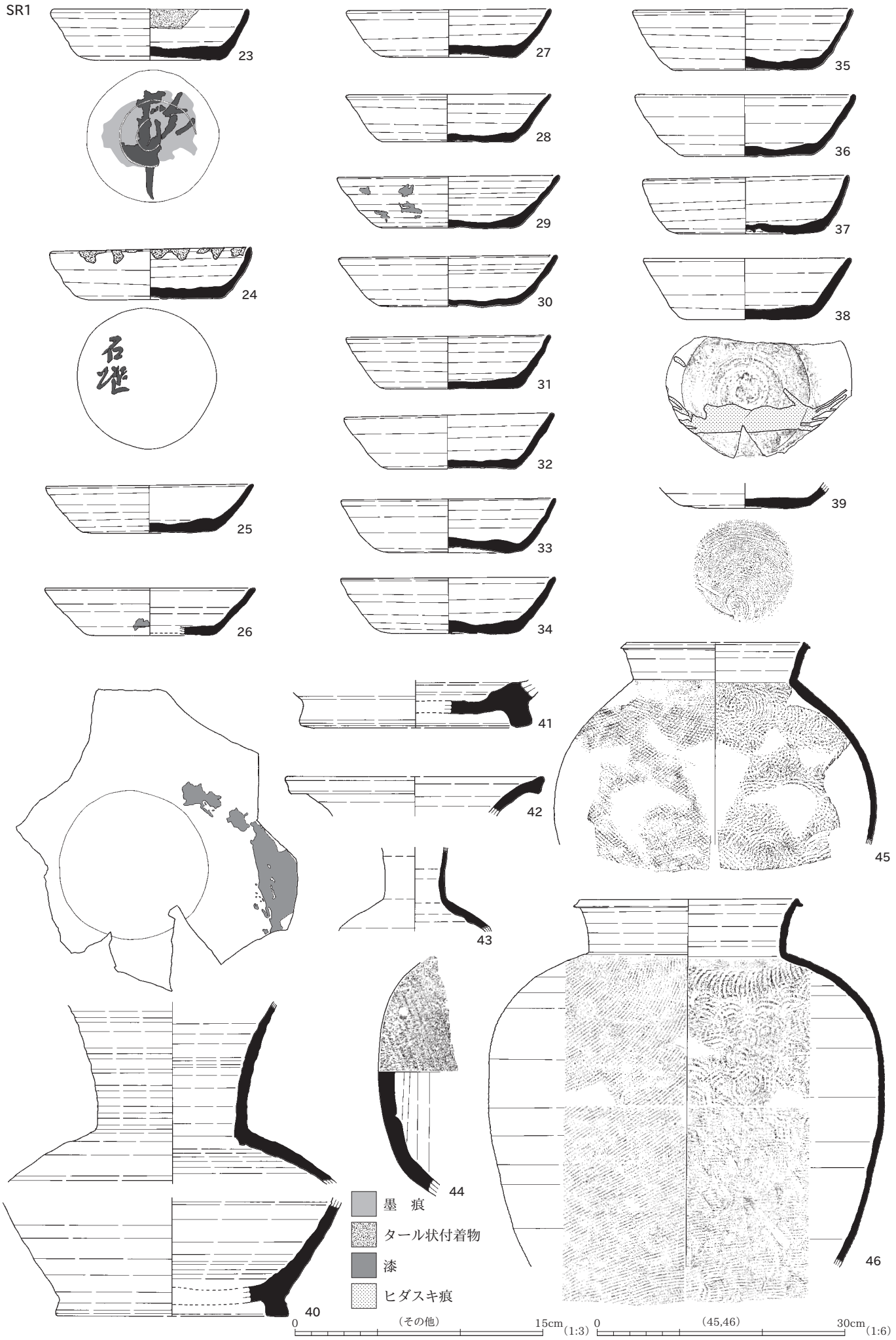
SD3（Eライン）
1　灰褐色（7.5YR4/2）粘質土　粘性・しまり強い。
下部（2層の上面）に多量の炭化物が面的に堆積する。
2　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性・しまり強い。
φ1～3mmの炭化物少量含む。
3　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性やや強く、しまり弱い。
φ1～5cmのオリーブ灰色シルトブロック多量含む。

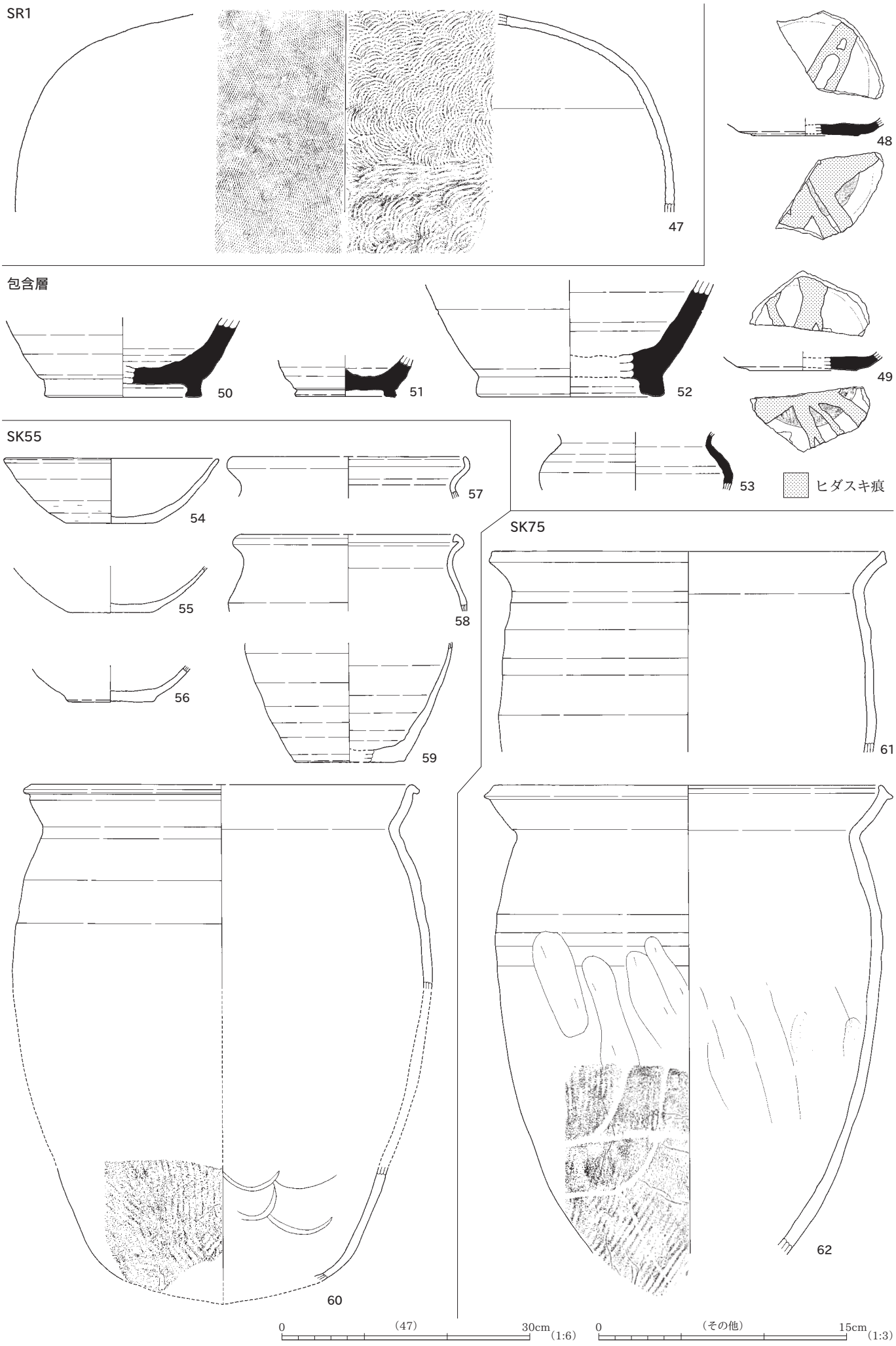
SD101
1　灰褐色（7.5YR4/2）粘質土　粘性・しまり強い。
φ1～10mmの炭化物、オリーブ灰色シルトブロック少量含む。
褐鉄鉱が目立つ。
2　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性・しまり強い。
φ10mmのオリーブ灰色シルトブロック少量含む。
3　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性やや強く、しまり弱い。
φ1～3cmのオリーブ灰色シルトブロック多量、黒褐色粘質土ブロック少量含む。

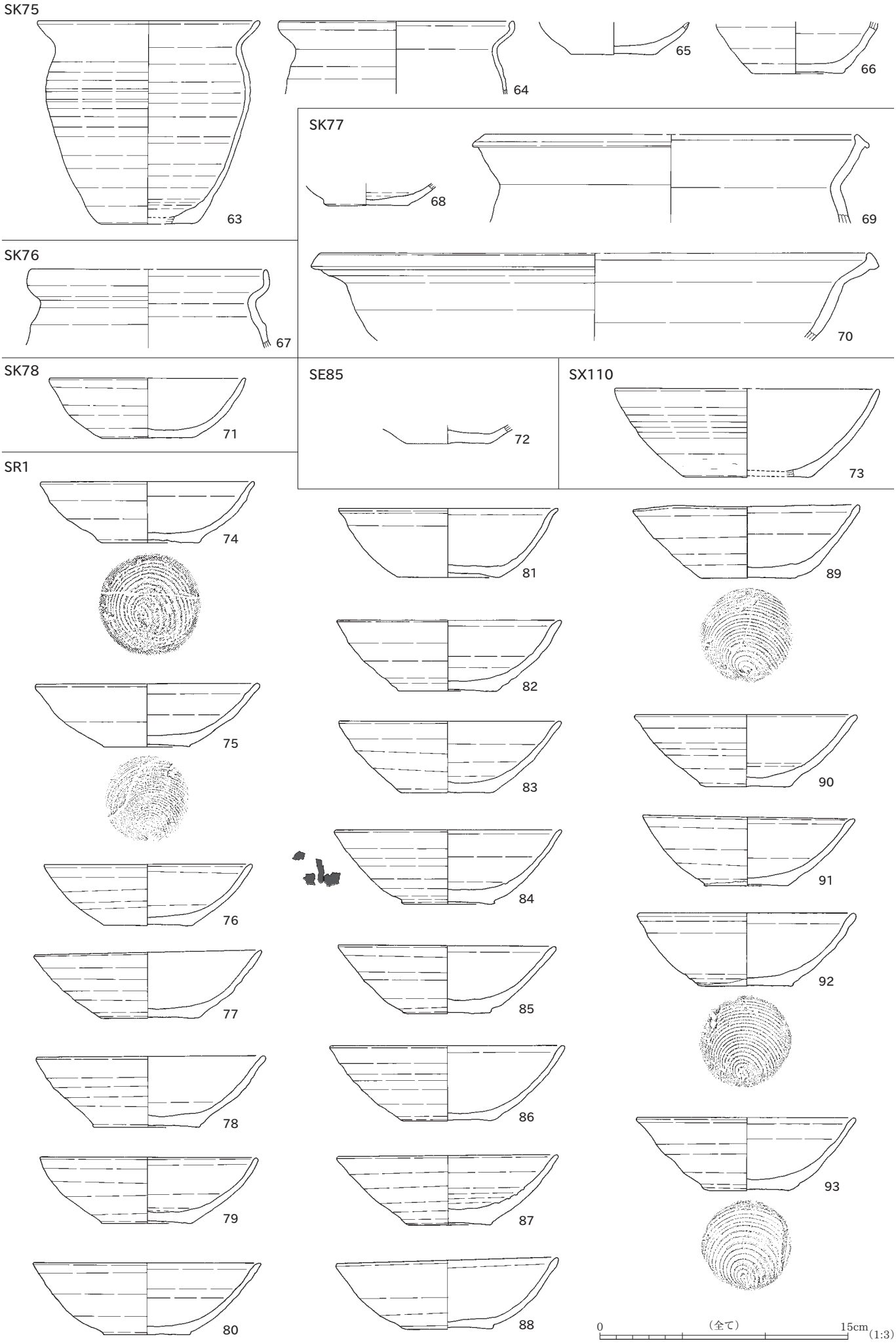
SD102
1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性弱く、しまり強い。
φ1～3cmの黒褐色粘質土ブロック、
オリーブ灰色シルトブロック多量含む。

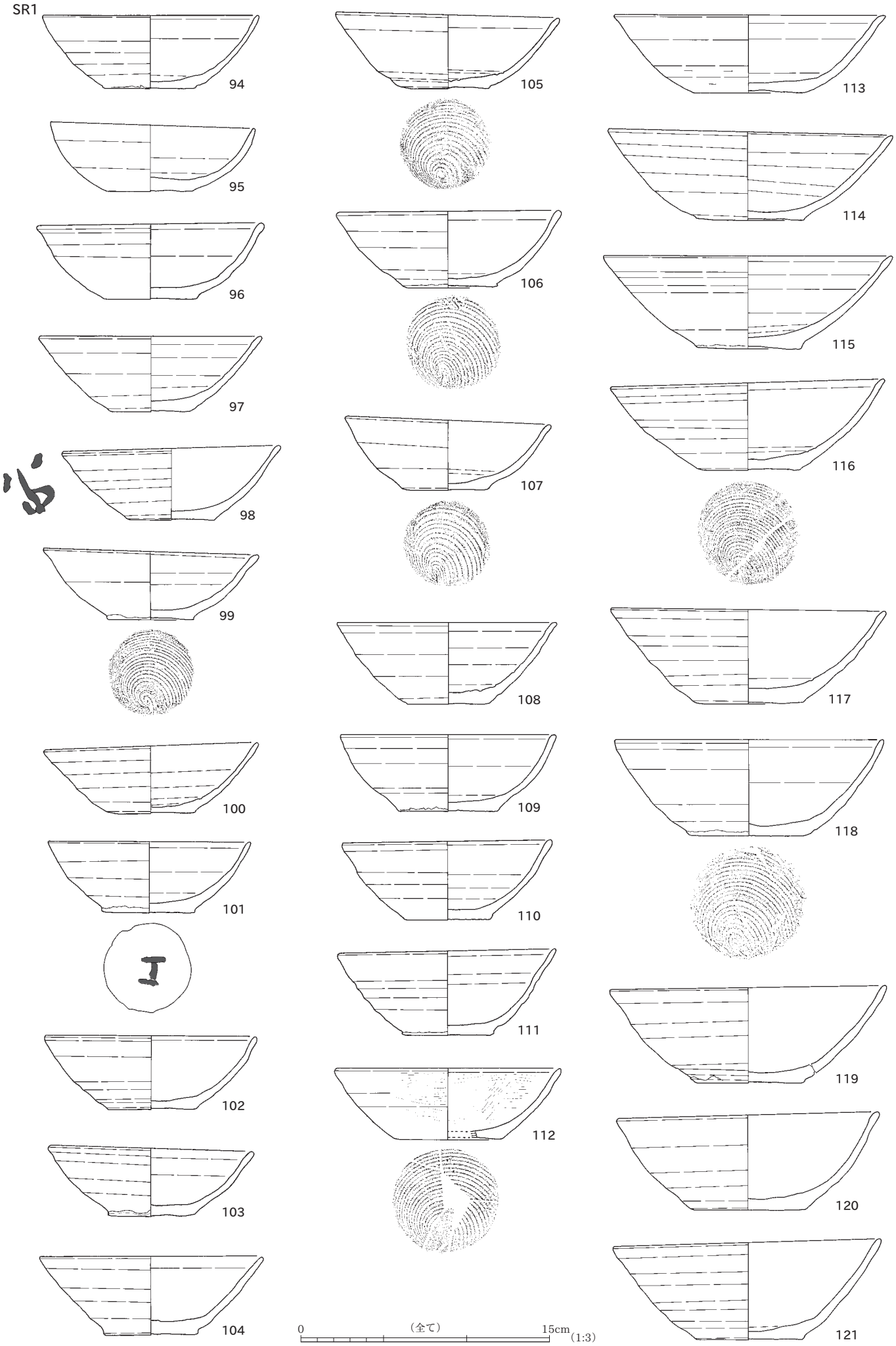
0　（1：40）　2m


SK55
SD54
SK78
SK75
SR1
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
墨　痕
タール状付着物
0
（全て）
15cm
(1:3)

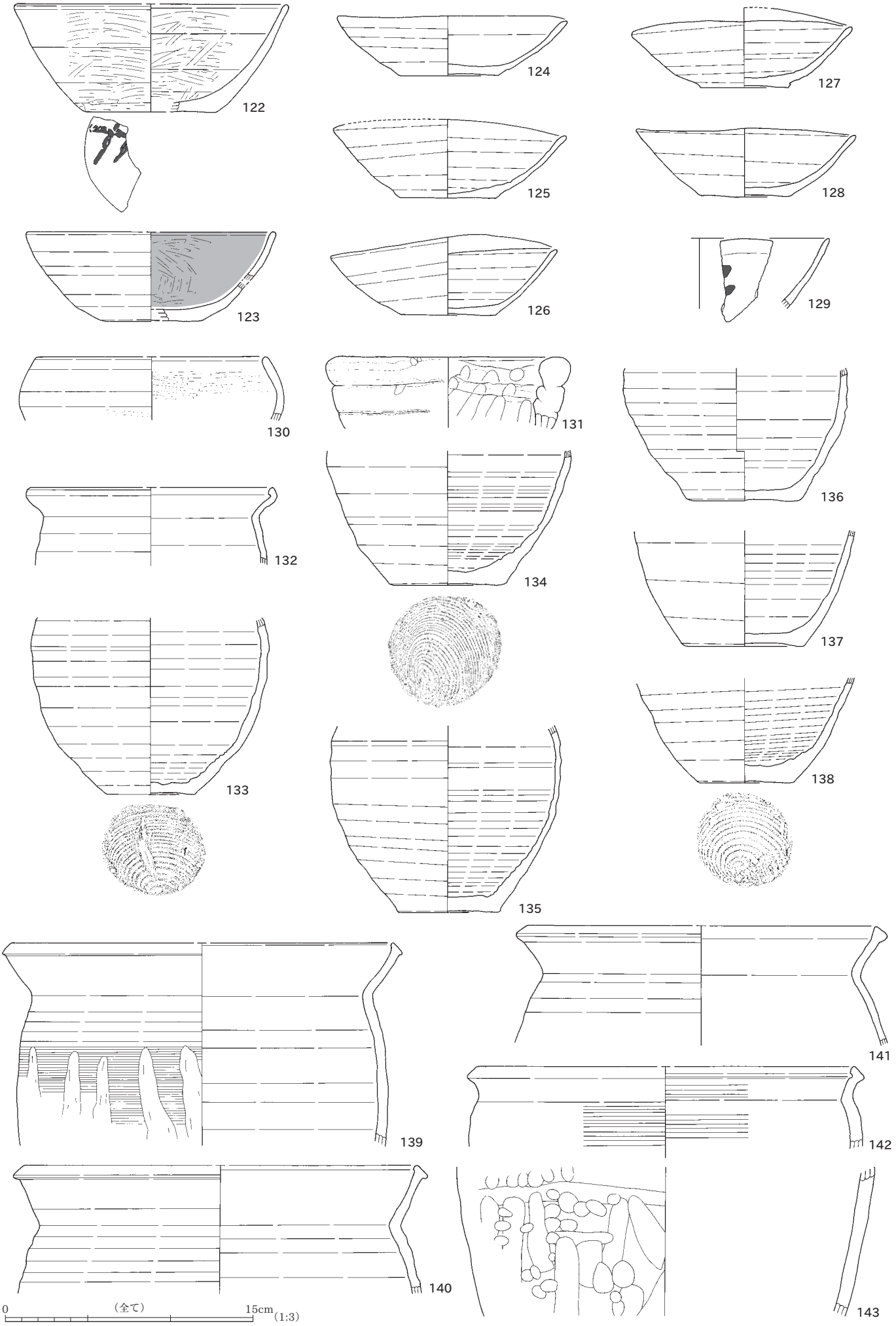

SR1
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
墨　痕
タール状付着物
漆
ヒダスキ痕
0
15cm
（その他）
(1:3)
0
30cm
(45,46)
(1:6)

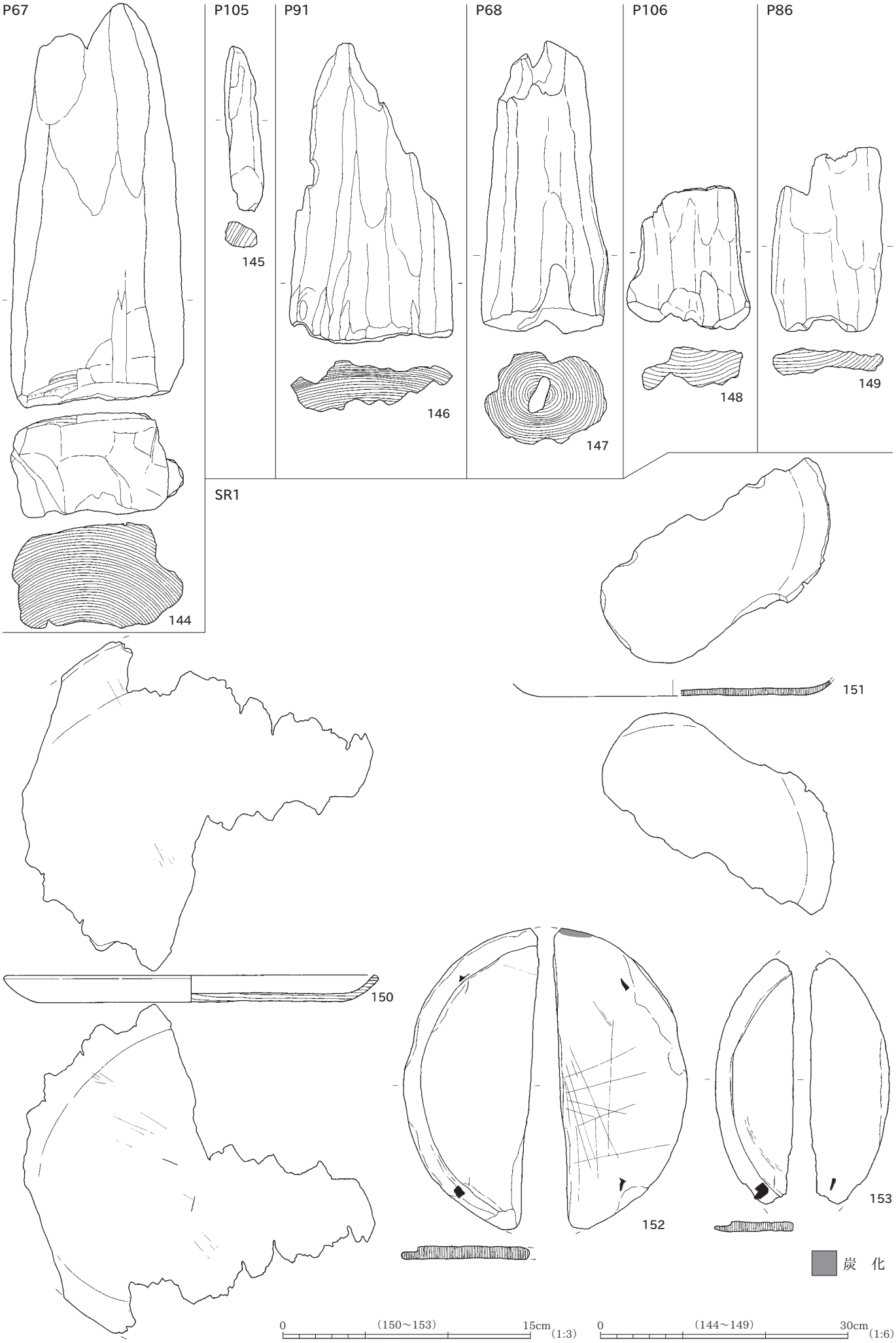

SR1
47
48
包含層
50
51
52
49
SK55
53
ヒダスキ痕
54
57
55
58
56
59
SK75
61
60
62
0
(47)
30cm
(1:6)
0
(その他)
15cm
(1:3)

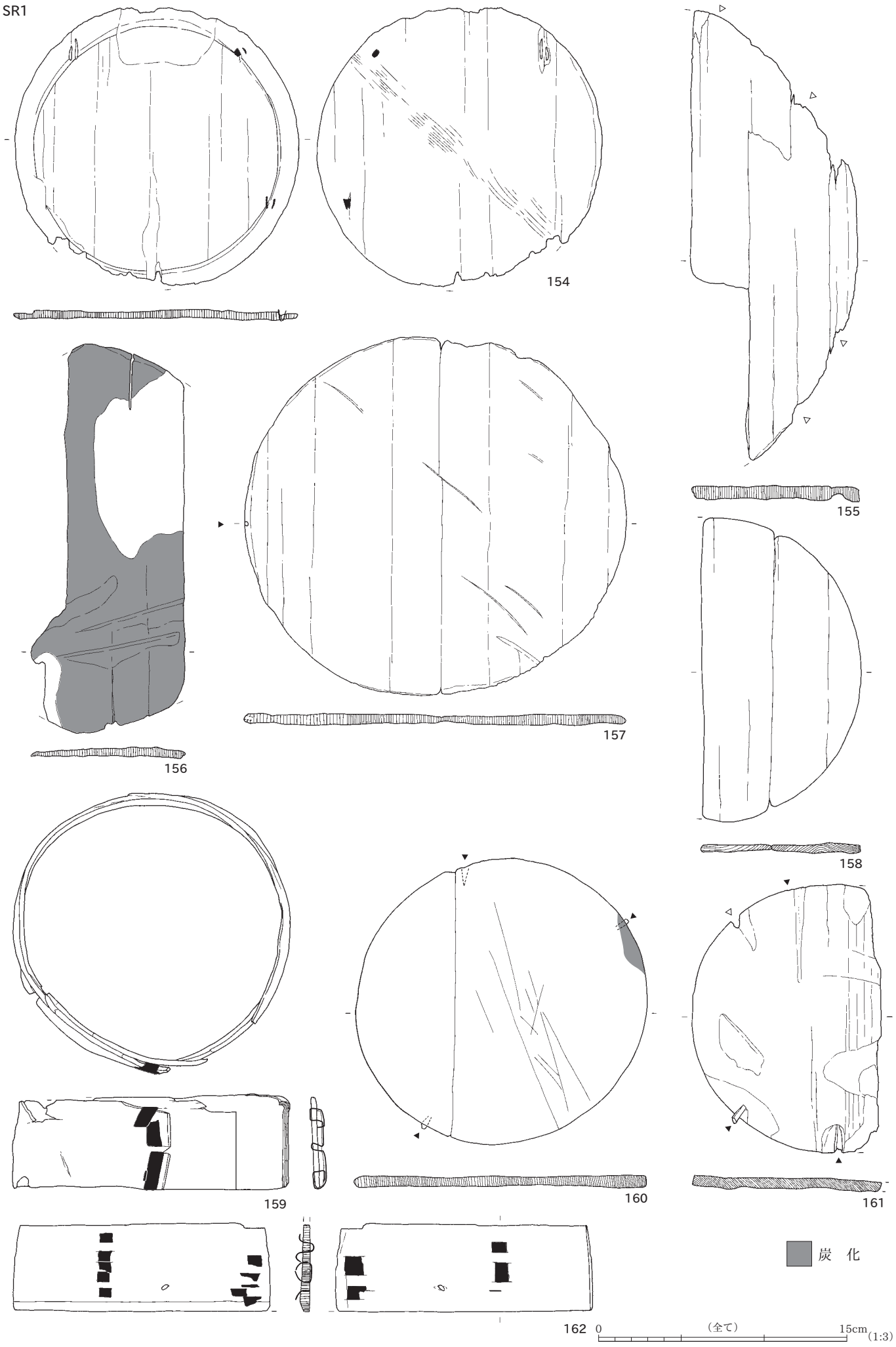

SK75
63
64
65
66
SK77
68
69
70
SK76
67
SK78
71
SE85
72
SX110
73
SR1
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
0
（全て）
15cm
(1:3)

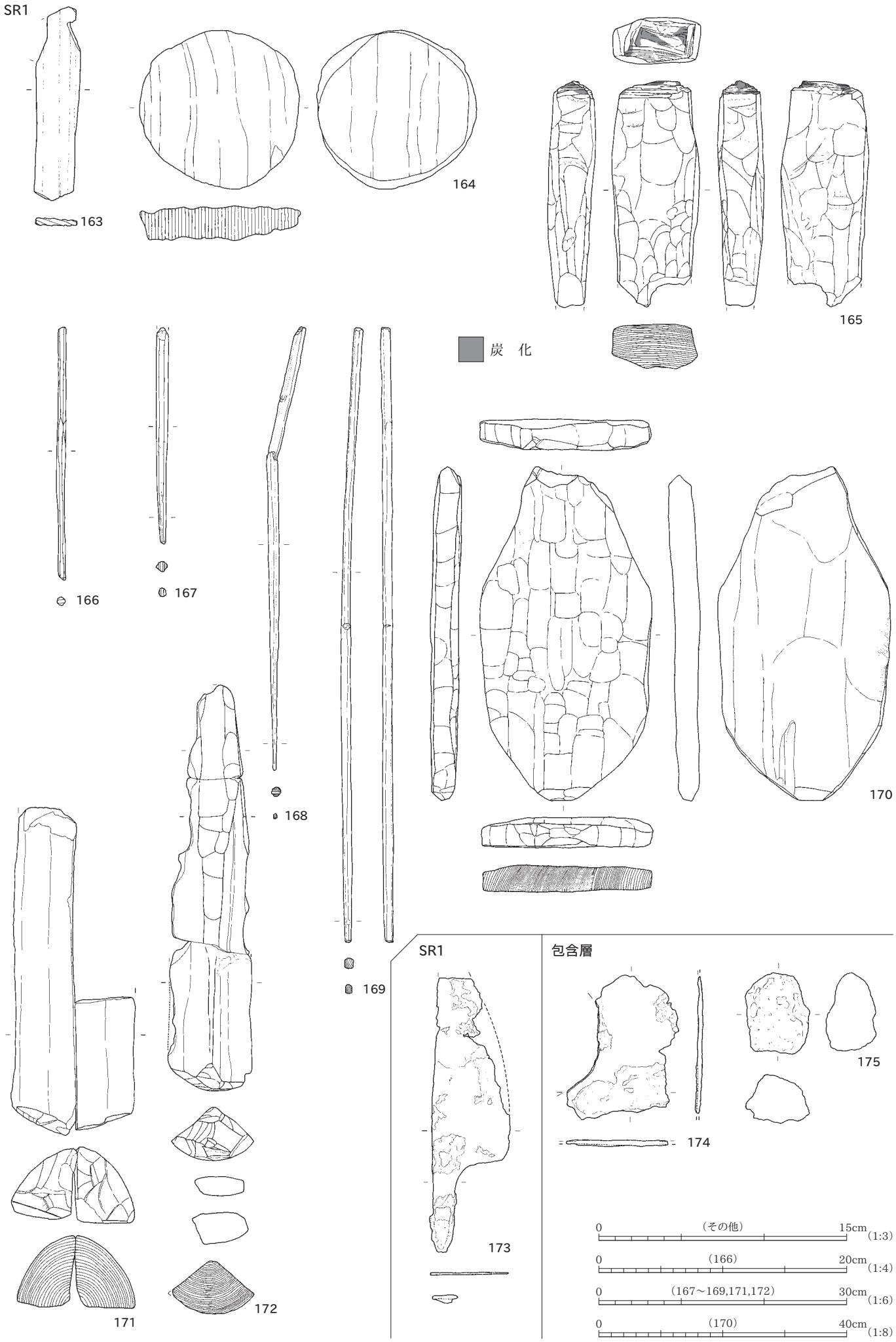

SR1
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
0
（全て）
15cm
(1:3)

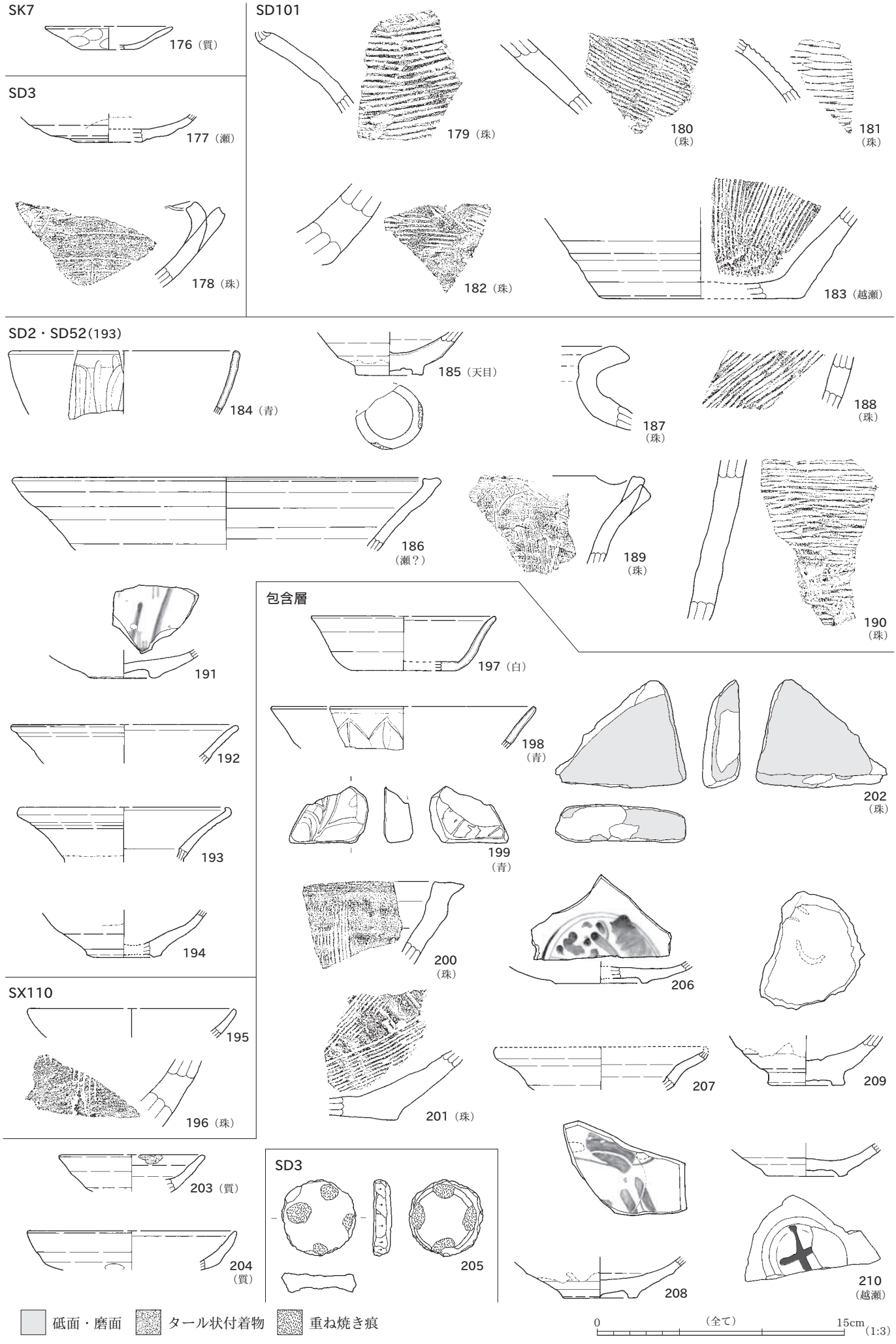
SR1

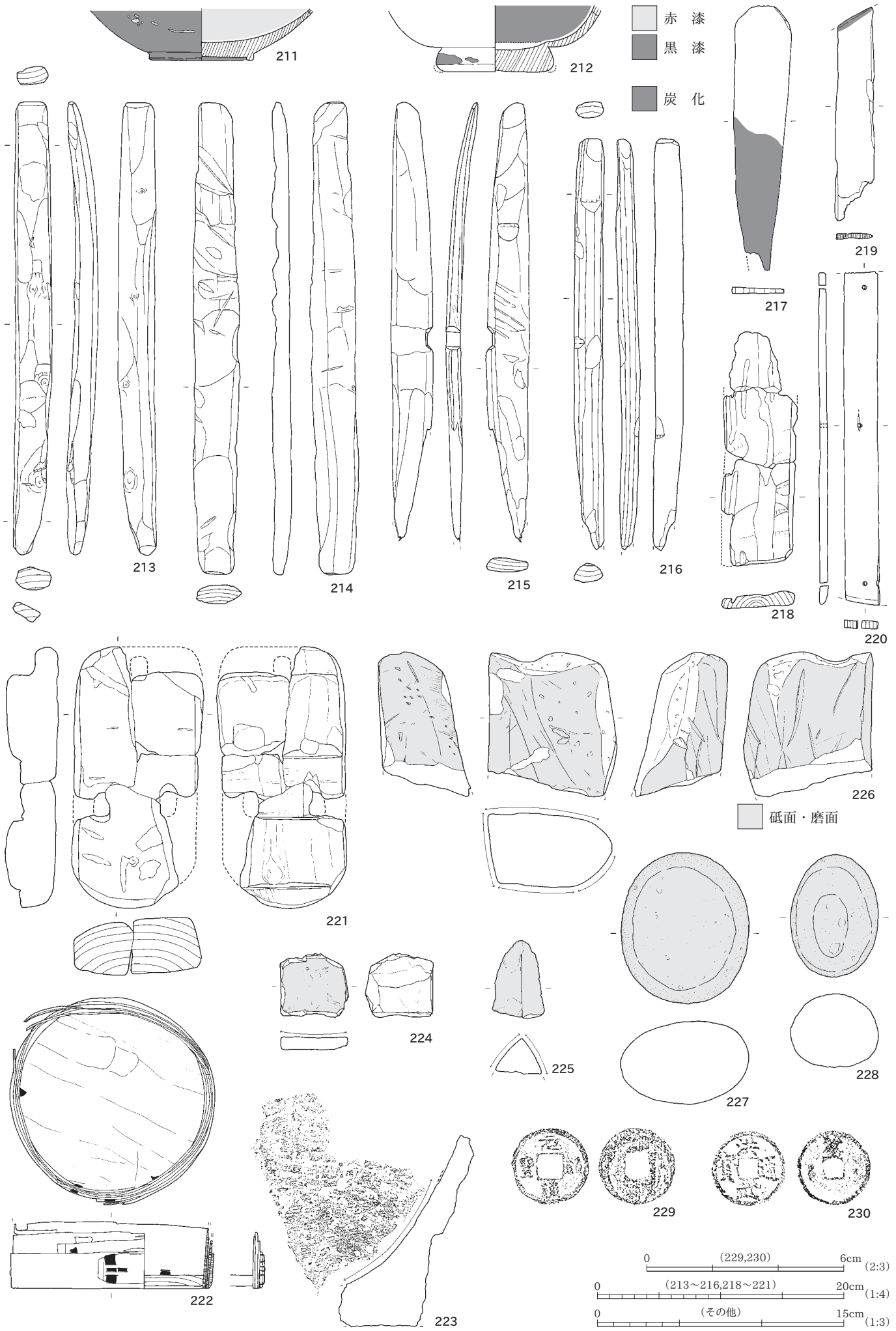

122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
0
（全て）
15cm
(1:3)


P67
P105
P91
P68
P106
P86
SR1
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
炭 化
0
(150～153)
15cm
(1:3)
0
(144～149)
30cm
(1:6)


SR1
154
155
156
157
158
159
160
161
162
炭　化
0
15cm
（全て）
(1:3)


SR1
163
164
165
炭　化
166
167
168
169
170
171
172
SR1
173
包含層
174
175
0 （その他） 15cm (1:3)
0 （166） 20cm (1:4)
0 （167～169,171,172） 30cm (1:6)
0 （170） 40cm (1:8)


SK7
176（質）
SD3
177（瀬）
178（珠）
SD101
179（珠）
180（珠）
181（珠）
182（珠）
183（越瀬）
SD2・SD52(193)
184（青）
185（天目）
187（珠）
188（珠）
186（瀬？）
189（珠）
190（珠）
191
192
193
194
SX110
195
196（珠）
203（質）
204（質）
包含層
197（白）
198（青）
199（青）
200（珠）
201（珠）
202（珠）
206
207
209
SD3
205
208
210（越瀬）
砥面・磨面
タール状付着物
重ね焼き痕
0
（全て）
15cm
(1:3)


211
212
赤　漆
黒　漆
炭　化
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
砥面・磨面
0 (229,230) 6cm (2:3)
0 (213～216,218～221) 20cm (1:4)
0 (その他) 15cm (1:3)

柏崎バイパスの路線と山崎遺跡の位置　　1947 年 11 月 11 日　米軍撮影（1：25,000）

北区　完掘（南東から）

12D13・14 区　基本層序（西から）

SR1 蛇行部　完掘（南西から）

7－7'（SR1　F ライン）断面（南東から）

SR1　13E5・10 区　遺物出土状況（南西から）

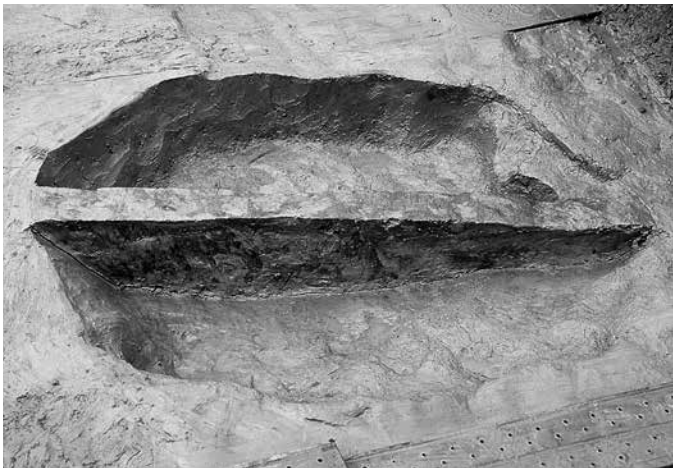
34－35'（SD3・101・102）断面（南西から）

SD3　炭化層検出状況（南東から）

山崎遺跡　遠景（北から）

冬期作業風景（南西から）

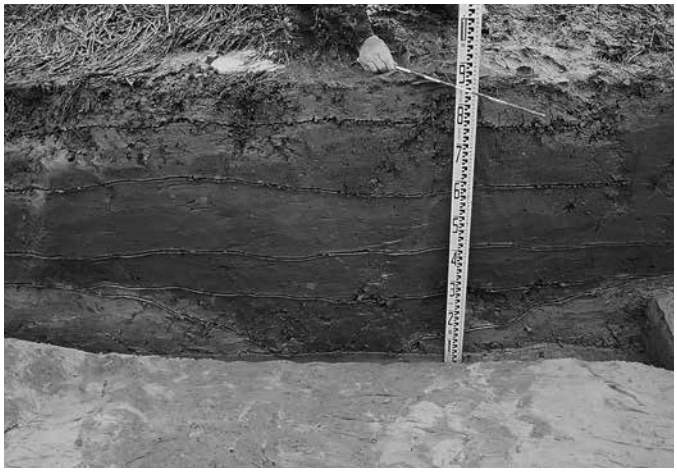
北区北側　完掘（北から）



SK108　完掘（東から）

SX110　A 断面（西から）

SX110　B 断面（北から）

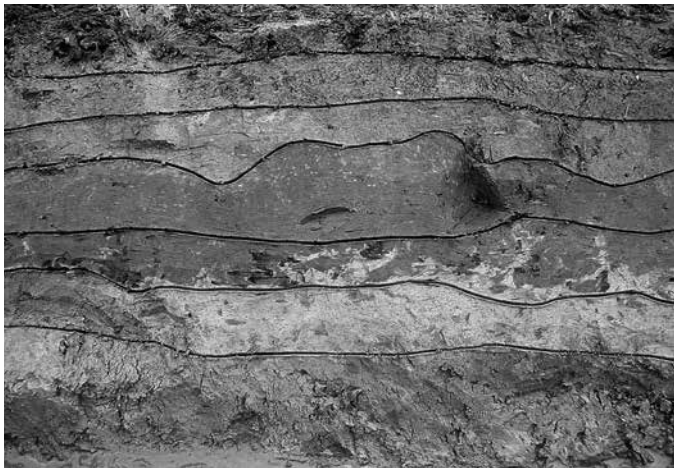


SD109　断面（東から）

SR1　完掘（南東から）

農道両脇　調査状況（西から）

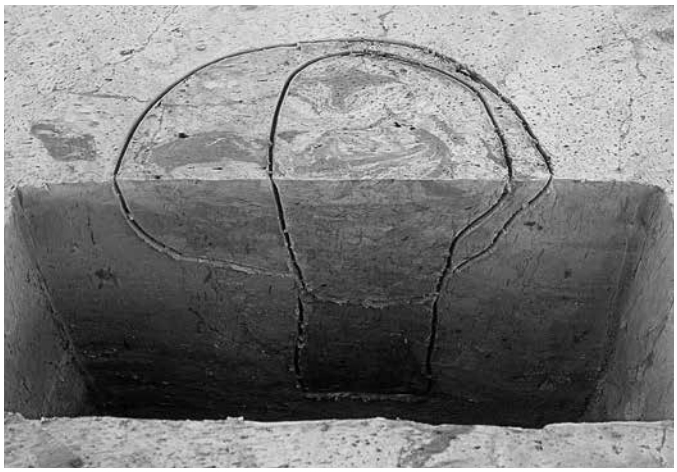
南区南端　完掘（東から）



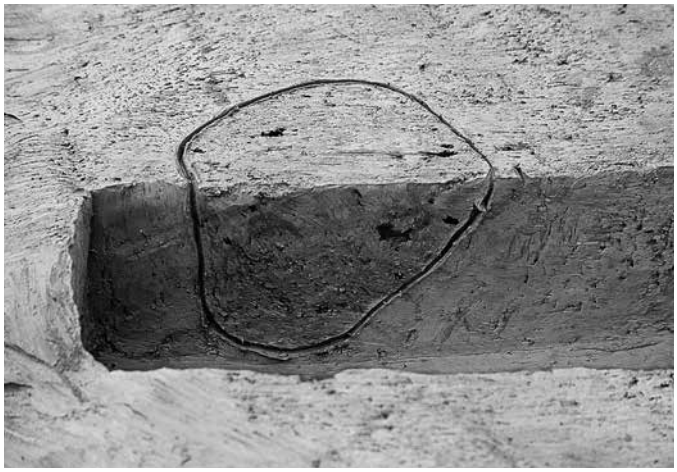
12I6 区　基本層序（東から）

17F4・5 区　基本層序（西から）

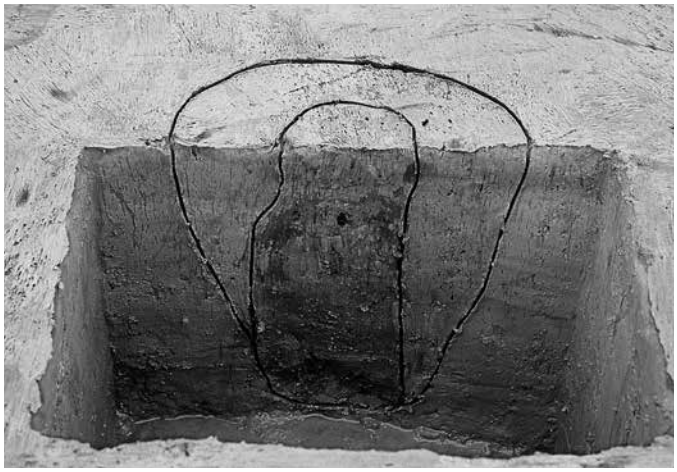
SB1・2　検出状況（南東から）



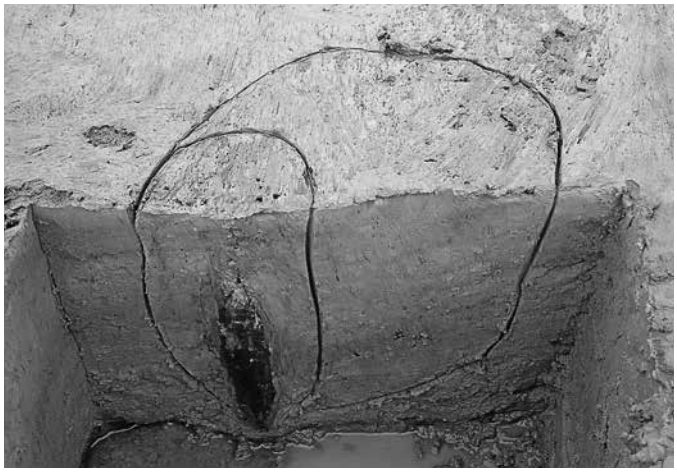
SB1-P56　断面（南西から）



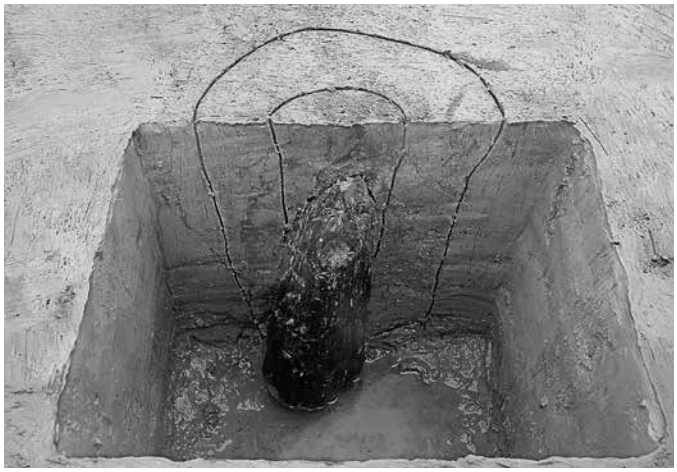
SB1-P57　断面（北西から）



SB1-P69　断面（西から）



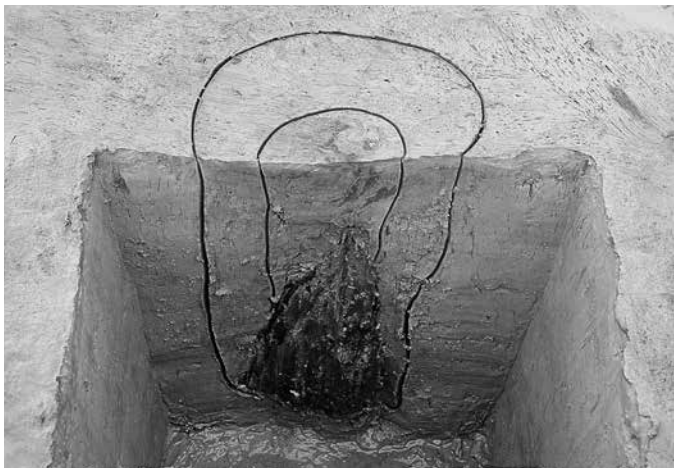
SB1-P105　断面（西から）



SB2-P68　断面（南から）

SB2-P86　断面（西から）

SB2-P86　柱根検出状況（西から）

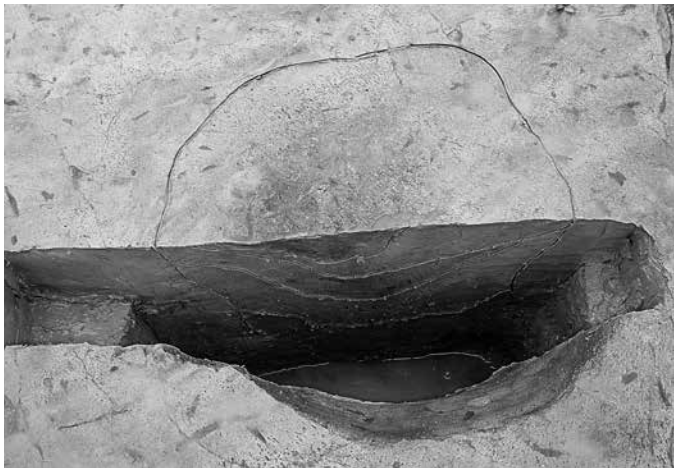


SB2-P91　断面（南から）

SB2-P106　断面（東から）

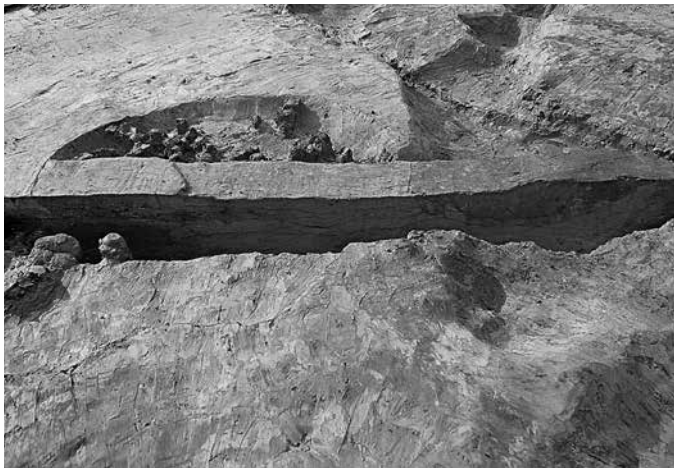
SK76　断面（南から）

SK76　完掘（南から）



SE85　断面（南から）

SE85　完掘（南から）



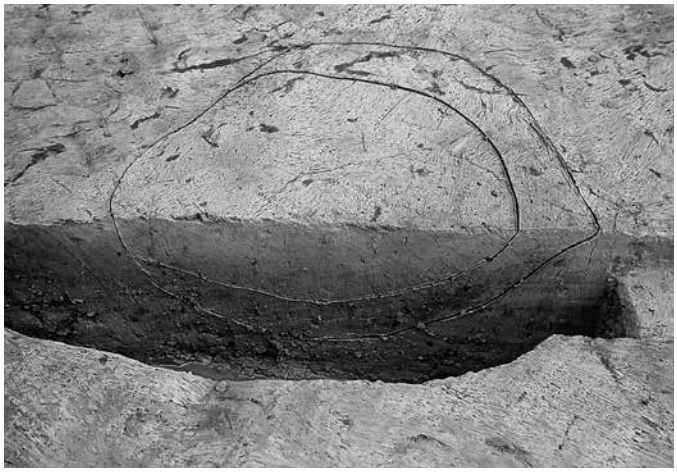
SD54・SK55　断面（北東から）

SK55　遺物出土状況（北東から）

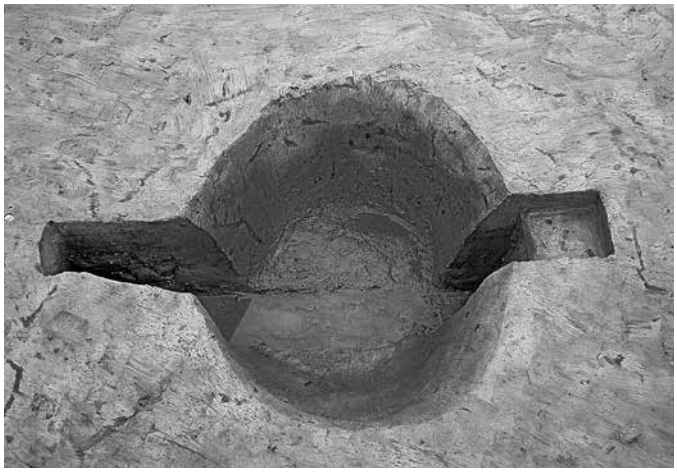
SK74・75　東西断面（南から）

SK75　南北断面（東から）

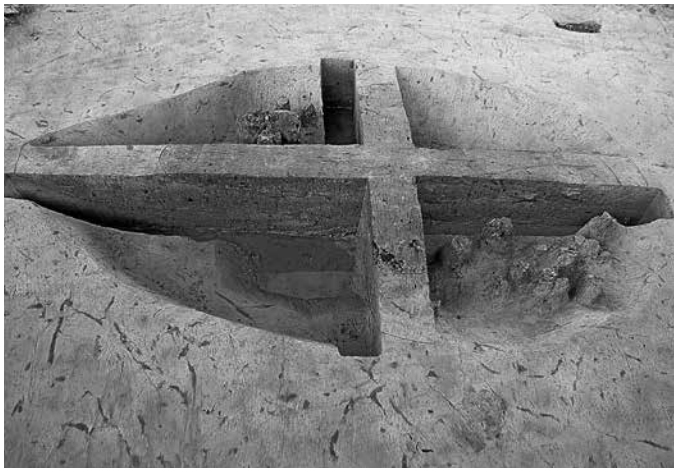
SK74・75　完掘（南から）



SK77　断面（西から）



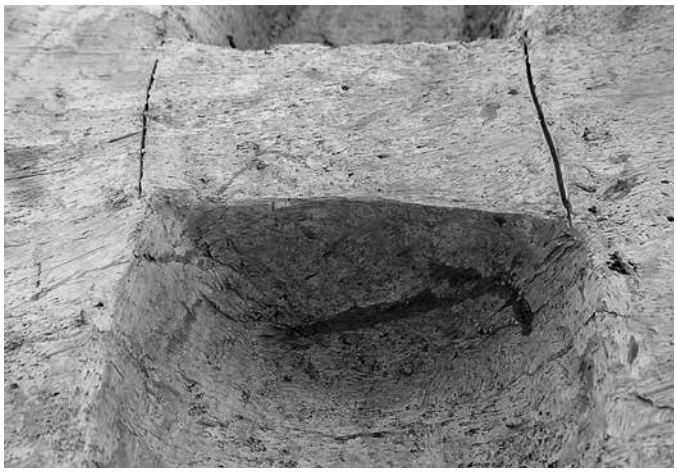
SK77　完掘（西から）



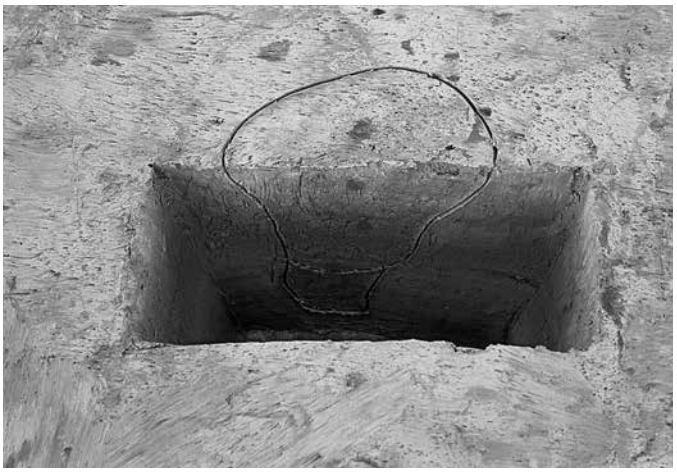
SK78　東西断面（南から）

SK78　南北断面（西から）

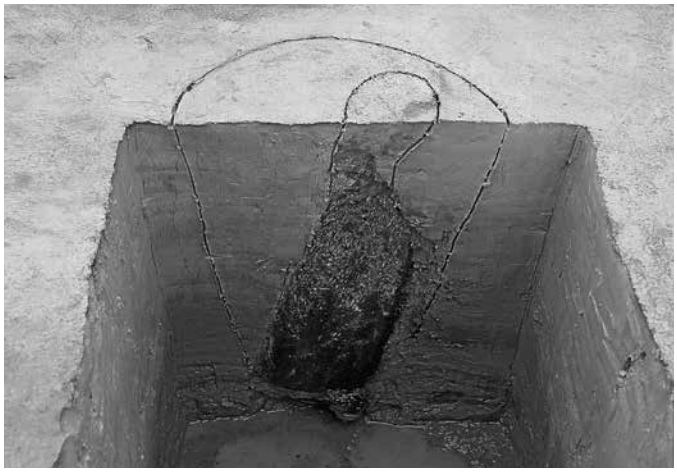
SK78　完掘（南から）



SD92　断面（西から）



P66　断面（南東から）



P67　断面（西から）

SR1　E 断面（南から）

SR1　F 断面（南東から）

SR1　G 断面（東から）

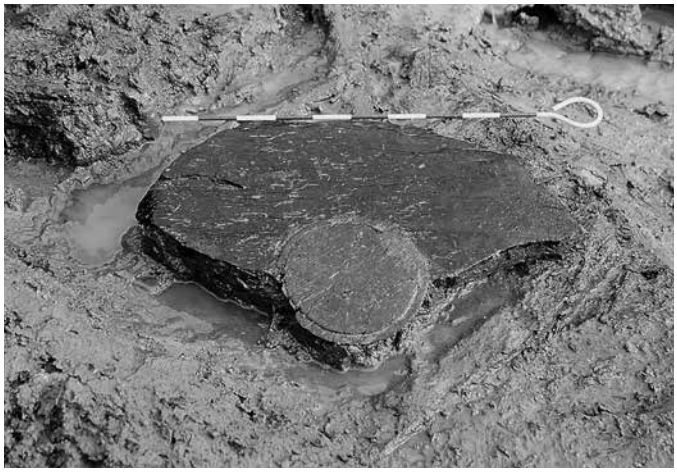
SR1　H 断面（東から）

SR1　13D25・13E5 区　遺物出土状況（南から）

SR1　13E5・10 区　遺物出土状況（南西から）

SR1　13E10 区　遺物出土状況（南から）

SR1　14E16 区　木製品出土状況（南から）



SR1　12G6 区　木製品出土状況（南から）

SD54　断面（西から）

SD2　A 断面（東から）

SD59・60　断面（南東から）

SD61・62　断面（南東から）

SD58 ～ 62　完掘状況（南から）

SK64　断面（東から）

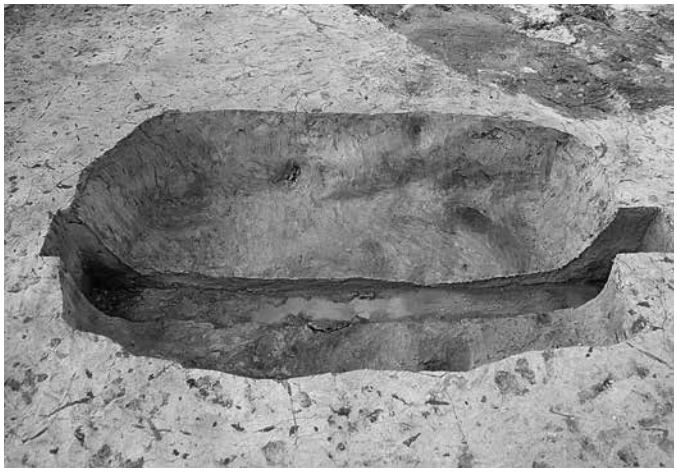
SK65　断面（南から）

SK93　断面（南から）

SK90　断面（南西から）

SK90　完掘（南西から）

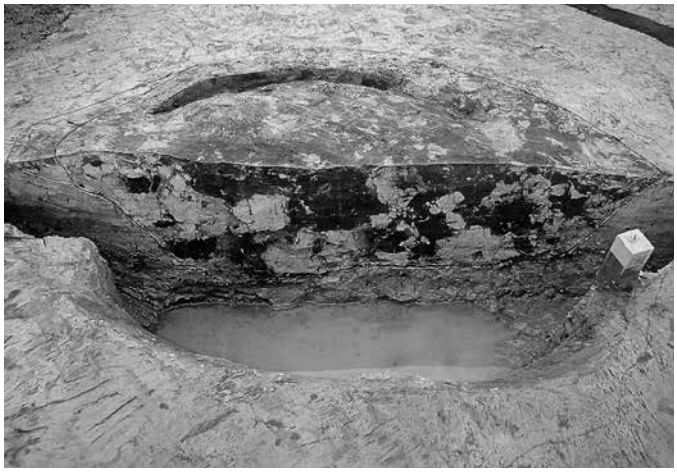
SK9　断面（南から）



SK9　完掘（東から）

SK10　断面（南から）

SK20　断面（東から）



SK95　断面（東から）

SK95　完掘（東から）

SD2・SD52 完掘（南東から）

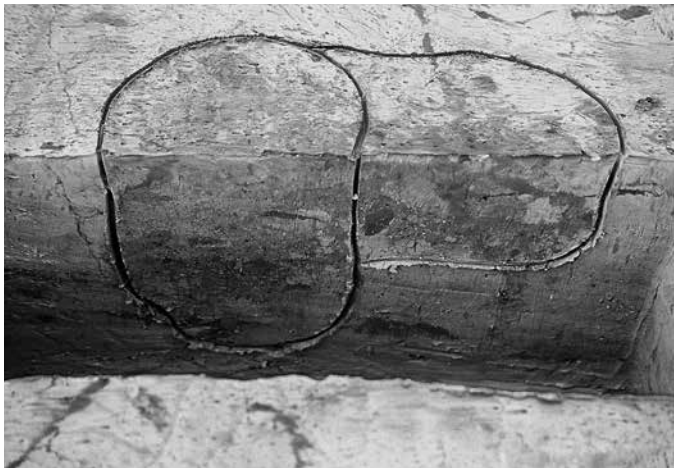
SD2　D 断面（南東から）

SD52　D 断面（南から）

SR1　B 断面（南東から）

SR1　C 断面（南東から）

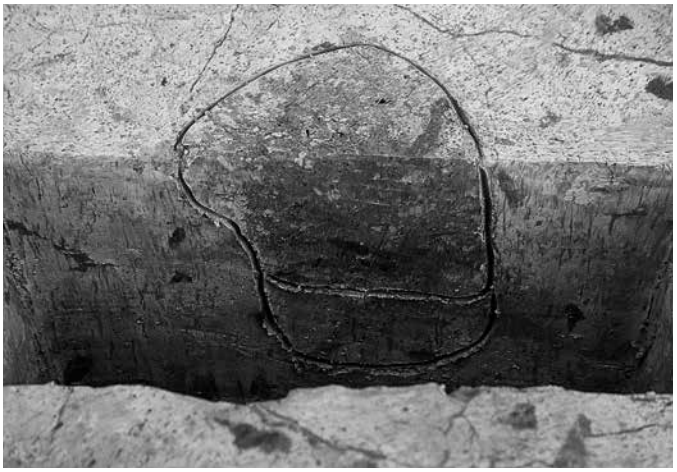
SR1　D 断面（西から）



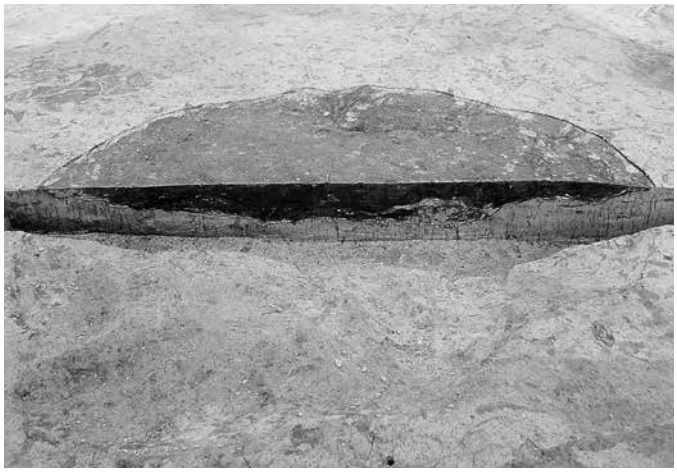
P17　断面（東から）

P24　断面（南東から）

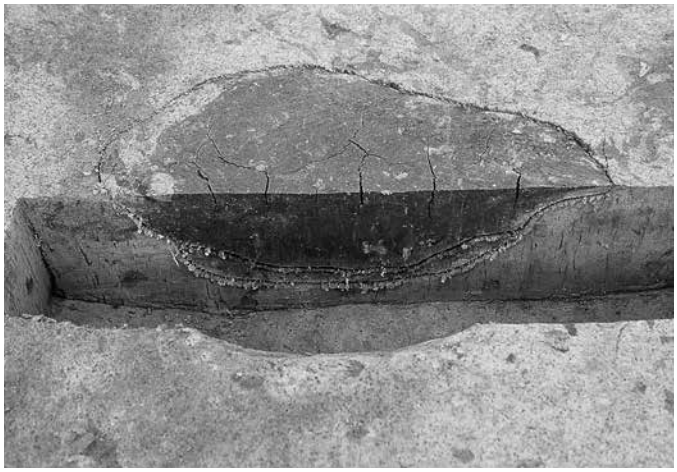
P32　断面（南から）



P41　断面（南から）



SK7　断面（南から）



P8　断面（南から）

SK96　断面（南東から）

SK97　断面（西から）

SD3　B 断面（東から）

SD3　A 断面（東から）

SD3　D 断面（北西から）

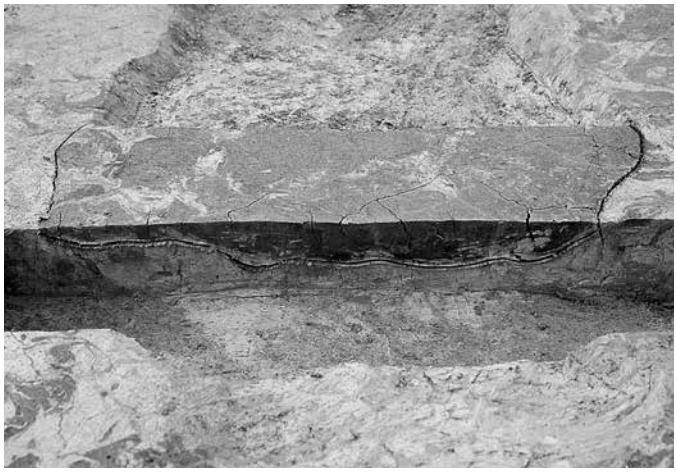
SD3　20E22 区　木製品出土状況（西から）

SD3　E 断面（南から）

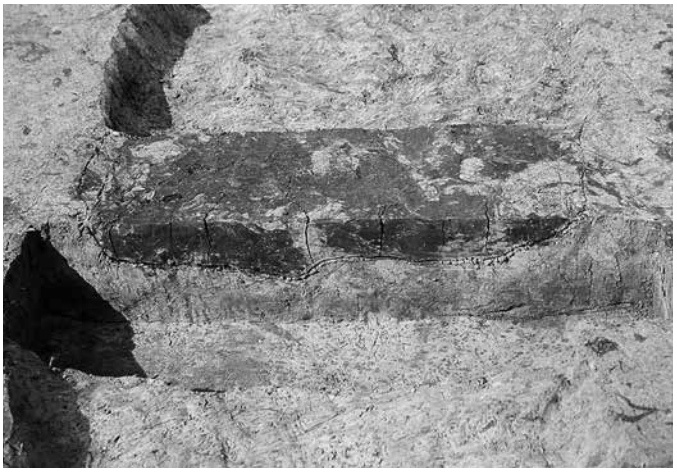
SD101　断面（南から）

SD4 ～ 6　完掘（南東から）

SD4　B 断面（東から）

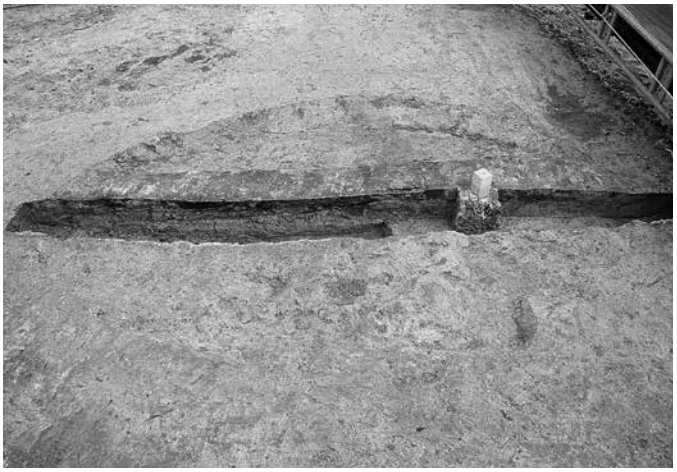


SD5　断面（東から）



SD6　A 断面（東から）

SX98　完掘（南から）



SX99　完掘（南から）

1

2

3

4

5

6

10

15

7

11

8

12

16

13

9

14

17

全て　〔1:3〕

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

29

28

30

31

32

33

34

全て　〔1:3〕

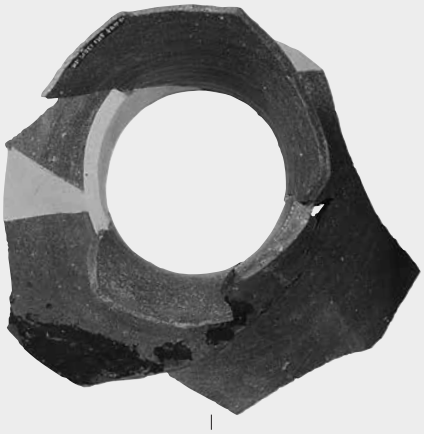
35

36

37

38

39



40a

40b

41

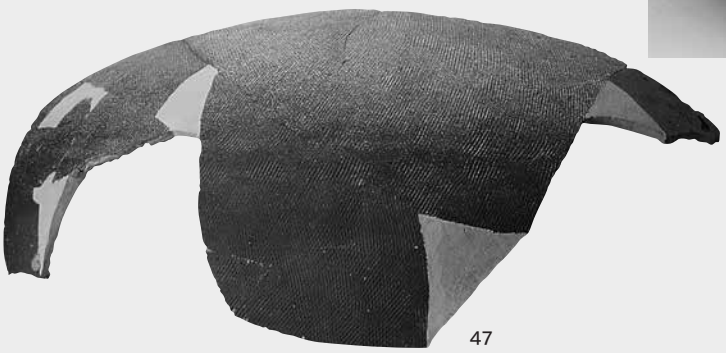
42

43

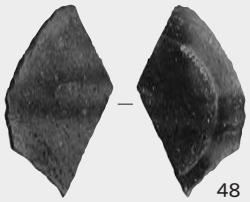
44

45

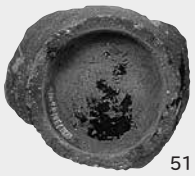
46


47

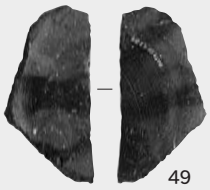
その他　〔1:3〕
45～47　〔1:6〕


48

50


51

52


49

53

60a

54

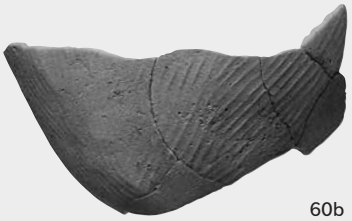
57

58

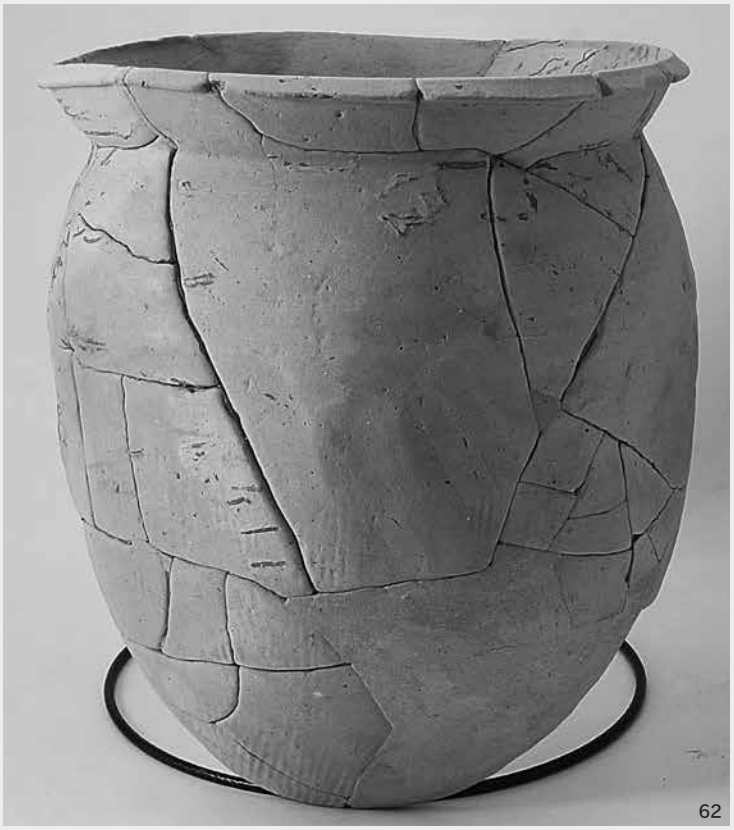
55

56

59


60b

61

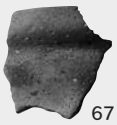

62

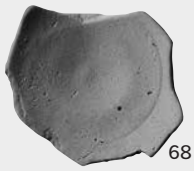
63

64

65

66


67


68

69

70

71

72

73

全て　〔1:3〕

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

93

94

95

96

全て　〔1:3〕

97

98

99

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

全て　〔1:3〕

116

117

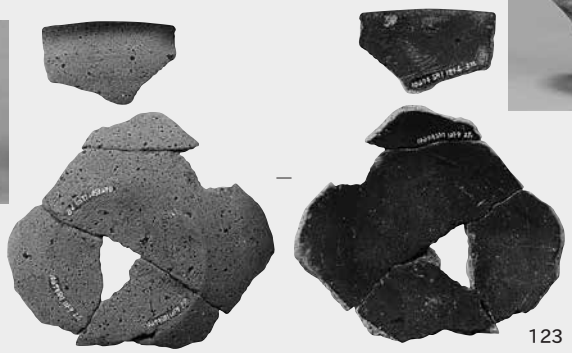
118

119

120

121

122


123

131

132

133

124

125

126

127

128

129

130

134

135

全て　〔1:3〕

136

137

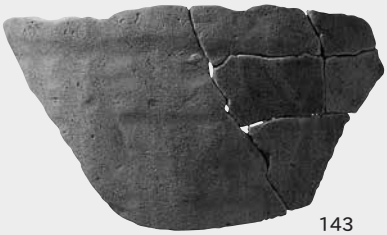
138

139

140

142

141


143

144

145

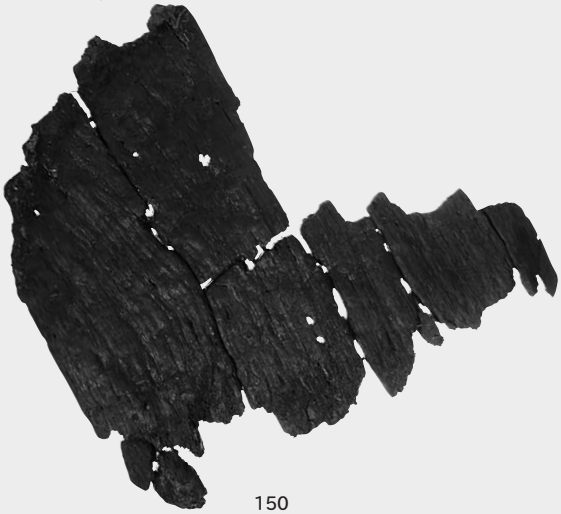
146

147

その他　〔1:3〕
144～149　〔1:6〕

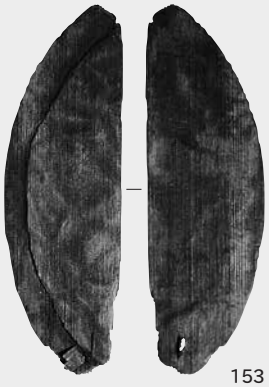
148

149


150

151

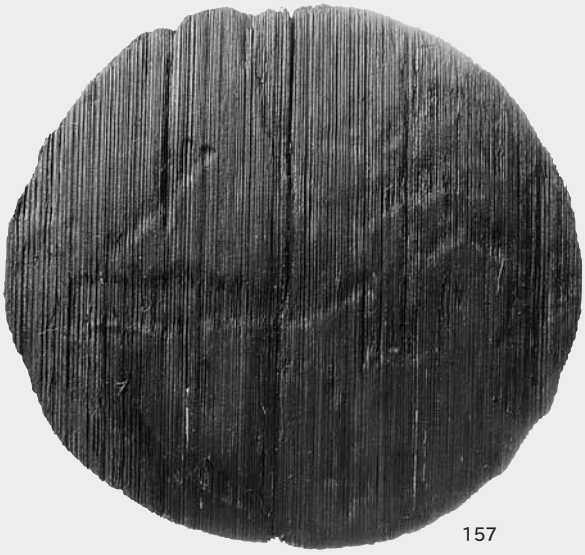
152

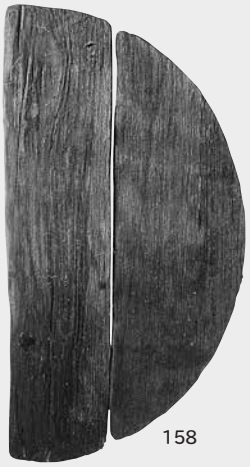

153

155

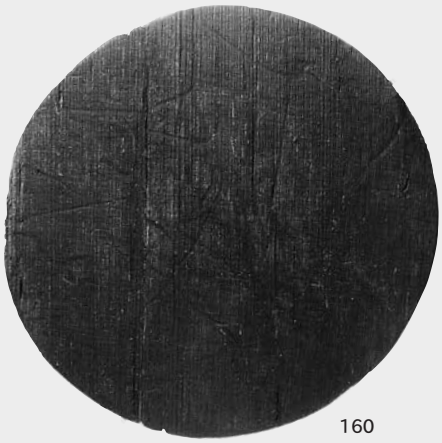
156

154

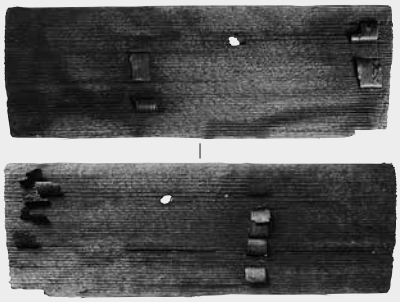

157


158

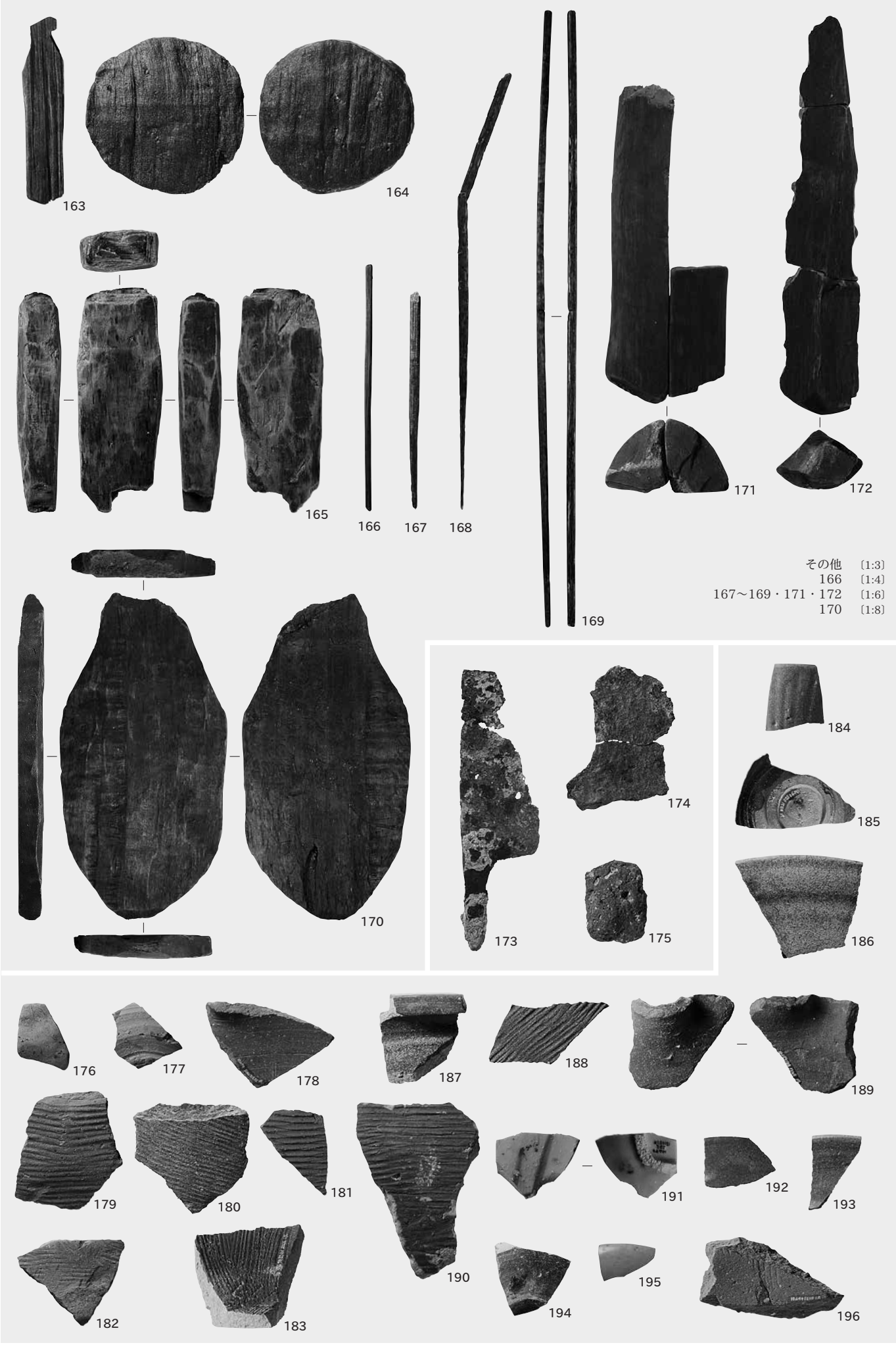
159


160

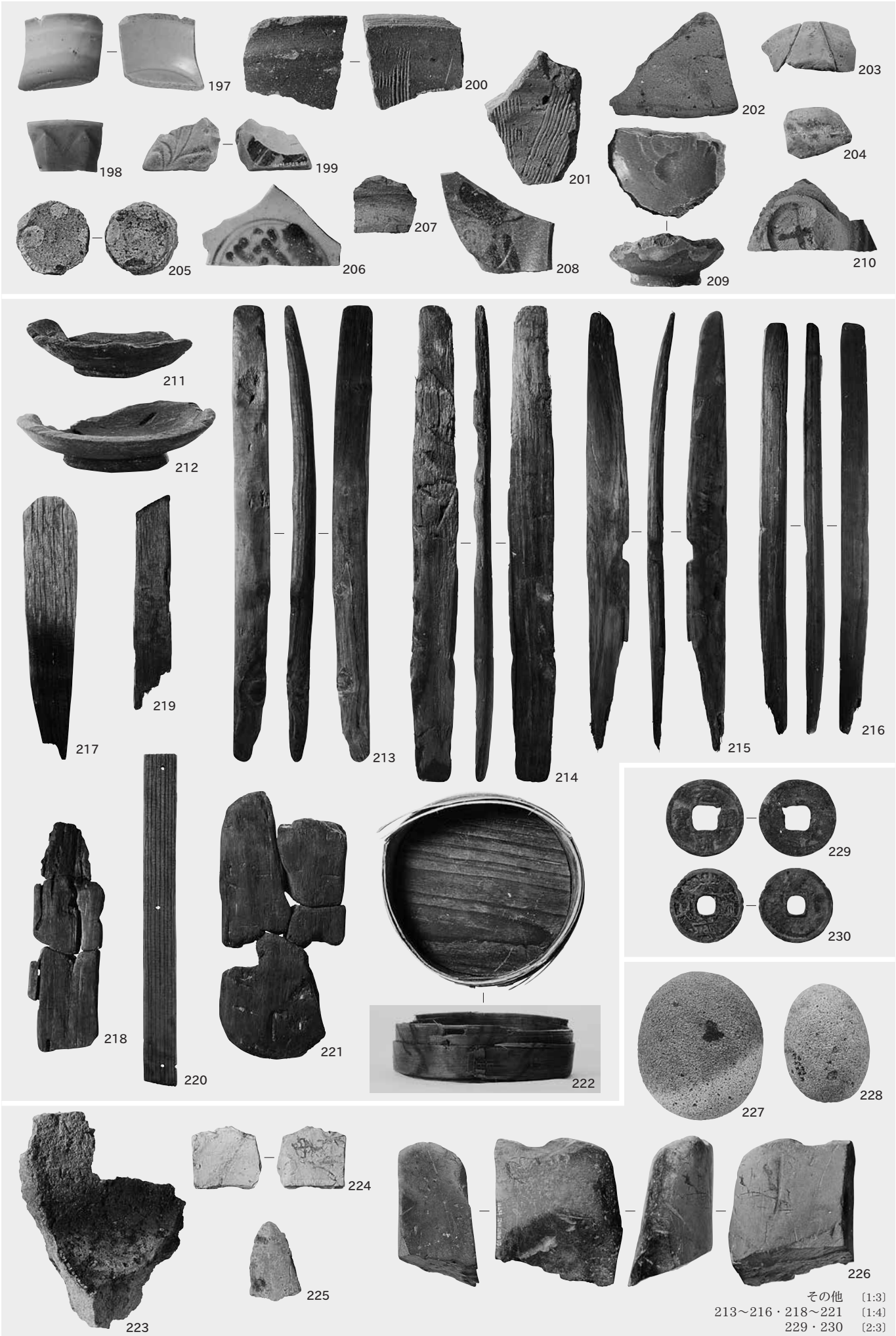
161


162

全て　〔1:3〕



その他　〔1:3〕
166　〔1:4〕
167～169・171・172　〔1:6〕
170　〔1:8〕

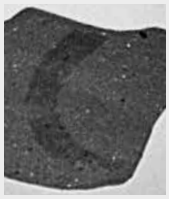


その他　〔1:3〕
213～216・218～221　〔1:4〕
229・230　〔2:3〕

13（底面）

9（底面）

24（底面）


3（側面）

19（底面）

14（底面）

5（底面）

10（底面）

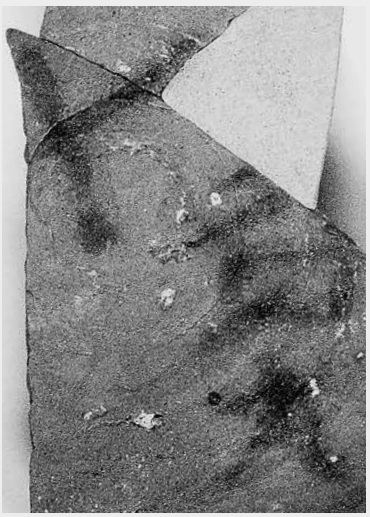
16（底面）

15（底面）

17（底面）

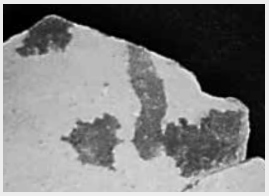
18（底面）

21（底面）


22（底面）

23（底面）

20（側面）


84（側面）

98（側面）

101（底面）

122（底面）

129（側面）

全て　〔1:1〕

報告書抄録

ふりがな	やまざきいせき
書名	山崎遺跡
副書名	一般国道８号柏崎バイパス関係発掘調査報告書
巻次	Ⅵ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 241 集
編著者名	石川智紀（新潟県埋蔵文化財調査事業団）、細井佳浩・山下　研・今井昭俊（以上、株式会社吉田建設）
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒956－0845　新潟県新潟市秋葉区金津 93 番地１　　TEL　0250（25）3981
発行年月日	2012（平成 24）年９月 28 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
山崎遺跡（やまざきいせき）	新潟県柏崎市大字藤井字山崎（にいがたけんかしわざきしおおあざふじいあざやまざき）1691-1番地（ばんち）ほか	15205	995	37 度 22 分 20 秒	138 度 35 分 15 秒	20100913 ～ 20110129	3,975	一般国道８号 柏崎バイパス建設

所収遺跡	種別	時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
山崎遺跡	集落跡	古代 （平安時代、９世紀第２四半期～後半）	掘立柱建物・井戸・土坑・ピット・溝・自然流路	須恵器、土師器、灰釉陶器、木製品（盤・曲物・祭祀具・箸状木製品・棒状木製品・部材・柱根等）、金属製品（刀子・鉄滓等）	自然流路に近接した古代集落の西側縁辺部。自然流路内の遺物集中区から出土した、「草花文」の墨書土器は類例も少なく、注目される。
	集落跡	中世 （12 世紀後半～15 世紀）	土坑・ピット・溝・性格不明遺構	青磁、白磁、天目茶碗、瀬戸美濃焼、珠洲焼、土師質土器、石製品（石鉢・砥石・磨石等）、木製品（漆器椀・曲物・下駄・祭祀具・棒状木製品・板状木製品・部材等）、金属製品（銭貨）	中世集落の北側縁辺部。区画溝は、居住域と生産域をつなぐ出入口部を構成する。
	遺物包含地	近世	溝・性格不明遺構	肥前系近世陶磁器、越中瀬戸焼等	

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 241 集

一般国道８号柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅵ

山　崎　遺　跡

2012(平成24)年９月 27 日印刷
2012(平成24)年９月 28 日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950－8570　新潟市中央区新光町４番地１
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956－0845　新潟市秋葉区金津 93 番地１
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　株式会社ハイングラフ
〒950－2022　新潟市西区小針１丁目 11 番８号
電話　025（233）0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 241 集

『山 崎 遺 跡』の訂正について

		誤	正
8 頁	下から 8 行目	［品田ほか 2008］	［品田 2008］
8 頁	下から 4 行目	［品田ほか 1990c］	［品田ほか 1990］
10 頁	上から 3 行目	［品田ほか 2008］	［品田 2008］
10 頁	上から 15 行目	［山本・高橋ほか 2003、山崎ほか 2005］	［山本ほか 2003、山崎ほか 2005］
23 頁	上から 13 行目	とくに 12E25・13E5・14E1 の周辺	とくに 13D25・13E5・14E1 の周辺
23 頁	上から 17 行目	［小田 2006］	［小田ほか 2006］
42 頁	上から 10 行目	荻野正博　1983 「越後国中世荘園の成立」『新潟史学』第16 号　新潟史学会	荻野正博　1986 「荘園と国衙領」『新潟県史 通史編 1 原始・古代』新潟県
42 頁	下から 11 行目	坂上有紀ほか　2003	坂上有紀　2003
42 頁	追加	猪狩俊哉　2004 「第Ⅴ章 5　木製品」『新潟県埋蔵文化財報告書　第 133 集　青田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	
42 頁	追加	大野隆一朗・徳間正一ほか　1990 「大地」『柏崎市史　上巻』新潟県柏崎市　市史編さん委員会	
42 頁	追加	品田高志ほか　1996 『田塚山遺跡群』柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第 21 集 新潟県柏崎市教育委員会	
43 頁	追加	橋本正博　2003 「第Ⅶ章　木製品」『八日市地方遺跡Ⅰ（第 2 分冊　遺物報告編）』石川県小松市教育委員会	
43 頁	追加	矢田俊文　1997 「第 6 章第 5 節　文書・日記が語る北陸―中世北陸のムラとマチと流通―」『中・近世の北陸』 北陸中世土器研究会編　桂書房	

5 頁　追加

2012（平成 24）年度

整理期間	2012（平成 24）年 4 月 1 日～ 9 月 28 日
整理主体	新潟県教育委員会（教育長　高井　盛雄）
整理実施機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村　正昭（事務局長）
管理	熊倉　宏二（総務課長）
庶務	伊藤　忍（総務課班長）
整理総括	北村　亮（調査課長）
整理指導	春日　真実（調査課課長代理）
整理担当	石川　智紀（調査課専門調査員）
嘱託員	間　栄子、小熊　紀子、室塚　真弓